

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告12

桜町遺跡（4次）

2012年

福島県教育委員会
財團法人福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告12

桜町遺跡（4次）

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

喜多方市と会津若松市を結ぶ延長13.1kmの地域高規格道路である会津縦貫北道路が、平成8年度に都市計画道路として決定され、平成9年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。この計画路線上にも先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、福島県教育委員会は、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等の所在を確認してきました。このため、福島県教育委員会では、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ね、現状での保存が困難なものについては記録として保存することとして、発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成23年度に発掘調査を行った、湯川村に所在する桜町遺跡の第4次調査成果をまとめたものです。

平成23年度の桜町遺跡の調査は、1～3次調査区と接する側道部分の調査のため比較的幅の狭く細長い範囲でしたが、弥生時代後期の周溝墓が8基、平安時代の掘立柱建物跡18棟と近接して同時期の井戸跡等が確認されました。周溝墓は、規模や形態に差があり、弥生時代最終末と考えられるものもありました。また周溝墓からは多数の弥生土器が出土しました。出土した土器の中には、在地の土器と北陸、北関東系の土器の3つの特徴を併せ持つ弥生土器も出土しています。平安時代の井戸跡は、井戸枠が良好な状態で残っており、内部からは土器類の他に木製の曲物の一部や祭祀用の木弓が出土しました。

今回の調査成果は、会津盆地における弥生時代後期の埋葬形態と他地域との社会的関係、平安時代の集落での生活の様相を明らかにしていく上で貴重な資料になると考えます。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただけることを切に願います。

最後に、発掘調査の実施にあたり、御協力いただいた湯川村教育委員会、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、財團法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平 成 24 年 12 月

福島県教育委員会

教育長 杉 昭 重

あ い さ つ

当財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発の対象地域に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。会津縦貫北道路にかかる埋蔵文化財については、平成9年度の表面調査を経て、平成13年度から発掘調査を実施しております。

本調査報告書は、平成23年度に発掘調査を実施した湯川村桜町遺跡第4次調査の成果をまとめたものです。今回の発掘調査は、1～3次調査と連続する範囲を対象とし、桜町遺跡のほぼ全容を把握することができました。弥生時代の周溝墓からは、地元の土器とともに北陸・北関東地域の特徴を持つ弥生土器も発見されました。当時の会津地域で行なわれた葬送祭祀の具体的な姿を知ることができるだけでなく、広域におよぶ活発な地域間交流を物語る貴重な資料となりました。また平安時代の井戸跡からは、土器類の他に木製曲物や丸木弓が出土しました。これらの遺物は、井戸の廃絶に関わる祭祀に用いられたものと考えています。

本報告書が歴史研究の基礎資料として利用されるばかりでなく、ふるさとの歴史を解明するための一助となれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成24年12月

財団法人 福島県文化振興財団

理事長 遠藤俊博

緒 言

1. 本書は、平成23年度に実施した会津縦貫北道路遺跡発掘調査にかかる桜町遺跡の第4次調査の成果を収録した。

桜町遺跡：河沼郡湯川村大字桜町字千刈他 遺跡番号：422-00030

2. 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省が負担した。

3. 福島県教育委員会は、発掘調査を財團法人福島県文化振興財團に委託して実施した。

4. 財團法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査 福島 雅儀 文化財主査 福田 秀生

5. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

6. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。

7. 本書に掲載した自然科学分析については、次の機関に委託し、その分析結果および考察は巻末に付章として掲載した。

付章1 桜町遺跡から出土した木質遺物の樹種 株式会社 加速器分析研究所

付章2 桜町遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定について 株式会社 加速器分析研究所

8. 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

9. 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から、協力・助言を頂いた。

湯川村教育委員会 福島県立博物館

穴沢 啓光 石川 日出志 植村 泰徳 梶原 文子 管野 和博

木本 元治 佐久間 正明 住田 雅和 田中 敏 長尾 修

中村 五郎 秦 昭繁 馬目 順一 柳沼 賢治 渡邊 朋和

用 例

1. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

湯 川 村…U K	桜 町 遺 跡…S K R	周 溝 墓・周 溝 状 遺 構…周	土 坑…S K
溝 跡…S D	掘 立 柱 建 物 跡…S B	柱 穴・小 穴…P	グ リ ッ ド…G
遺 構 外 堆 積 土…L	遺 構 内 堆 積 土…ℓ	沼 泽 火 山 灰…N P	
榛 名 山 二 ツ 岳 火 山 灰…F P			
2. 遺構挿図における遺構番号は、当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載している。
3. 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。
 - (1) 方位記号の表記がないものは、全て本書の上を真北とする。
 - (2) 桜町遺跡の遺構番号は、1次調査からの連続番号である。
 - (3) 縮尺は、各挿図版に示した。
 - (4) 遺構内の傾斜面は $\overline{\overline{M}}$ で表示した。
 - (5) 断面図および地形図における標高は、海拔標高を示す。
 - (6) 遺構外の自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は、算用数字で表記した。
〔例〕 遺構外自然堆積土：L I・L II…、遺構内堆積土：ℓ 1・ℓ 2…
4. 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。
 - (1) 縮尺は各挿図版に示した。
 - (2) 土器断面は、弥生土器・土師器を白ヌキ、須恵器はベタ黒とした。また、繊維混和痕が観察できる縄文土器には▲を付した。
 - (3) 挿図中の網点は、図版ごとに凡例を示した。
 - (4) 遺物番号は挿図版ごとし、文中では下記のように省略して表記した。また、掲載遺物の出土位置・層位は、右下に示している。 〔例〕 図28の10番の遺物…28-10
5. 本書における遺物写真で個々に付した番号は、挿図番号と一致する。
6. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略した。

目 次

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 桜町遺跡の調査経過	2

第2章 調査成果

第1節 遺構の分布	5
第2節 周溝墓	8
第3節 堅穴状遺構	31
第4節 掘立柱建物跡	33
第5節 土坑	44
第6節 溝跡	72
第7節 その他の遺構と遺物	77

第3章 まとめ

第1節 4次調査の成果	83
第2節 桜町遺跡の調査意義	97

付 章

1 桜町遺跡から出土した木質遺物の樹種	149
2 桜町遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定について	155

挿図・表・写真目次

[挿 図]

図 1 会津綱貫北道路位置図	1
図 2 桜町遺跡調査範囲	3
図 3 4次調査遺構配置図（1）	6
図 4 4次調査遺構配置図（2）	7
図 5 5号周溝墓（1）	9
図 6 5号周溝墓（2）	11
図 7 5号周溝墓出土遺物（1）	12
図 8 5号周溝墓出土遺物（2）	13
図 9 5号周溝墓出土遺物（3）	14
図 10 18・27号周溝墓	16
図 11 19号周溝墓・出土遺物	18
図 12 25号周溝墓・出土遺物、37号溝跡	19
図 13 26号周溝墓	21
図 14 26号周溝墓出土遺物（1）	22
図 15 26号周溝墓出土遺物（2）	23
図 16 27号周溝墓出土遺物	25
図 17 28号周溝墓・出土遺物	26
図 18 29号周溝墓	28
図 19 29号周溝墓出土遺物（1）	29
図 20 29号周溝墓出土遺物（2）	30
図 21 9号竪穴状遺構	31
図 22 9号竪穴状遺構出土遺物	32
図 23 7号掘立柱建物跡	33
図 24 18号掘立柱建物跡	35
図 25 58号掘立柱建物跡	37
図 26 64号掘立柱建物跡	39
図 27 65号掘立柱建物跡	41
図 28 66号掘立柱建物跡	42
図 29 7・18・64号掘立柱建物跡出土遺物	43
図 30 164号土坑	45
図 31 164号土坑出土遺物（1）	46
図 32 164号土坑出土遺物（2）	47
図 33 165号土坑	48
図 34 165号土坑出土遺物	49
図 35 184・192号土坑出土遺物	51
図 36 163号土坑	54
図 37 163号土坑出土遺物（1）	55
図 38 163号土坑出土遺物（2）	56
図 39 163号土坑出土遺物（3）	57
図 40 163号土坑出土遺物（4）	58
図 41 163号土坑出土遺物（5）	59
図 42 163号土坑出土遺物（6）	60
図 43 163号土坑出土遺物（7）	61
図 44 163号土坑出土遺物（8）	62
図 45 163号土坑出土遺物（9）	63
図 46 163号土坑出土遺物（10）	64
図 47 166～169・171A・171B・175・ 178号土坑	66
図 48 170・174・181～183・ 185号土坑	67
図 49 184・186号土坑	68
図 50 187・189～192号土坑	69
図 51 193～198号土坑	70
図 52 170・171・175・177・183・190・ 194・197号土坑出土遺物	71
図 53 15・49・51・53号溝跡	73
図 54 1・10・17・18号溝跡出土遺物	74
図 55 37号溝跡出土遺物	76
図 56 小柱穴出土遺物	77
図 57 遺構外出土遺物（1）	79

図58	遺構外出土遺物（2）	80
図59	遺構外出土遺物（3）	82
図60	桜町式土器におけるキメラ土器	88

[表]

表1	会津綾貫北道路関連遺跡の調査履歴	2
----	------------------	---

[写真図版]

1	調査区近景	105
2	調査区近景	106
3	5号周溝墓	107
4	26号周溝墓（1）	108
5	26号周溝墓（2）	109
6	28号周溝墓	110
7	29号周溝墓（1）	111
8	29号周溝墓（2）	112
9	調査区①遺構検出状況	113
10	19号周溝墓	114
11	25号周溝墓	115
12	27号周溝墓	116
13	調査区①完掘状況	117
14	7号掘立柱建物跡	118
15	18号掘立柱建物跡検出状況	119
16	7・66号掘立柱建物跡	119
17	58号掘立柱建物跡	120
18	64号掘立柱建物跡	121
19	65号掘立柱建物跡	122
20	66号掘立柱建物跡全景	123
21	9号竪穴状遺構全景	123
22	土坑（1）163号土坑	124
23	土坑（2）163号土坑	125
24	土坑（3）164号土坑	126
25	土坑（4）165号土坑	127
26	土坑（5）	128
27	土坑（6）	129

図61	桜町遺跡出土のB群土器	91
図62	参考資料	95

表2	桜町遺跡の調査履歴	4
----	-----------	---

28	溝跡	130
29	5号周溝墓出土土器（1）	131
30	5号周溝墓出土土器（2）	131
31	5号周溝墓出土土器（3）	132
32	5号周溝墓出土土器（4）	132
33	26号周溝墓出土土器	133
34	26号周溝墓出土土器細部	134
35	26号周溝墓、64号掘立柱建物跡 出土土器	134
36	19・25・27号周溝墓出土土器	135
37	26・28号周溝墓出土土器	135
38	29号周溝墓出土土器	136
39	164・165号土坑出土土器	136
40	9号竪穴状遺構、163・ 171号土坑出土土器	137
41	171・177号土坑、37号溝跡 遺構外出土土器	138
42	164号土坑出土木質遺物	138
43	石器・鉄製品	139
44	163号土坑出土木質品	140
45	163号土坑出土井戸枠（1）	140
46	163号土坑出土井戸枠（2）	141
47	163号土坑出土井戸枠（3）	142
48	163号土坑出土井戸枠（4）	143
49	163号土坑出土井戸枠（5）	144
50	切り欠き・工具痕	145
51	植物種子圧痕	146

付 章 1

[表]

表 1 樹種同定結果 149

[写真図版]

図版 1 木材 (1) 153

付 章 2

[表]

表 1 157

表 2 時期別・器種別種類構成 150

図版 2 木材 (2) 154

表 2 158

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

会津縦貫北道路の概要 会津縦貫北道路は、会津地域北部を南北に貫く地域高規格道路（一般国道121号）である。喜多方市関柴町大字西勝を基点とし、湯川村を経て会津若松市高野町大字中沼を終点とする全長13.1km、暫定2車線の自動車専用道路として計画されている。将来的には喜多方市と山形県米沢市を結ぶ「国道121号大峠道路」、会津若松市と南会津町を経て栃木県日光市を結ぶ「会津縦貫南道路」、「栃木西部・会津南道路」と接続することが計画されている。

会津縦貫北道路は、平成23年度には基点の喜多方ICから湯川北ICまでが開通した。平成25年度までに湯川北ICから会津坂下河東IC間、平成27年度には終点まで開通する予定である。

平成23年度までの埋蔵文化財の調査 会津縦貫北道路の建設に伴う埋蔵文化財の調査については、事業計画の策定を受けて、福島県教育委員会と建設省（現国土交通省）の間で協議を実施した。この協議の結果、福島県教育委員会は平成9年度から路線にかかる埋蔵文化財の調査を開始した。

平成9年に実施した表面調査は、喜多方市から湯川村までの区間を対象とした。周知の遺跡21箇所、遺跡推定地3箇所を確認した。平成19年度は、終点となる会津若松市高野町地区の表面調査を実施した。周知の遺跡4箇所、遺跡推定地2箇所を確認した。

試掘調査は、工事計画において優先箇所となる地点を対象に、平成12年度から実施された。平成12年度は喜多方市塙川町遠田地区に所在する荒屋敷遺跡、麻生館遺跡の試掘調査から開始された。喜多方市に所在する遺跡の試掘調査は、平成18年度までにすべて終了した。湯川村に所在す

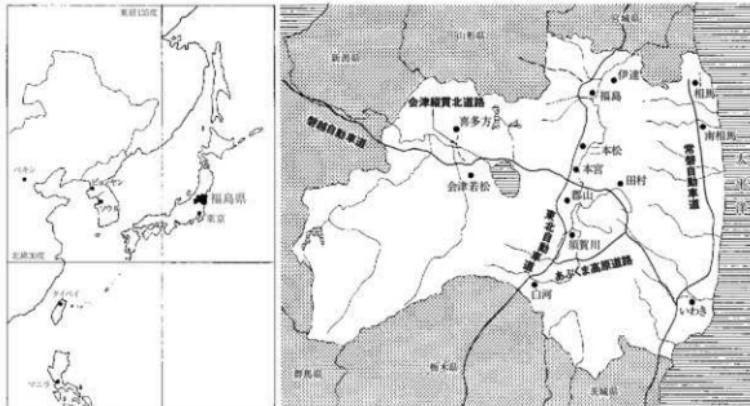


図1 会津縦貫北道路位置図

第1章 調査経過

る遺跡の試掘調査は平成14～23年度に実施された。平成23年度からは会津若松市に所在する西木流C遺跡などを対象とした試掘調査が開始された。

発掘調査は、年毎に規模の大小があるものの、平成13年度から今年度まで継続して実施している。平成13年度は麻生館遺跡と荒屋敷遺跡の発掘調査が行われた。荒屋敷遺跡は平成17年度まで継続された。平成16年度は桜町遺跡の発掘調査が行われた。平成17年度からは高堂太遺跡（下高額館跡を含む）の発掘調査に着手し、平成20年度まで継続された。平成19年度には沼ノ上遺跡の発掘調査が実施された。平成21～23年度は桜町遺跡の2～4次調査を実施した。

第2節 桜町遺跡の調査経過

桜町遺跡の調査履歴 桜町遺跡は平成9年度に実施した表面調査において発見された。その面積は490,000m²と広範囲に及ぶ遺跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録された。会津縦貫北道路の路線にかかる77,900m²が試掘対象面積となった。

試掘調査は、平成15・16・20・22・23年度に実施された。平成23年度は工事計画が一部変更されたことから、路線西側を流れる水路付近の細長い範囲150mが試掘対象に追加された。試掘調査によって、弥生時代と平安時代の遺構や遺物が多数確認され、36,650m²の保存範囲が確定した。

発掘調査は、平成16年度に1次調査、平成21年度から今年度まで継続して2～4次調査を実施した。これまでの発掘調査の結果、弥生時代の周溝墓や平安時代の集落と中世後半期の館跡を確認した。弥生時代の調査成果は、会津地域における弥生時代終末から古墳受容期の社会について、その具体的な姿を知ることができる貴重な資料が得られた。これまでの研究成果の再検討が迫られる重要な遺跡であることが判明した。

平成23年度の調査経過 今年度の発掘調査は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の影響により、着手時期が大幅に遅れた。5月19日に福島県教育委員会と国土交通省東北地方整備局

表1 会津縦貫北道路関連遺跡の調査履歴

遺跡名 (調査次数)	調査内容	調査年度	報告書名
麻生館遺跡	分布	2000年	県内道路分布調査報告7
	発掘	2001年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1
荒屋敷遺跡(1～5次)	分布	2000年～2002・2004年	県内道路分布調査報告7～9・11
	発掘	2001年～2005年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2～6
高堂太遺跡(下高額館跡) (1～4次)	分布	2005・2006年	県内道路分布調査報告12・13
	発掘	2005年～2008年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告6～9
沼ノ上遺跡	分布	2002・2007年	県内道路分布調査報告9・14
	発掘	2007年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告8
桜町遺跡(1～4次)	分布	2003・2004・2008・2010年	県内道路分布調査報告10・11・15・18
	発掘	2004・2009年～2011年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5・10～12
西木流C遺跡	分布	2011年	県内道路分布調査報告19
	発掘	—	—



図2 桜町遺跡調査範囲

第1章 調査経過

郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興事業団（当時）の3者で現地協議を行い、調査対象と事業計画を確認した。2次調査の西側側道を調査区①、1・3次調査の南側側道を調査区②、1・3次調査区の北側側道を調査区③、村道部分を調査区④の合計5,900m²を調査対象とした。この協議では、調査区①・②から着手することとした。また生活道路や農業用通路などの迂回路を取り付ける工事が必要であるため、各調査区の終了時期と迂回路設置工事の期間について、別途協議を持つことが決められた。さらに村道は水道管が埋設されていることから、道路基底面までは工事側で除去することとし、この時期は工事計画から11月中旬頃が予定された。

5月下旬から6月上旬は調査にかかる準備を進め、6月14日から現地作業に着手した。6月中は調査区①・②の表土除去を開始すると共に、作業員雇用事務と調査事務所の設置などの整備を行う。7月4日からは約40名の作業員を雇用し、遺構検出作業を進めた。調査区①では周溝墓を4基確認した。調査区②では弥生時代と平安時代の遺構や遺物の密度が高いことが判明した。各調査区の迂回路付け替え工事は稲刈りが終了した時期から着手し、調査の進捗にあわせて順次迂回路を取り付けて通路部分の調査に着手した。調査区①は9月末頃、調査区②は11月上旬には調査が終了した。また9月下旬からは、調査が終了した地点から埋め戻しを行い、部分的に工事側に引き渡した。

調査区③は9月上旬に表土の除去を開始した。北部は削平が著しく遺構や遺物が希薄であったが、南部は平安時代の掘立柱建物跡や近現代の溝跡を確認した。17・18号溝跡は約2mと深く、調査に手間がかかる。10月中旬頃には調査が終了した北部から順に埋め戻し、南部は11月中旬には完全に埋め戻しが終了した。

11月下旬に調査区④の道路基底部の除去が開始された。村道建設や水道管理設に伴い遺構確認面が失われていることが判明した。遺構や遺物の確認調査は、11月30日までに終了した。

12月は調査事務所や作業員休憩所などを撤収した。また来年度の調査準備として、会津若松市西木流C遺跡に保管庫を設置し、発掘機材を移動した。12月15日には関係機関で調査成果を確認し、今年度の現地作業をすべて終了した。

発掘調査報告書は、財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部が作成した。発掘調査で得られた諸記録や出土資料は、福島県文化財センター白河館で保管する。

（福田）

表2 桜町遺跡の調査履歴

調査内容	調査年 (年号)	調査面積 (保存面積)	報告書名(刊行年)	備考
表面調査	1997年(平成9年)	77900m ²	県内遺跡分布調査報告4(1998年)	工区内面積
	2003年(平成15年)	8200m ²	県内遺跡分布調査報告10(2004年)	保存面積
	2004年(平成16年)	25800m ²	県内遺跡分布調査報告11(2005年)	保存面積
	2008年(平成20年)	2500m ²	県内遺跡分布調査報告15(2009年)	保存面積
	2010年(平成22年)	150m ²	県内遺跡分布調査報告18(2011年)	保存面積
発掘調査	2004年(平成16年)	4200m ²	会津継貫北道路遺跡発掘調査報告5(2005年)	
	2009年(平成21年)	11200m ²	会津継貫北道路遺跡発掘調査報告10(2011年)	
	2010年(平成22年)	11000m ²	会津継貫北道路遺跡発掘調査報告11(2011年)	
	2011年(平成23年)	5900m ²	会津継貫北道路遺跡発掘調査報告12(2012年)	本書

第2章 調査成果

第1節 遺構の分布

今回の4次調査は、1～3次調査に接する道路部分を対象とした。調査区の幅が最大8m、全長が約700mに及ぶ細長い範囲である。そのため調査区の呼称については、今年度の調査経過と遺構の分布状況から調査区①～④とした。調査区①は平成21年に実施した2次調査区の南側、調査区②は平成16・22年に実施した1・3次調査区の南側、調査区③は1・3次調査の北側、調査区④は2次調査区と3次調査区南部の間を通る村道部分である。

調査区① 2次調査で確認した18・19号周溝墓の西半部分と、新たに25・27号周溝墓を確認した。大型で前方後円形となる16号周溝墓の周囲を取り囲むように分布する小型円形周溝墓群である。桜町遺跡における最終段階の周溝墓で、会津地域における弥生墓制から古墳の出現までの墓制変化を解き明かす重要な資料である。

調査区② 1・3次調査と連続する弥生時代と平安時代の遺構群を確認した。調査区②の東半部は比較的削平が少なく、弥生時代と平安時代の遺物を含むLIIとした黒色土が遺存していた。他の調査区に比べれば、遺構や遺物の密度が高い。

弥生時代の周溝墓は、いずれも周溝の四隅が途切れる形状で、桜町遺跡でも最古段階の周溝墓である。一辺12m程の大型周溝墓（5号周溝墓）の他に、一辺5m程の小型周溝墓（26・28・29号周溝墓）を確認した。その他に桜町I式期の土坑（164・165号土坑）を確認した。直径が15m、深さ1.0m程の規模である。土坑の底面に割材を用いた木組みを基礎とし、土坑の中央を残し、埋め戻す構造で、一見大きな柱穴とも指摘できる。丸太を割り貫いた井戸枠を欠くものの、木組みを用いた基礎構造は2次調査で確認した井戸跡（93号土坑）に類似する。

平安時代の遺構は、掘立柱建物跡（母屋・小型倉庫）と井戸跡がセットで分布する。井戸跡（163号土坑）は板材を井桁に組み上げて井戸枠としている。井戸内部からは須恵器長頸瓶や土師器壺など土器類の他に弓・曲物底板など木製品が出土した。特に弓は井戸の廃絶に関わる祭祀遺物である。

調査区③ 圅場整備による削平が著しく、遺構・遺物は希薄である。西側では平安時代の掘立柱建物跡1棟を確認した。東側では近現代の溝跡を3条（15・17・18号溝跡）確認した。この溝跡は、遺跡の東側を流れる潤川の水を木流地区から八日町地区に向かって流す水路である。江戸時代後半期に開削され、昭和30年代に実施された圃場整備によって埋められている。会津地域でも有数の米どころである湯川村において、米作りに大きく貢献した水路の一つであろう。

調査区④ 村道や水路の建設に伴う掘削によって、遺構確認面が既に損なわれていた。そのため遺構・遺物は極めて希薄で、60号溝跡の一部を確認しただけである。

（福田）

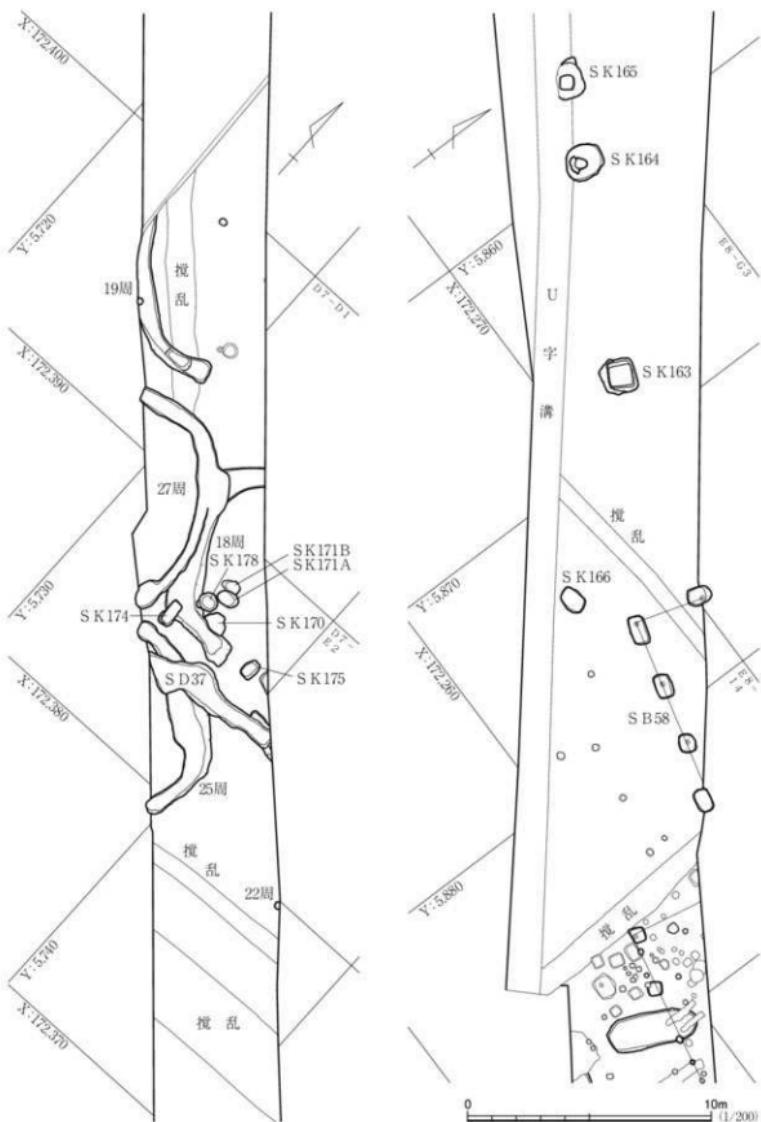


図3 4次調査遺構配置図（1）

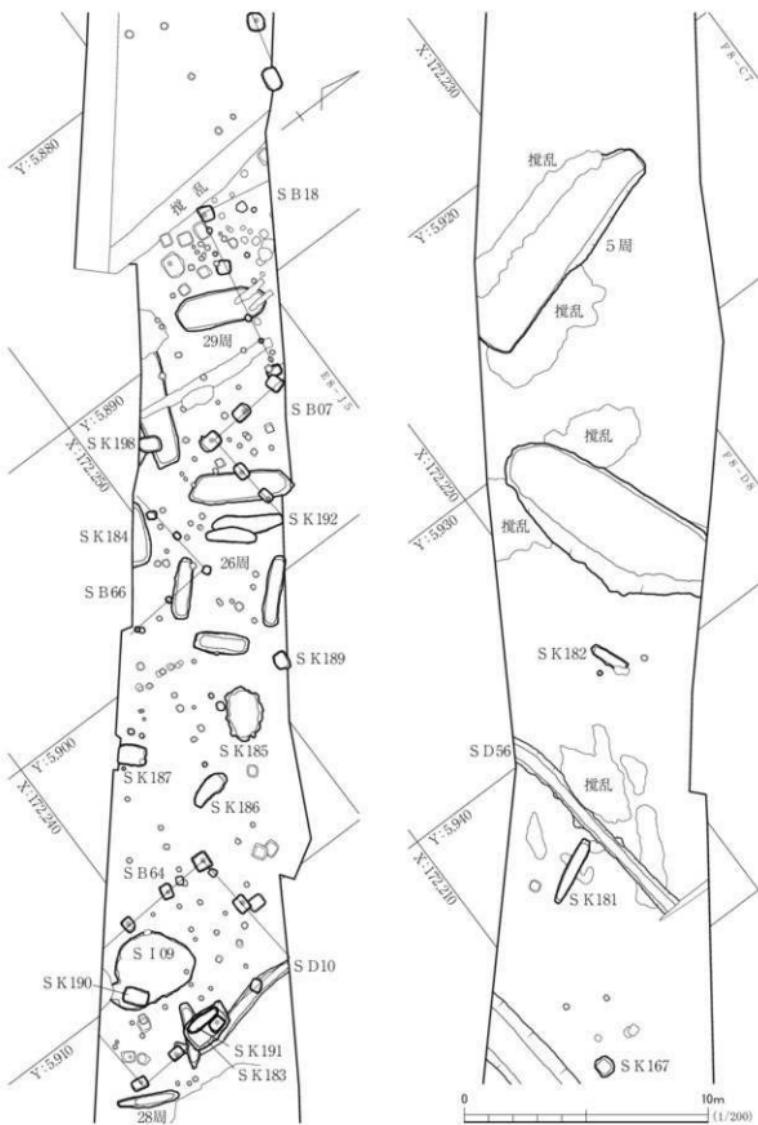


図4 4次調査遺構配置図（2）

第2節 周溝墓

4次調査では周溝墓を8基確認した。調査区①では、2次調査区に続く18・19号周溝墓とその西側に25・27号周溝墓が位置する。いずれも小型の円形周溝墓で、前方後方形となる大型の16号周溝墓を取り囲むように分布する。16号周溝墓に後続する桜町Ⅲ式期に属し、桜町遺跡では最終段階の周溝墓である。調査区②では、1次調査区で調査した5号周溝墓の南半部、新たに26・28・29号周溝墓を確認した。これらは桜町I式期の周溝の四隅が切れる方形周溝墓である。

5号周溝墓

遺構(図5・6、写真3)

5号周溝墓は、平成16年度に実施した1次調査において北溝と東溝、南溝の一部を調査した。今回の4次調査では南溝と西溝を確認したことで、周溝墓の全容を把握することができた。本項では1次調査の成果(『会津継貫北道路遺跡発掘調査報告5』)を訂正・補完し、改めてまとめる。

5号周溝墓はF8-C6~C8、D6~D8グリッドに位置する。現況が畠地であったため、水田部に比べ前平の規模が少ない。耕作による搅乱が顕著であるものの、周溝などは比較的残りが良い。東溝付近の標高が185.8mと最も高く、北溝から西溝付近が185.5mと低い。遺構検出面は、南溝東半部と西溝の北半部はLⅢaとする沼沢火山灰を含む黄褐色土、南溝の西半部から西溝の南半部がLⅢcとする黄褐色砂層の上面で確認した。

5号周溝墓の周囲は、弥生時代と平安時代の遺構が多数分布する。東溝には2号掘立柱建物跡、南溝には1号溝跡など平安時代の遺構が重複する。一方、周溝で囲まれた墳丘部には柱穴などが確認できない。2次調査の9・16号周溝墓と同様に、平安時代まで墳丘が遺存し、これを避けるようなくる立柱建物を建てたのであろう。弥生時代に属する遺構との重複はないが、東溝を共有するように4号周溝墓が分布する。さらに墳丘部分では41号土坑が分布する。2次調査で確認した9号周溝墓の埋葬施設である69号土坑と比較すると、墳丘内における土坑の位置やその規模などが共通する。ここでは41号土坑が5号周溝墓の埋葬施設の一つとなる可能性を指摘しておく。

5号周溝墓の墳丘部の平面形は、東西方向に長い長方形をなす。周溝内法の規模は、南北辺の長さが12.5m、東西辺の長さが12.9mを測る。周溝の四隅が途切れる方形周溝墓の中では、9号周溝墓に次ぐ規模で、桜町遺跡では大型周溝墓の一つとなる。東溝を基準とする主軸方向は、北に対して10度傾く。周囲に分布する1号周溝墓の主軸方向とは約30度ずれる。

各周溝の平面形は橢円形を基調とする。東溝は両端部が外側に肥大する特徴が見られ、南溝は外側が弧状に湾曲する。各周溝端部の造りは、墳丘の対角線に沿って直線的に延びる。特に、墳丘南東にあたる東溝南端と南溝東端は鋭角に外側に張り出す。各周溝の規模は、東溝の長さが11.0m、中央部の幅が1.84m。南溝の長さが11.4m、幅が4.15m。西溝の長さが10.0m、幅が2.5m前後である。

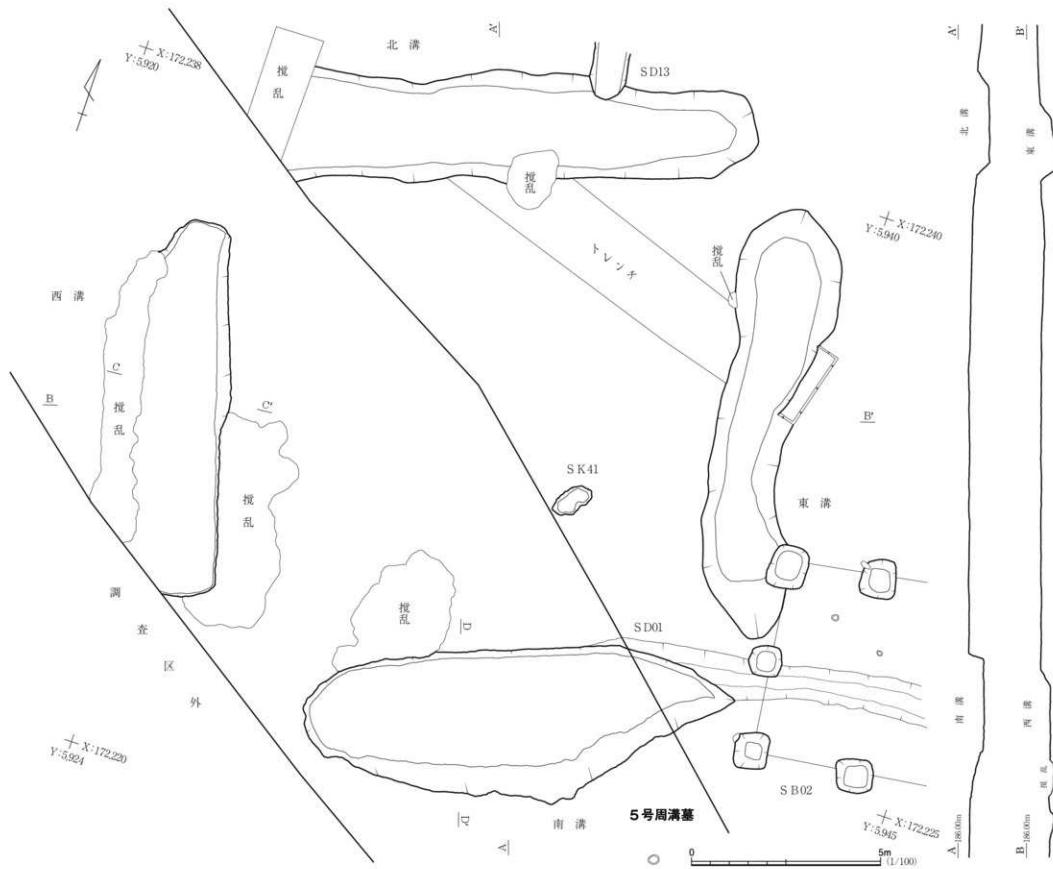
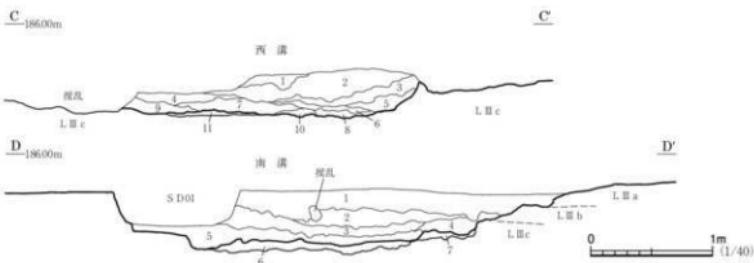


図5 5号周溝墓(1)



5号圆满墓西满堆积土 (CC')

- | | |
|--|--|
| 1 黒色土 10YR2/1 (NP極少量、褐色砂含む) | 7 黒褐色土 10YR3/2 (NP極少量、褐色砂をブロックで多量含む) |
| 2 黒褐色土 10YR2/3 (NP極少量、褐色砂含む) | 8 褐暗色土 10YR3/3 (NP極少量、褐色砂含む) |
| 3 暗褐色土 10YR3/3 (NP極少量、褐色砂をブロックで含む) | 9 黑褐色土 10YR3/2 (NP極少量、褐色砂少量含む) |
| 4 黒色土 10YR2/1 (NP極少量、褐色砂含む) | 10 褐暗色土 10YR4/4 |
| 5 暗褐色土 10YR3/3 (NP極少量、褐色砂をブロックで含む) | 11 暗褐色土 10YR3/3
(NP極少量、黒色土と褐色砂がブロックで含む) |
| 5号周溝灌溉堆溝耕土 (DDY) | |
| 1 黑褐色土 10YR2/3
(NP・炭化物少量、黄褐色土粒少量、褐色砂含む) | 4 にふり黒褐色土 10YR4/3
(NP極少量、黄褐色土塊多量、壁面の崩落土含む) |
| 2 黑色土 10YR2/1
(NP・炭化物少量、褐色砂、黄褐色土粒少量含む) | 5 褐暗色土 10YR3/3
(NP極少量、褐色砂少量、黄褐色土塊多量含む) |
| 3 暗褐色土 10YR3/3
(NP・炭化物少量、褐色砂、黄褐色土粒少量含む) | 6 にふり黃褐色土 10YR4/3
(NP極少量、黃褐色粘土・灰褐色粘土多量、黒色土含む) |
| | 7 にふり黒褐色土 10YR4/3 (NP極少量、黒色土塊含む) |

図6 5号周溝墓(2)

北溝の長さが12.2m、幅が3.0mを測る。

周溝の壁面は、墳丘側壁面の方が外側壁面よりも急峻な傾斜となる。周溝の底面は、微細な凹凸があるものはほぼ平坦で、両端部に向かってわずかに浅くなる。南溝と西溝では、底面の整地土が認められた。この整地土について、1次調査において周溝内埋葬とする記述を訂正する。

周溝内の堆積土は上層、下層、底面の整地土と3つに分けた。上層は黒褐色土を基調とする自然流入土である。南溝の1～4層、西溝の1～5層に相当する。下層は底面を覆う土で、埴丘崩落土を含む自然堆積土である。南溝の5層、西溝6～10層にあたる。底面の整地土は、黒色土塊と地山を起源とする黄褐色土塊が混ざった人為堆積土である。西溝11層、南溝6・7層に相当する。東溝と北溝では整地土を確認できない。また整地土を除去した後、周溝の掘形底面は凹凸が顕著である。これらは2次調査の9号周溝墓で確認された底面掘形の状態と整地土の性質に極めて類似する。

遺物 (図7~9、写真29~32)

4次調査では周溝内から弥生土器と石器が出土した。その出土状況は上層・下層とした堆積土中から出土したもののが大半を占める。南溝の整地土から出土した弥生土器片は数点だけである。また、周溝内に人為的に土器類を埋設した状況も見られないことから、墳丘上に置かれた供獻土器が転落するなど埋没過程において自然流入土とともに混入したものと判断した。

図7は太い沈線で文様を描く、天王山式土器の影響が強い在地土器を示した。1~3は波状口縁となる。2・3は太い沈線で文様を描き、口縁部下端に交叉刺突による立体的な波状降線を作つ

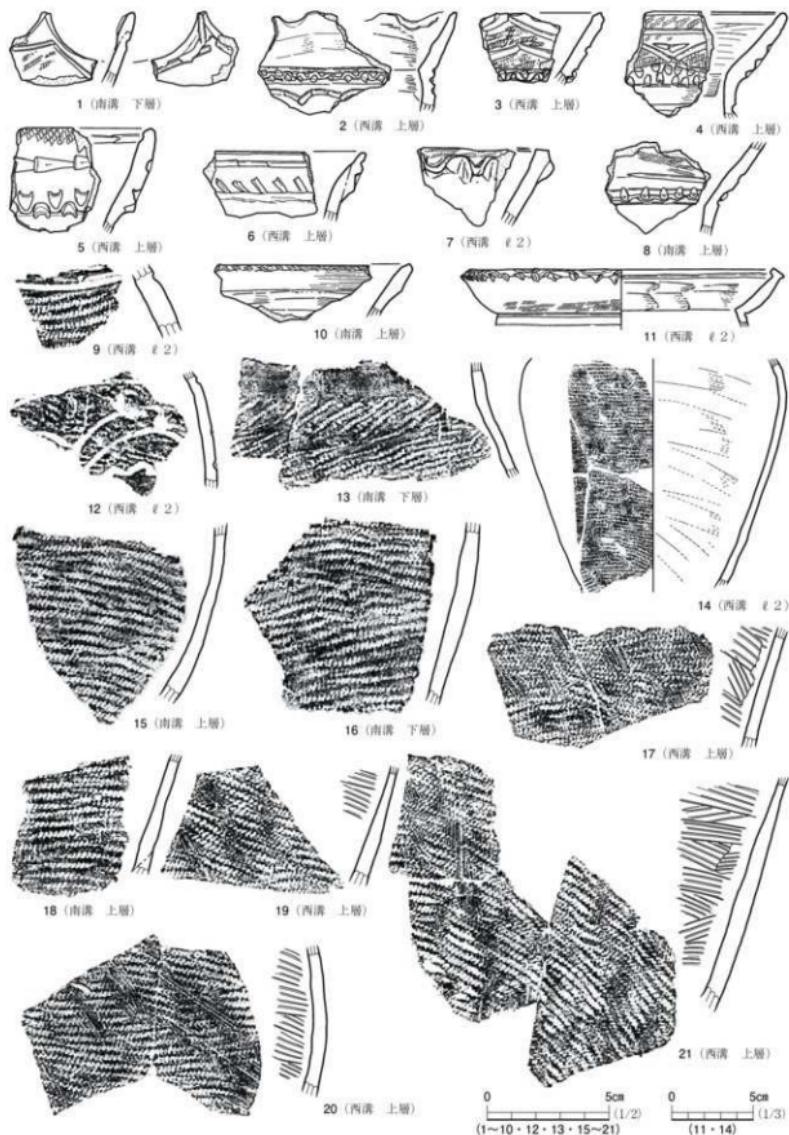


図7 5号周溝墓出土遺物（1）

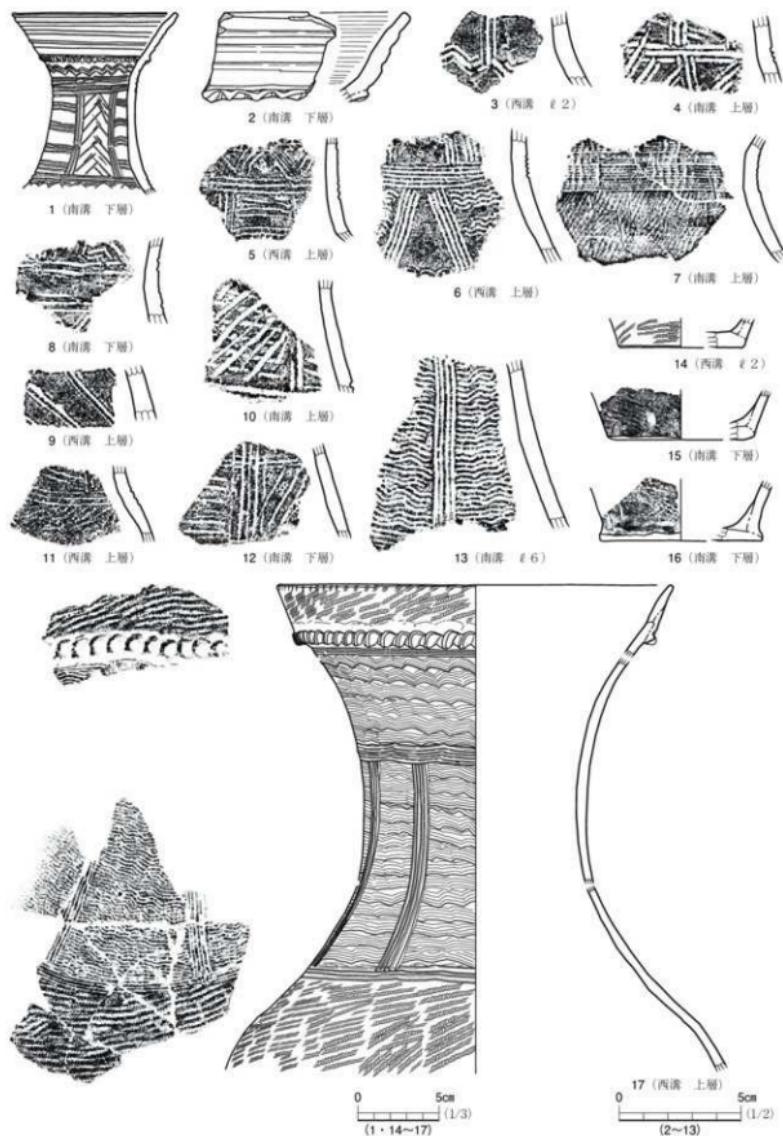


图8 5号周溝墓出土遗物（2）

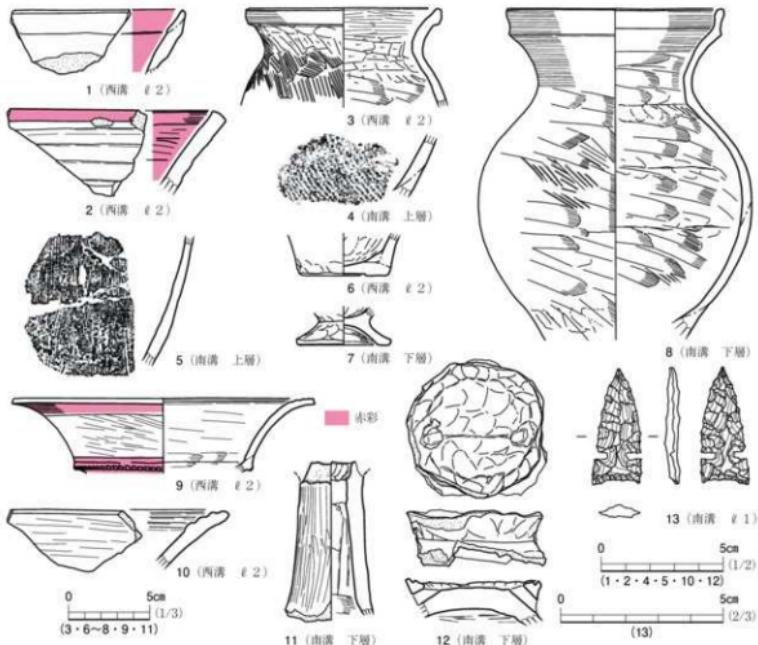


図9 5号周溝墓出土遺物（3）

ている。7は口唇部下端に粘土紐を巡らし、この部分に交互刺突を施す。10は口唇部に繩圧痕によるキザミが施される。11は口唇部にヘラ状工具によるキザミと連弧文が充填されている。17～21は同一個体である。地文となる撚糸文の原体がこすれた痕跡が観察できる。

図8はクシ描文を描く、北関東地域の土器に類似するものをまとめた。縦位区画または鋸歯区画の内部に波状文や格子文が充填される。1は口縁部が受け口状に開く長頸壺である。口縁部は浅い沈線状の擬凹線が巡る。口縁部下端には段が作られ、円形竹管を用いた交互刺突文が施される。しかし、この交互刺突は途中から単なるキザミとなる。頸部の文様は、クシ描文が多用される。頸部上端は押し引き状に横線を2段巡り、その下に縦位文を引き4つに区画する。区画内は連続刺突による横線を3段、山形文6段が交互に充填される。頸部と体部の境は横線と下向きに開く連弧文が描かれる。在地土器と北陸系土器、北関東系土器の要素が混ざった独特な土器である。7は櫛式土器に類似し、廉状文が描かれる。2は擬凹線と指頭によるキザミが組み合わされた土器である。13・17は長頸壺で同一の個体である。『会津5』図19～18も同一個体である。口縁部下端の肥厚した段に指頭によるキザミが巡る。口唇部には繩圧痕のキザミが巡り、外面には撚糸文が施される。頸部は5本歯のクシ歯状施文具を用いて文様が描かれる。横位の連続波状文が密に施され、頸部下

半が縦位に区画される。体部下半は地文となる捺糸文が施される。

図9は北陸系土器と石器を示した。1は壺または壺の口縁部破片である。内面に粘土紐を継ぎ足して肥大した口縁部を作る。2は壺の口縁部であろう。口唇部が面取りされる。内面にはベンガラを用いて赤彩される。3は壺である。外面の器面調整は、口縁部がヨコナデ、頸部はカキトリ、体部にはハケメが観察できる。内面は体部と頸部の境にカキトリ痕が顕著に残る。7は小型壺の台であろうか。8は壺である。土器が摩滅して接合しないが一個体となる。口縁部幅が短く、内外面ともに明瞭な段が作られる。体部の器形は球形で、底部に向かってすぼまる。器面の調整は口縁部から頸部はヨコナデで仕上げられる。体部は内外面ともにハケメで器面を均し、指ナデで整えられる。9～11は高壺である。9は壺身が外反して開く。壺身下端に明瞭な段が作られ、ヘラ状工具によるキザミが巡る。口唇部は平坦に面取りされ、断面形が四角形になる。口縁部の内面が肥厚した凸線が2条巡る。外面は横位のミガキが施され、口唇部と段の部分がベンガラを用いて赤彩される。内面は摩滅して不鮮明であるが、指ナデやミガキが観察できる。12は蓋である。ツマミ部に1対の貫通孔が認められる。13はいわゆるアメリカ式石錠である。石材は珪質頁岩である。

ま と め

5号周溝墓は周溝の四隅部が途切れる方形周溝墓である。桜町遺跡の中では、9号周溝墓に次ぐ規模の大型周溝墓である。東溝を共有する4号周溝墓との規格性は伺うことができる。年代については、周溝墓の形態と出土遺物の特徴から、桜町I式期と考えている。
(福田)

18号周溝墓

遺構 (図10、写真13)

2次調査で東半部の調査を実施した遺構である。農道を除去した段階で検出した。調査区①の南部、D7-D1グリッド付近である。この部分の遺構は、近年の圃場整備に伴う搅乱により大きく損なわれていた。さらに平安時代の溝跡と土坑も重複していた。このことから、遺構堆積土との区別は判然とはしなかった。そこで170号土坑の調査では、この周溝底面まで掘り下げてしまった。

また27号周溝墓と重複部分も圃場整備時の重機通行による損傷が著しく、検出面において新旧関係の明確な把握は出来なかった。土層断面の観察からは、18号周溝墓の堆積土の方が新しく形成されたように見えた。しかし明確ではない。

周溝の形態は、周囲の遺構を掘り下げた段階で明らかになった。南西側に土橋を残す形状である。土橋部外端中央と北西周溝中央を結ぶ線で軸線を求める、N-25°-Wとなる。全長8.7m、幅9.0mである。埴丘部は主軸長が6.7m、幅が6.7mである。土橋部の幅は2.2mである。土橋両端は、南西側が周溝幅ひとつ分、外にずれている。桜町遺跡の周溝墓では小型である。

北東側に大型の16号周溝墓が設けられ、これに接して南西側に小型周溝墓が密集する地区に造られた1基である。北側に19号周溝墓、東側に20号周溝墓、西側に27号周溝墓がある。

確認した遺構は、周溝の基底面がわずかに遺存していたにすぎなかった。2次調査では、周溝外

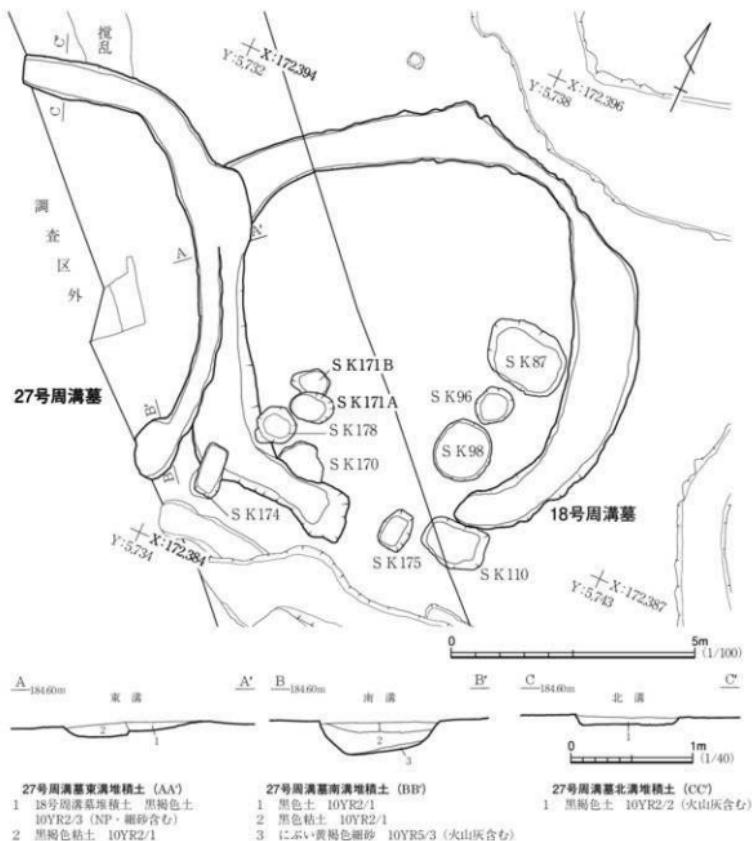


図10 18・27号周溝墓

縁の形状を重視して円形周溝とした。しかし今回の調査によって、墳丘部の基底面は、隅円方形を基本としていることが判明した。土橋部を除く三辺の墳丘外端線は、いずれもわずかに弧線を描いて延びているが、円線ではなく直線的である。一方四隅は円く造られ、四辺の接合部が鋭い棱線形とはなっていない。この形状の基底面に造られた墳丘を想定すれば、低い円形となるであろう。今回検出した周溝の幅は、南部が最も広くて1m程度であった。2次調査部分でも、最大で1.3mであった。また最小幅は東北隅で0.3mであるが、安定した形状の北西部では0.8m前後であった。この程度の幅で造ることが意図されていたのであろう。深さは、今回の調査でも土橋近くが深くなっていた。検出面からは、0.4mである。そのほかの部分は、0.1m程度であった。造られた当初の深

さは、圃場整備以前の状況や明治期の古地図からみても、せいぜい0.5m程度であろう。堆積土は、黒褐色土である。自然堆積により形成され、これが表土化した腐葉土である。火山灰を含むこともこの地域の特徴である。

今回の調査で出土した遺物は、いずれも細片で少量であるため、図示していない。

まとめ

この遺構は、2次調査で出土した土器から桜町Ⅲ式期とした。前回の調査では、16号周溝墓の周溝に規制されて、この周溝部の北西部が変形していることから、これより新しいとした。また27号周溝墓の周溝と重複して、これより新しいと判断した。周溝墓が集中する部分の余地に造られた結果であろうか。

(福島)

19号周溝墓

遺構 (図11、写真10)

D7-C1グリッドに位置している。18・27号周溝墓の北側に位置している。同じく、2次調査で東半部の調査を実施した遺構である。東側に16号周溝墓と近接している。2次調査の39号掘立柱建物跡と重複して、この建物跡の柱穴が墳丘部に続いていることが予想されていた。これと関連する柱穴は2個検出した。しかし明確な対応関係が確認できなかったことから、図11に柱穴の位置を示すことにとめた。墳丘部分で、埋葬施設は確認していない。

周溝は、北東辺が失われているために、全体の形状は不明である。土橋部は南東部にあり、明確であった。土橋幅は3mである。両端は、直線に仕上げて対応している。土橋部外端中央、墳丘の東辺・西辺方向から周溝墓の軸線を求めるところ、N-45°-Wとなる。全長は12m程度、墳丘基底部の東西幅10mである。小型の周溝墓である。

今回検出した周溝は、南東部から西部にかけて、底部近くが遺存したにすぎない。土橋部を挟む墳丘部の隅は、丸く湾曲している。墳丘の平面形は隅丸長方形であろう。また土橋近くが最も深くなり、検出面からの深さは、0.4mであった。これは2次調査で検出した周溝とも対応している。断面形は、上部が開く「U」字形である。平らな底面から大きく湾曲して側壁に移行している。西側に向かっては次第に浅くなり、西部では0.2m程度であった。堆積土は黑色土、黒褐色土である。表土化の影響を受けた土である。

遺物 (図11、写真36)

今回の調査で出土した遺物は、いずれも碎片で少量であった。図11に3点を示した。1は表面が縄文で、内面にはハケメが施されている。3は口縁部である。内外面に赤彩が施されている。2次調査で出土した土器の時期と矛盾はない。

まとめ

この遺構は、2次調査で出土した土器から桜町Ⅲ式期とした。土橋部が明確で、その両側の周溝が深く造られている。墳丘は墳丘の軸線方向に長い形である。小型周溝墓の一つである。(福島)

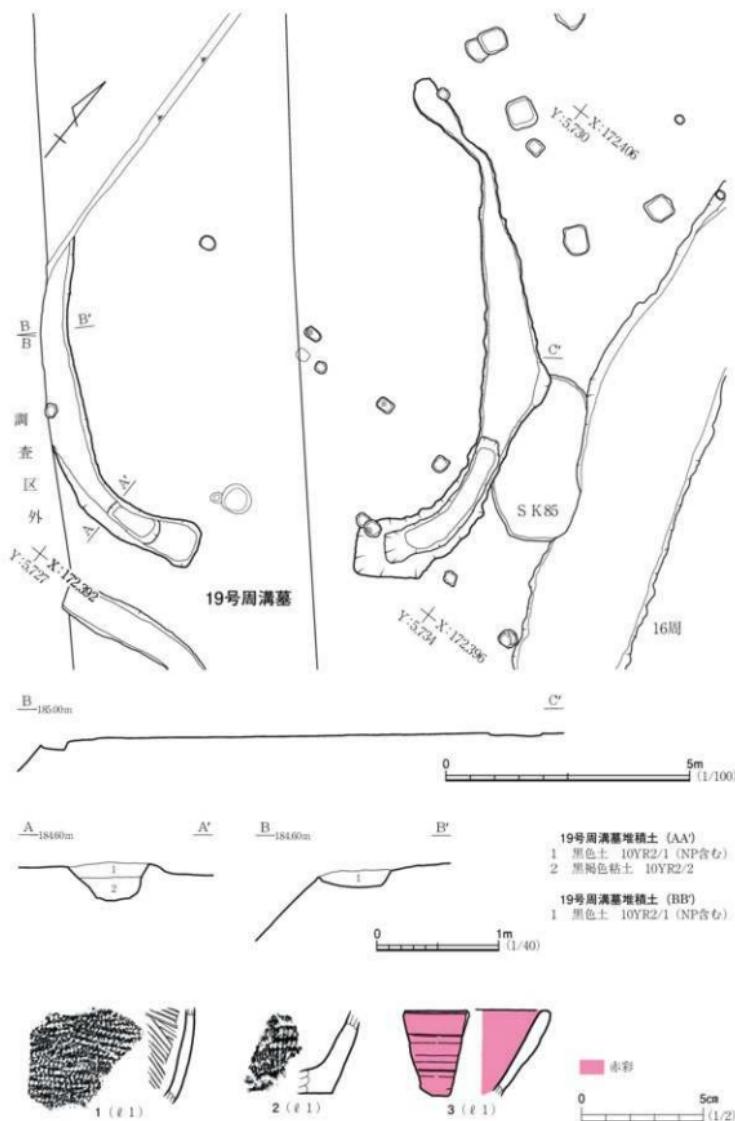


図11 19号周溝墓・出土遺物

25号周溝墓

遺構 (図12, 写真11)

D7-D2グリッドに位置している。調査区①の南東部にあたり、北西側は圃場整備により失われ、北東側の周溝を検出したにすぎない。北西側に27号周溝墓がある。平安時代の37号溝跡と重複している。また圃場整備による重機の通行等により、北東部周溝の形状が変形している。

周溝は、長さ8m程度が遺存したにすぎない。南東部は矩形の隅を丸く仕上げた痕跡を遺している。墳丘の形状は隅丸方形であろうか。周溝の幅は、形状が比較的遺存する南東部や北東部では0.8m程度である。底部は平坦で、断面形は「U」字形であろう。

周溝の北端は、東部からの湾曲にあわせて延長すれば、27号周溝墓の周溝と重複する。これを

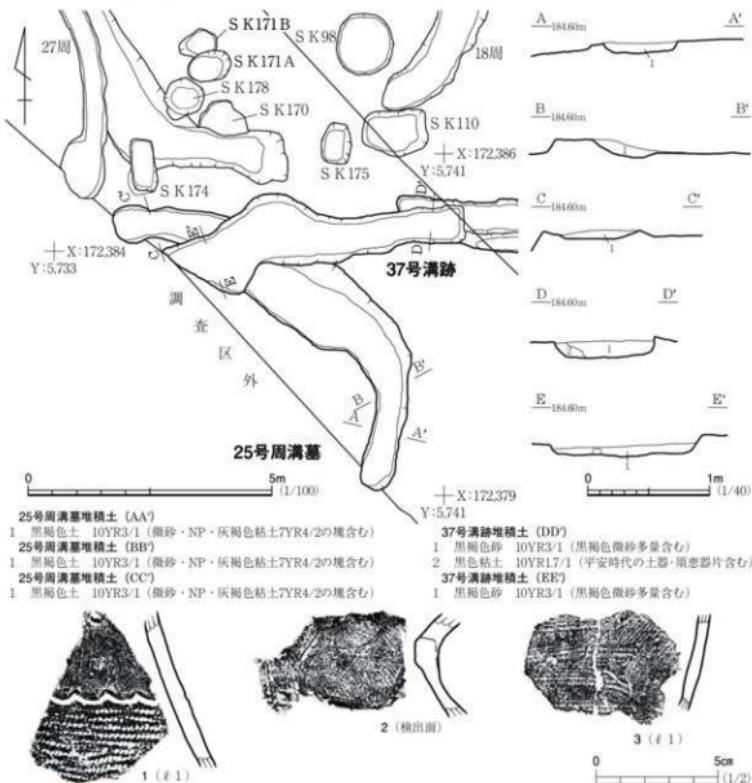


図12 25号周溝墓・出土遺物、37号溝跡

避けるためには、検出された北端部を墳丘の隅として湾曲させなければならなくなる。もし、そうであるならば、隅丸矩形の墳丘となる。遺存する墳丘端線は比較的直線的である。

遺 物 (図12、写真36)

出土した遺物は、いずれも細碎片で、少量であった。図12に3点を示した。1は表面が縄文で、波沈線が配置されている。2は壺の頭部である。3はハケメの施された体部破片である。

ま と め

出土した土器から、遺構の時期を決めるには限界があろう。遺構からは、墳丘が推定したように、隅丸矩形であれば、一応桜町Ⅲ式期の可能性が考えられる。19号周溝墓と同規模となる小型周溝墓の一つである。
(福島)

26号周溝墓

遺 構 (図13、写真4・5)

26号周溝墓は方形墳丘をめぐる周溝の四隅が途切れる。調査区②の中央部、E 8 - J 5・J 6、F 8 - A 5・A 6グリッドに位置する。本遺構の北西側には、主軸方向を揃えて29号周溝墓が分布する。66号掘立柱建物跡と192号土坑と重複し、本遺構より192号土坑が古く、66号掘立柱建物跡が新しい。遺構はL IIを除去した後に、L III aとした沼沢火山灰を含む黄褐色土の上面で確認した。26号周溝墓の墳丘部の平面形は、東西方向に長い長方形である。周溝内法の規模は、東西辺の長さが3.7m、南北辺の長さが3.0mを測り、桜町遺跡の方形周溝墓で最も規模が小さい。東溝を基準とした主軸方向は、北に対して42度東に傾く。28号周溝墓と同様に、墳丘部分に柱穴が多数重複することから、平安時代には既に墳丘が失われていた可能性が高い。さらに近年の圃場整備などの影響もあり、埋葬施設の痕跡もなく、周溝もかなり浅い。周溝墓の大部分が削平されていると判断した。墳丘の高さは、周溝の壁面の立ち上がりや埋葬施設の規模などを基準として、9号周溝墓の墳丘の高さは約2m前後と復元した。図62に示す通り、墳丘斜面の角度を45度、墳頂平坦面の規模を2mとすると、墳丘の高さは当時の地表面から0.85mの低い盛土と復元できる。

各周溝は幅の狭い溝状をなす。西溝の墳丘側が直線的になるが、周溝外側は弧状に張り出すかまぼこ形になる。その他の周溝は隅丸長方形を基調とする。さらに各周溝端部は丸くなり、29号周溝墓に見られたように、四隅部に対して台形に開かない。周溝最深部の標高はそれぞれ異なり、南溝が185.2mと深く、西溝が最も浅く185.35mである。各周溝の底面は、細かい凹凸があるものは平坦で、中央から端部に向かって浅くなる。周溝の壁面は、いずれも上半部が崩落に起因して大きく開く。下半部は急峻に立ち上がり、周溝壁面の本来の形状を残している。

周溝内部の堆積土は、上層部分が黒褐色を基調とする自然流入土である。底面付近の下層は、黄褐色土塊を含み、黒色土と黄褐色土が混ざった堆積状況である。5号周溝墓で確認できた底面の整地土とは異なり、これらの上面は明確な平坦面が形成されていない。そのため黄褐色土は墳丘盛土に起因する土層で、その崩落土を含む周溝墓の機能時期または廃絶後の早い段階に埋没した土と考

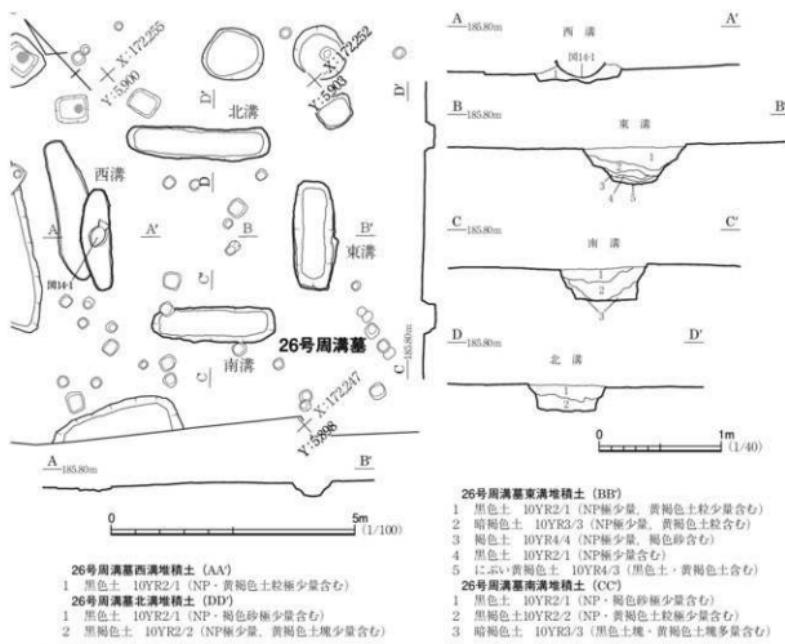


図13 26号周溝墓

えている。西溝は黒色土の単層であり、上記の上層堆積土である。上層の自然流入土は東溝の1層、南溝の1・2層、北溝の1層に相当する。下層堆積土は底面を覆う東溝の5層、南溝の3層、北溝の2層にあたる。

遺 物 (図14・15、写真33~35・37)

本遺構の各周溝からは弥生土器が出土している。弥生土器は堆積土の上層から破片となって出土したものが多いため、土器を周溝内に据え置くなどの人為的に埋納された状況は確認できない。図14-1と図15-3はほぼ一個体に復元できた。いずれも西溝の中央から、底面から2~3cm浮いて漂れた状態で出土した。図14-1は横倒しの状態で出土したが、土器埋納のために周溝内を掘り込んだ痕跡は認められない。一方堆積土の検討から、これら土器が含まれる周溝底面を覆う土は、周溝墓の機能時期と土器型式を違えるほどの時間差は想定できない。墳丘上に置かれた供献土器が墳丘の崩落土とともに、周溝内に転落したものと考えている。

図14-1は二重口縁壺である。口縁部は幅広く、頸部上端から外反する。口唇部は丁寧に面取りされ、その断面形は四角形となる。口縁部と頸部の境には明瞭な段がある。頸部上端に粘土紐を積み上げ口縁部とするつくりとなっている。頸部は太く、やや外反して立ち上がる。頸部と体部の

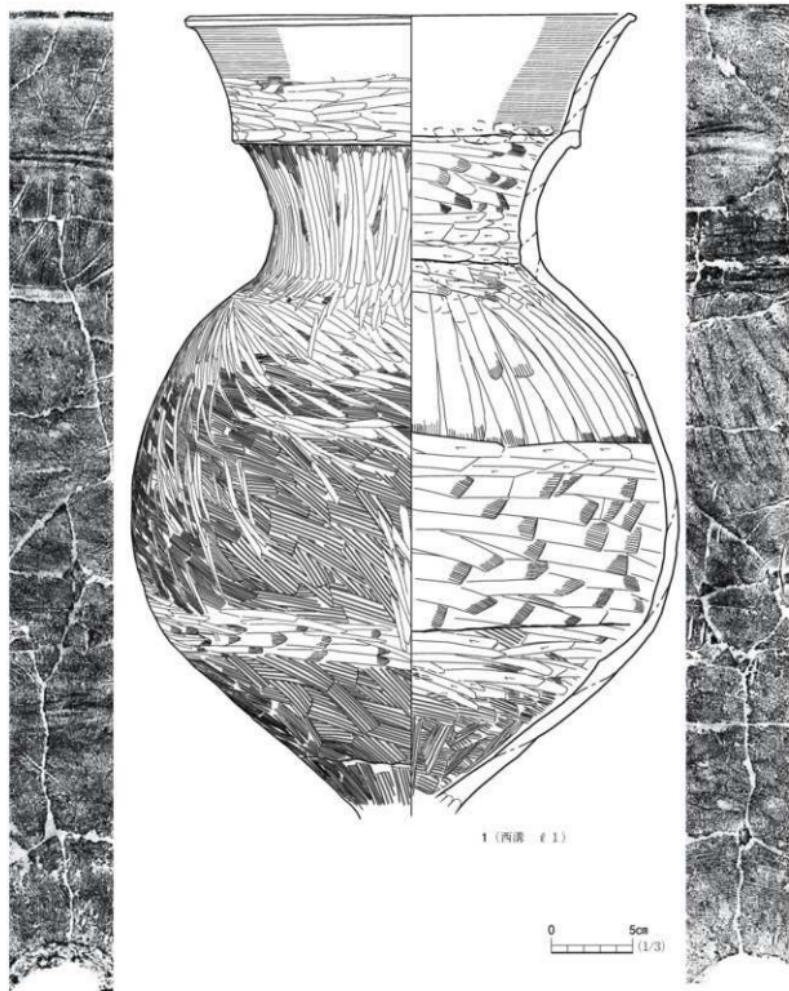


図14 26号周溝墓出土遺物（1）

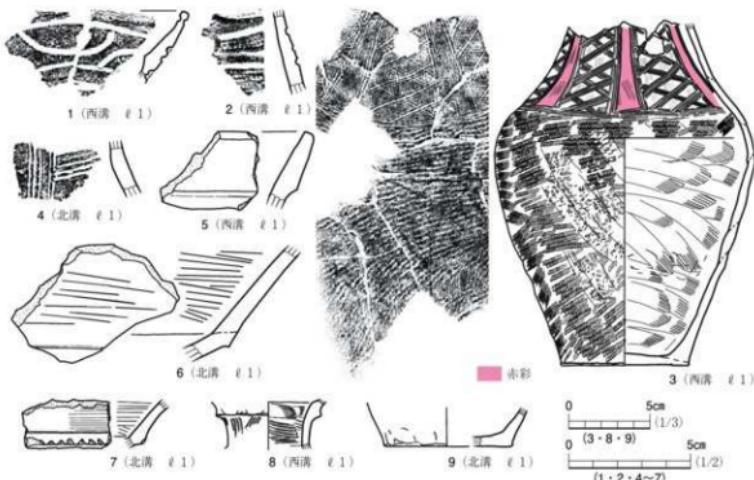


図15 26号周溝墓出土遺物（2）

接合部に明瞭な境が作られない。体部の器形は、丸みを帯びた体部上半から直径が小さい底部に向かってすばまる。土器の成形には底部から口縁部まで分割して粘土紐を積み上げて作られたのであろう。内面の器面観察から、体部は体部下半、体部中位、体部上半から頸部まで調整痕の違いが明瞭である。底部付近はハケメが残り、体部中位との接合部位に器面を厚く削り取ったカキトリ痕が見られる。その後カキトリ痕を消すように全体的に横方向の指ナデが施される。体部上半部は器面に沿って下から上に向かって縦方向の指ナデで器面が均されている。体部中位と上半部の接合部位には、縦方向の指ナデを削り取るカキトリ痕が観察できる。頸部と体部の接合部位には、横方向のカキトリ痕が明瞭に残る。口縁部はヨコナデで丁寧に仕上げられる。

外面の器面調整痕は、全体的にハケメで器面を均したあと、体部から頸部はミガキが施される。口縁部上半はヨコナデで整えられるが、下半は横方向の指ナデ、部分的にミガキ痕が観察できる。体部下半と中位の接合面には、ハケメを消す横方向指ナデが認められる。体部中位から下半のミガキはややまばらで、縦方向になる。上半部から頸部の接合部位のミガキは密で、斜め方向で体部から頸部に向かって渦巻き状に施される。頸部は縦方向のミガキが密に観察できる。

図15-1・2は壺の破片で、太い沈線で文様が描かれる。1は横位の沈線で口縁部の文様帯が区画され、その内部に弧文が面違いに配される。3は口縁部を欠損するが、細頸壺に分類できるであろう。体部は上半部に最大径を持ち、底部に向かってすばまる細長い器形となる。文様はすべて同一の4本クシ歯の施文具を用いて描かれる。頸部文様帯に無文部を配した継位区画し、区画内に格子文を描いている。北関東地域に顕著な十王台式に類似する特徴を持つ。文様を描く順序は、頸部文様体を区画する横位文を描く。次に縦位のクシ書きで無文部を6箇所配する。継位区画の内部

には格子文が描かれ、右下がり斜線の次に左下がりの斜線を描く。縦位区画間の無文部にはベンガラにより赤彩される。体部は地文が無節の撚糸文が施される。また地文を部分的に消すような指ナデが観察できる。施工時の痕跡であろうか。内面は指ナデによって器面が均されている。体部下半や頭部には成形時の接合痕として指頭圧痕がわずかに観察できる。なお頭部の外面には小豆であろうか、穀物や豆類の圧痕が観察できる。4はクシ描文が施された壺の体部破片である。5本クシ歯の施文具を用い、縦位区画の内部に鋸歯文が充填される。5~9は北陸系土器である。5は壺の口縁部であろう。幅の狭い口縁部の下端に軽い段を持つ。器面は摩滅しているが、口縁部はヨコナデで整えられる。6・7は高坏である。6は坏身の破片である。坏身下端に明瞭な段が作られ、口縁部に向かって直線的に開く器形である。内外面ともに横方向のミガキで仕上げられる。7は坏身の下端に棱が作られ、ヘラ状工具によるキザミが巡る。8は壺の頭部破片であろう。口縁部の直径が小さく、頭部が細い器形となる。口縁部下端に鋭い段が作られる。頭部は内外面ともハケメが残る。9は壺または壺の底部破片である。底部と体部の接合に指頭痕が観察できる。

ま と め

26号周溝墓は周溝の四隅が途切れる方形周溝墓で、桜町遺跡で最も規模が小さい。北西側には主軸方向と同じくして29号周溝墓が接する。年代は、周溝墓の形態的特徴と出土遺物の検討から、桜町I式期とした弥生時代後期後半頃と考えている。

(福田)

27号周溝墓

遺 構 (図10、写真12)

D7-D2グリッドに位置している。調査区①の南東部にあたり、北西側は圃場整備により失われ、北東側の周溝を検出したにすぎない。東側に18号周溝墓があり、この遺構と重複している。新旧関係は、27号周溝墓のほうが古いとみている。

周溝は、長さ9m程度が遺存したにすぎない。円弧を描くように延びていることから、墳丘の平面形は円形であろう。そうであれば、直径は10m程度になる。小型の周溝墓である。

周溝幅は、18号周溝と重複する部分より北西側が広く、重複する部分は狭い。北西部分は検出面で幅1m程度、深さ0.1m程度である。底面は平坦に造られている。周溝の堆積土は、黒褐色土を基調としていた。自然堆積により形成された土層である。周溝の重複する部分で溝幅が狭くなるのは、18号周溝墓に伴う溝の掘削により南東部の壁が失われた結果であろう。また周溝の南端は、東部からの湾曲にあわせて延長すれば、25号周溝墓の周溝と重複するようになる。

周溝の南東端は、内側に膨らんでいる。この部分で小さな土坑と重複していた可能性もある。現地では、認識できなかった。土層断面を見ると、底面に黄褐色の細かい砂が薄く堆積していた。また底面も傾斜していた。ほかの周溝では、検出されていない特徴である。

遺 物 (図16、写真36)

出土した遺物は、少量であった。図16に8点を示した。1~2は在地系の土器片である。沈線文、

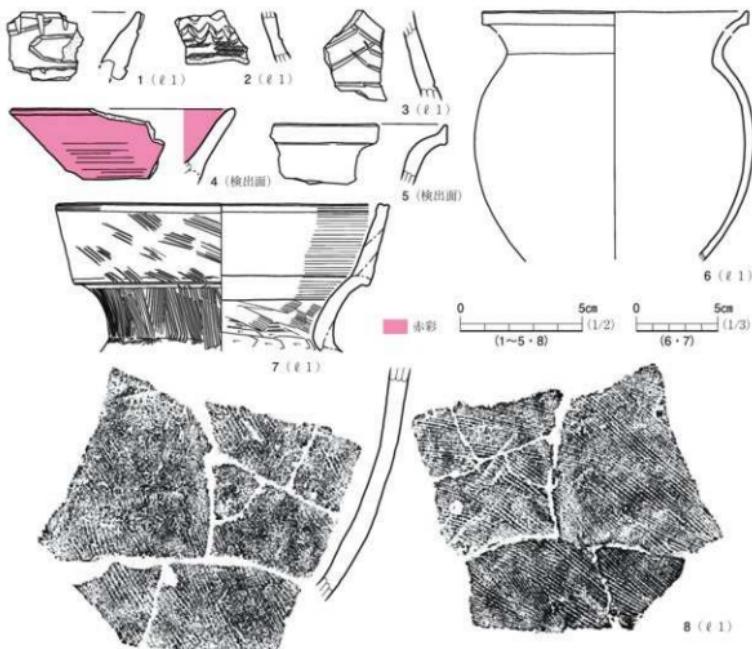


図16 27号周溝墓出土遺物

刺突文、それに縄文で文様が施されている。4～8は、桜町Ⅲ式の土器である。4は壺で、内外面に赤彩が施されている。5・6は口縁部端部が鋭く摘み上げられ、側面が帯状に垂直に面取られている。いわゆる北陸系土器と呼ばれる一群の特徴を持っている。6の体部は球形の壺である。表面の整形痕跡は失われている。

7は二重口縁壺に近似した形の大型壺である。口縁の端部は四角く仕上げられ、頂端部の中央に浅い四線がめぐっている。口縁部内面はヨコナデ、外面はハケメの上からヨコナデが施されている。頸部上端と口縁部の接合面は、擬口縁状に仕上げられている。この部分で分割成形が行われた痕跡である。また頸部下端の外面は、粘土紐による補強がされている。頸部内面はナデにより整えられ、その下端はケズリで整形されている。頸部外面は縱方向のハケメで仕上げられている。8はその体部破片であろう。大型土器であり、胎土に荒い砂粒を多く含んでいる。焼成も堅緻である。

まとめ

出土した土器から、この遺構は桜町Ⅲ式期の小型周溝墓であろうと推定した。7と同様な土器は、26号周溝墓や2次調査の37号溝跡からも出土している。壺形埴輪と近似しているが、桜町Ⅰ式から継続する土器のひとつである。

(福島)

28号周溝墓

遺構 (図17、写真6)

28号周溝墓は調査区②の中央部、F 5 - B 2 グリッドに位置する。標高185.6m の平坦面に立地する。本遺構の周囲は、平安時代と弥生時代の遺構が密集する範囲に位置し、周溝の一部は平安時代の9号竪穴式遺構や64号掘立柱建物跡などと重複する。遺構検出面はL III aとした沼沢火山灰を含む黄褐色土の上面で確認した。



図17 28号周溝墓・出土遺物

28号周溝墓は北溝と東溝を確認しただけで、四辺の周溝が遺存していない。墳丘の平面形や規模は不明であるが、墳丘は一辺が4m前後の長方形になるであろう。東溝を基準とした主軸方向は北に対して20度東に傾き、1・2・7・8号周溝墓の主軸方向と一致する。

周溝は中央部がわずかに幅広くなるが、細長い溝である。東溝の規模は、長さ255m、幅が最大で0.55mである。底面は北側が一段深く掘り込まれ、両端部に向かって浅くなる。検出面からの深さは0.35mを測る。北溝の規模は、長さ2.7m、幅が0.6mである。底面はほぼ平坦で、両端部がわずかに浅くなる。検出面からの深さは0.35mで、その標高は185.3m付近である。

周溝内部の堆積土は、いずれも上層部分が黒褐色土を基調とする自然流入土である。底面付近の最下層は黄褐色土塊を含むにぶい黄褐色土で、墳丘の崩落土の一部と考えている。

遺物（図17、写真37）

28号周溝墓から出土した弥生土器は、各周溝の上層部の自然流入土に混入したものがほとんどである。図17-1は壺の胴部破片で、横位の太沈線で文様帯が区画される。2~4は地文に撲糸文が施された壺の体部破片である。5は8本歯のクシ状施文具を用いて文様が施された壺の破片である。横位文を密に描き、その後から縦位区画を描いている。6~7は地文の撲糸文が粗い特徴がある。8~9は整形痕にハケメを残す、北陸系の甕または壺の体部破片である。

まとめ

28号周溝墓は、周溝の四隅が途切れる方形周溝墓であろう。詳細な規模は不明であるが、小型の方形周溝墓の一つと考えている。年代は出土遺物の特徴から、桜町遺跡では最古段階の周溝墓で、弥生時代後期後半頃の桜町I式期に属する。

（福田）

29号周溝墓

遺構（図18、写真7・8）

29号周溝墓は周溝の四隅が途切れる方形周溝墓である。今回の調査によって、19号土坑が北溝、62号土坑が東溝であることが判明した。1次調査の19・62号土坑の記述は本項をもって訂正する。

29号周溝墓は、調査区②の中央部、E 8-I 5、J 4・J 5グリッドに位置する。標高185.5mの平坦地に立地する。本遺構の南東側には、主軸方向を揃えて26号周溝墓が近接する。また、平安時代の7・18・66号掘立柱建物跡が重複する。遺構は遺物包含層であるL IIを除去した後、L III aとした沼沢火山灰を含む黄褐色土の上面で確認した。

四辺の周溝に開まれた墳丘部の平面形は、東西方向が長い長方形である。周溝内法の規模は、東西辺の長さが6.0m、南北辺の長さが5.1mである。墳丘の東辺を基準とする主軸方向は、北に対して30度東に傾く。南東側に近接する26号周溝墓と方向を揃えて分布することから、それぞれの埋葬者に強い関連が想定できよう。

各周溝の平面形は、いずれも墳丘に面する辺は直線的に延び、周溝の外側はやや中央に向かって弧状に湾曲する。周溝の両端部は墳丘の対角線に沿って直線的に開く。墳丘の四隅が台形状に突出

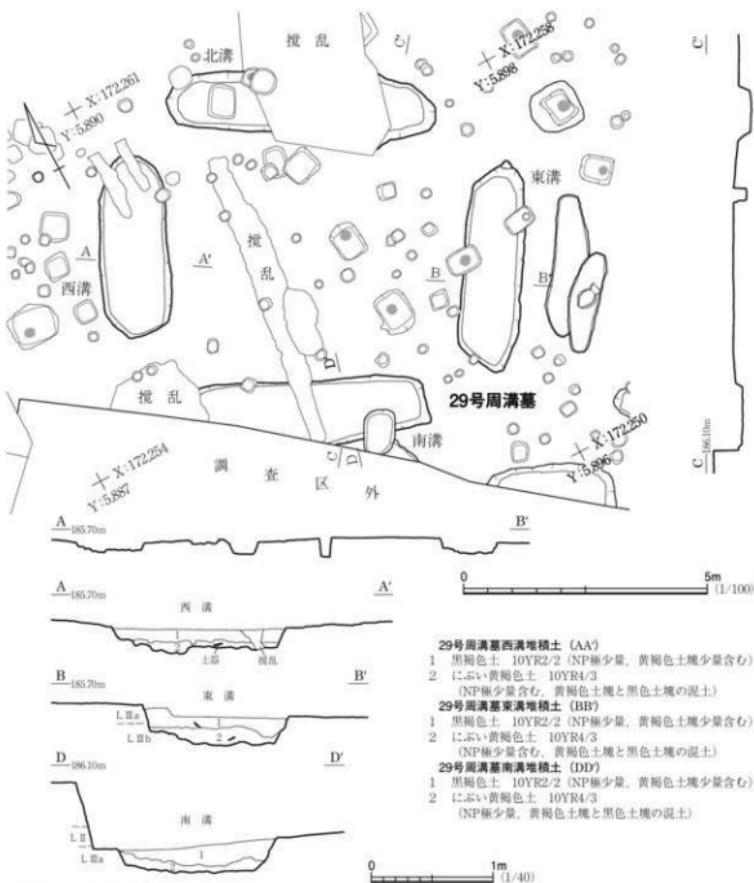


図18 29号周溝墓

する特徴がある。東溝は長さが4.35m、幅が1.25m、深さが0.35mである。南溝は長さが約4.5mで、幅が約1.4m、深さが0.3mである。西溝は長さが3.75m、幅が1.38m、深さが0.22mである。北溝は1次調査の計測値で、長さが5.52m、幅が1.23m、深さが0.32mである。各周溝は中央部が深く、両端部に向かってわずかに浅くなる。底面最深部の標高は、各周溝とともに185.2m付近で揃う。周溝の壁面は周溝外側に比べて墳丘側が急峻になる。

各周溝内の堆積土は、上層は黒褐色を基調とする自然流入土である。北溝では平安時代の遺物が混入していた。平安時代までは周溝が完全に埋まりきらずに窪みとなっていたのであろう。下層は

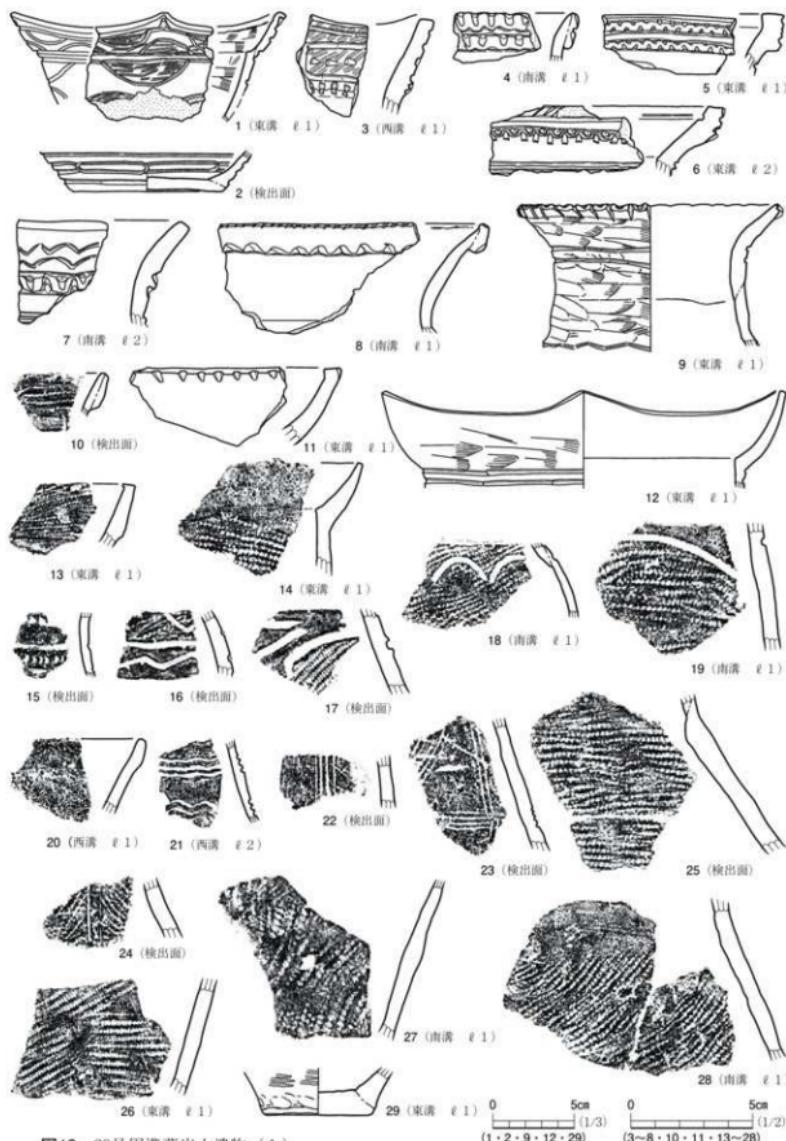


図19 29号周溝墓出土遺物（1）

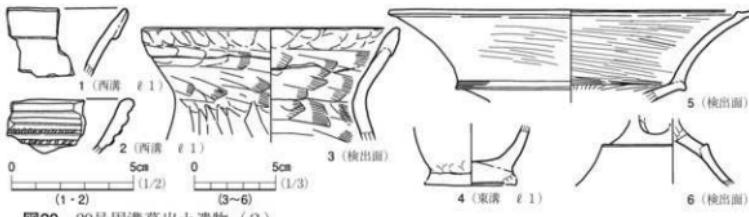


図20 29号周溝墓出土遺物（2）

底面を覆う黄褐色土塊と黒色土塊を含むにぶい黄褐色土である。この土層の上面部分が乱れて平坦にならないことから、5号周溝墓の周溝底面を整地する土とは性質が異なる。周溝墓の構築後から比較的早い段階の堆積土で、墳丘の崩落土を含んでいると判断した。

遺 物（図19・20、写真38）

本遺構の各周溝からは弥生土器の他に平安時代の遺物が出土した。周溝内堆積土の上層から出土したものが多い。その内形状が把握できた弥生土器を図19・20に示した。

図19-1・2は浅鉢であろうか。1は波状口縁で、口縁部が大きく外反する。体部はやや丸みを帯びた形状となる。文様はやや彫りの深い太沈線を用いて、短い間隔で押し引き状に描かれる。頭部に2本の横位沈線で口縁部と体部の文様帶を区画する。口縁部と体部の文様は連弧文を面違いに配し、連弧文内部に撚糸文を充填させている。内面は体部との境に大きな段が作られる。器面調整は横位のナデが主体となる。2は底部破片である。横長に潰れた梢円形が連続して描かれる。

3～7は壺の口縁部破片で、交互刺突による立体的な波状隆線で加飾されている。8は折り返し口縁となる壺で、口縁部下端に指頭によるキザミが施される。9は口唇部に円形竹管状の刺突具を用いて交互刺突文が施される。頭部に2本の横位沈線を巡らす以外は、無文で整形時のナデを残している。12は波状口縁となる。頭部に2本の横位沈線が巡る。15は連続する刺突文が施される。

図19-20は彫りの浅いクシ歯状施文具によって波状文が施されている。施文方法や文様構成が樽式土器に類似する。20～24は4本歯のクシ歯状施文具を用いて文様が描かれている。縦位区画内部に格子文や鋸歯文が描かれる。北関東地域の十王台式に類似する土器である。

図20-1は口縁部が肥大した壺または甕の破片である。内面には穀類の圧痕が観察できる。2は口縁部にいわゆる擬四線が巡り、下端部にキザミが施される。3は壺であろうか。口縁部下端に軽い段が認められる。体部の外面には縦方向のケズリが観察できる。5・6は高坏である。5は口縁部が大きく外反して開く坏身で、口唇部内部に段が巡る。6は脚部中央に明瞭な段が設けられ、脚端部が大きく開く。脚部にはやや大きな円孔が配される。

ま と め

29号周溝墓は周溝の四隅が途切れる周溝墓で、墳丘の平面形が東西方向に長い長方形になる。

26号周溝墓と方向を揃えて分布することから、これらの埋葬者に密接なつながりを示している。

年代は出土遺物と周溝墓の形態などの特徴から、桜町I式期に相当する。

（福 田）

第3節 壇穴状遺構

9号壇穴状遺構（図21・22、写真21・40・43）

9号壇穴状遺構は、F 8 - A 6 · A 7 · B 6 · B 7 グリッドに位置する。標高185.6mで、遺跡内で最も標高が高い。本遺構は28号周溝墓と190号土坑と重複し、そのいざれよりも新しい。また本遺構の周囲には、1号壇穴状遺構や64号掘立柱建物跡など平安時代の遺構が多数分布する。

本遺構の平面形は、南半分が歪んだ楕円形をなす。規模は長軸の長さが3.8m、短軸の長さが2.8mを測る。検出面からの深さは0.25mである。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は自然流入土で遺物が多量に混入する。2・3層は黄褐色土塊を含む人為的に埋め戻された土と判断した。

9号壇穴状遺構からは平安時代の土器類や鉄製品の他に弥生土器も少量出土した。図22-1～

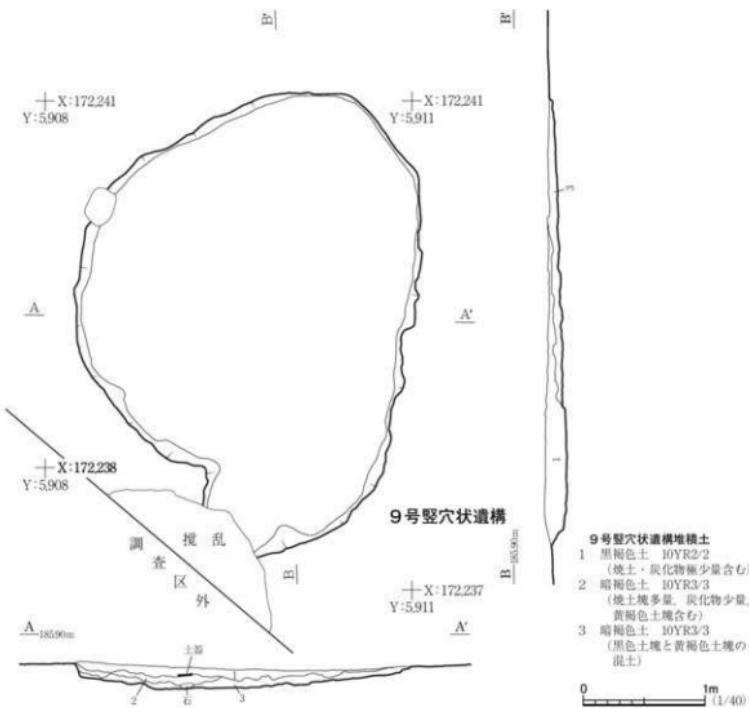


図21 9号壇穴状遺構

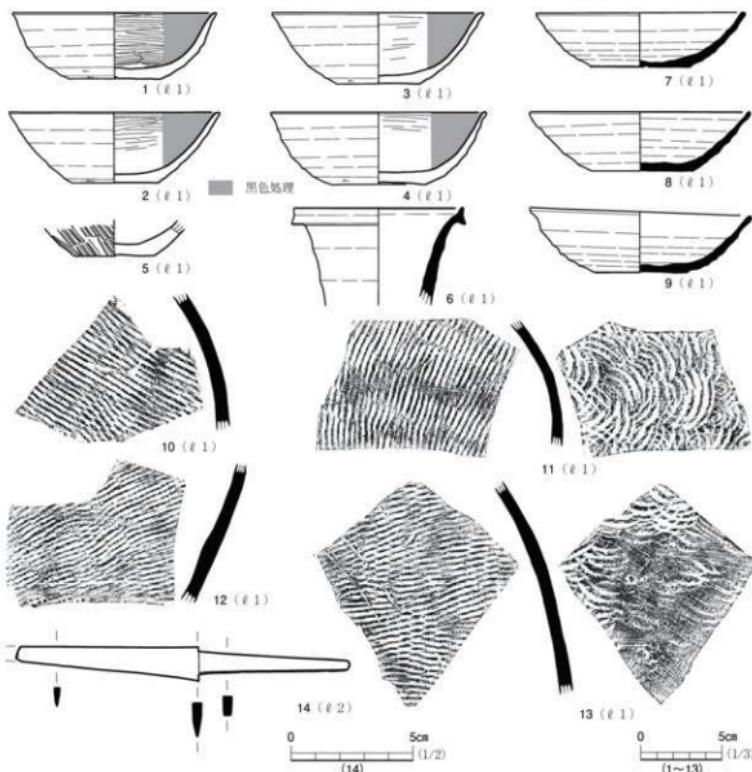


図22 9号竪穴状遺構出土遺物

4は土師器壺である。いずれも体部下半から底部にかけてロクロの回転を利用したケズリで再調整される。5は土師器壺の底部破片である。体部外面にはタタキ整形が施され、底部の径が小さい特徴がある。6は須恵器長頸瓶の頭部破片である。内面に緑褐色の自然釉が観察できる。7～9は須恵器壺である。底部の切り離しは回転ヘラキリである。10～13は須恵器壺の胴部破片である。外表面は板状タタキ具痕が残り、11・12はいわゆる螺旋状沈線文が観察できる。内面は波文のアテ具痕が認められる。14は鉄製刀子である。切先を欠損するが、比較的の遺存状態は良い。棟方と刃方が直角に切り落とされた両面である。刃部は使用により柄部に近い部分が多く研ぎ減っている。

9号竪穴状遺構は遺構自体が浅く、底面に柱穴もない。近接する1号竪穴状遺構のような上屋は想定できない。2次調査で確認した85号土坑と同じく、掘立柱建物跡の周間に分布する大型廃棄坑と考えている。年代は出土した土器類の特徴から、9世紀中葉頃と推察している。（福田）

第4節 挖立柱建物跡

4次調査では掘立柱建物跡を調査区②で5棟、調査区③で1棟の計6棟を確認した。いずれも平安時代に属する掘立柱建物跡である。桜町遺跡における平安時代の集落は、2間×3間規模の側柱建物跡と2間×2間の小型総柱建物跡がセットで分布し、その周間に廐棄坑や井戸跡を伴う。

7号掘立柱建物跡（図23・29、写真14・16）

7号掘立柱建物跡は平成16年度に実施した1次調査において、その北東半部を調査している。今回の4次調査では南側柱列と西側柱列を確認して、その全容を把握することができた。本遺構は調査区②の中央部、E 8-J 5グリッドに位置する。周囲は遺構が最も密集する範囲で、弥生時代29号周溝墓、平安時代の20・24号土坑などと重複する。本遺構は29号周溝墓よりは新しく、20・

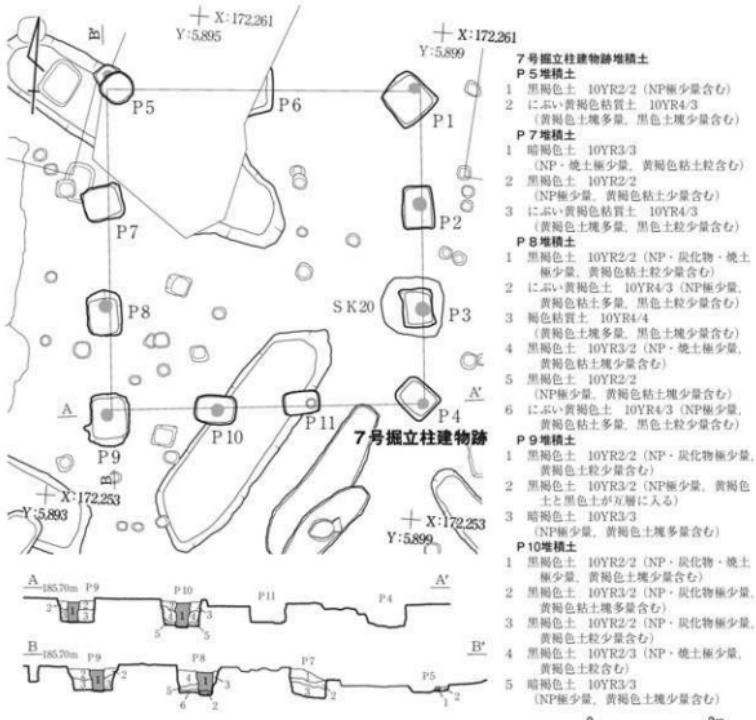


図23 7号掘立柱建物跡

24号土坑より古い。また主軸方向を揃えて南東側には64号掘立柱建物跡、南側には66号掘立柱建物跡が分布している。遺構検出面はLⅢaとした沼沢火山灰を含む黄褐色土の上面で確認した。

7号掘立柱建物跡は東西柱列が3間であるが、北側柱列が2間、南側柱列が3間と南北で柱間が異なる。建物の平面形はほぼ正方形である。その規模は北側柱列P1-P5間が5.8m、南側柱列P4-P9間が5.2m、東側柱列P1-P4間が5.2m、西側柱列P5-P9間が5.3mを測る。東側柱列を基準とする主軸方向は北に対して5度西に傾く。柱間の距離は、北側柱列の2間で28mと広く、南側柱列3間で1.55~1.8mである。東西柱列の柱間は1.6~1.9mを測る。

柱穴の平面形は長方形を基調とするが、隅柱にあたるP1・4・5は正方形となる。また隅柱となるP1・4は建物の対角線と直交するように斜めに配される。柱穴の規模は、長辺の長さが62~88cm、短辺の長さが40~64cmである。検出面からの深さは40~50cmである。柱穴底面の標高は185.0~185.1mではほぼ揃っている。柱穴の底面には柱材の痕跡として、直径20cm、深さ2~5cm前後の浅いくぼみが認められる。

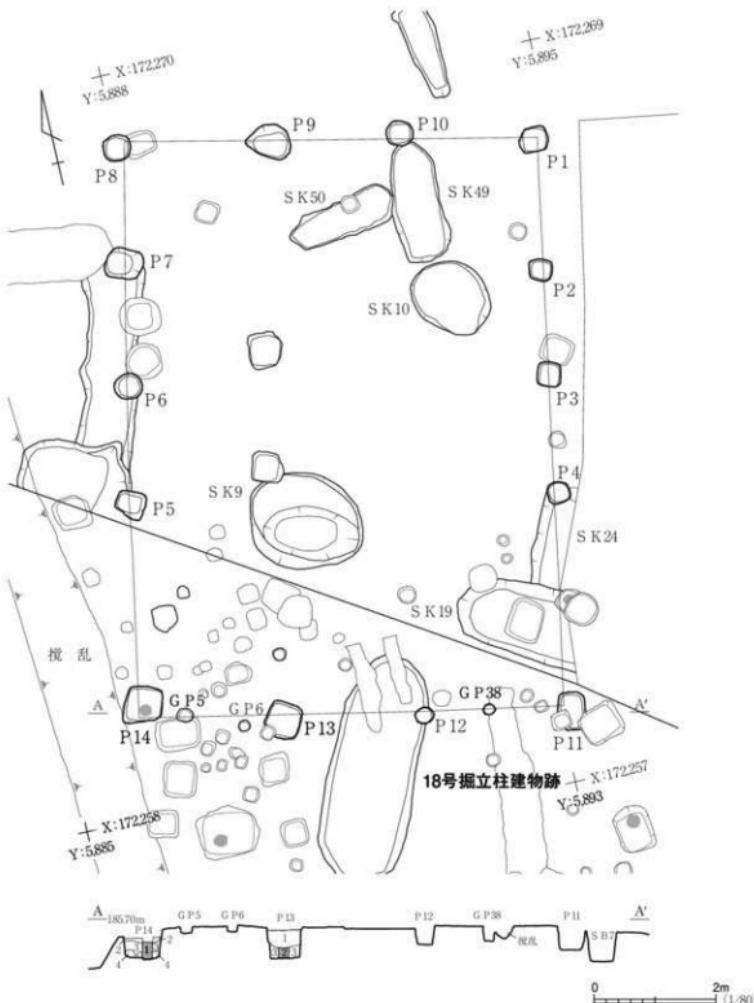
柱穴内の堆積土は、柱痕跡と掘形埋土に分けた。柱痕跡は焼土粒や炭化物粒をわずかに含む黒褐色土である。草木根の影響により埋土との境が凸凹で、しまりのない土である。掘形埋土は黄褐色土塊と黒色土が混ざった土である。黄褐色を基調とする埋土と黒褐色の埋土が互層となり堅く突き固められてしまっている。

7号掘立柱建物跡の柱穴からは弥生土器と平安時代の土師器と須恵器が出土した。そのうち遺物の特徴が分かるものを図29に示した。4は須恵器の壺である。底部から直線的に立ち上がる体部となる。底部の切り離しは、ロクロの回転を利用したヘラキリである。5は土師器の甕の口縁部破片である。ロクロを用いて整形される。直立気味の体部から、頸部で「く」の字に開く口縁部となる。口唇部は真上に摘み上げられて、その断面形は三角形になる。体部の外面にはカキメが観察できる。ハケメ状の工具を用いてロクロの回転を利用して整形されている。

7号掘立柱建物跡は北側柱列が2間、南側柱列が3間、東西柱列3間と柱間が南北で一致せず、建物跡の平面形がほぼ正方形となる側柱建物跡である。さらに南西隅にあたるP9を除いて、P1・4・5とした隅柱が対角線と直交するように斜めに配される特徴がある。桜町遺跡で確認した平安時代の掘立柱建物跡では初見となる構造となる。この掘立柱建物跡の性格を特定できる遺物がないため、現状では特別な施設か否かは不明である。年代は出土した遺物の特徴から、9世紀中葉頃を中心とした時期と考えている。

18号掘立柱建物跡（図24・29、写真15）

今回の4次調査によって、18号掘立柱建物跡は3間×5間の南北棟の側柱建物跡と確認することができた。E8-I4・I5、J4・J5グリッドに位置する。標高185.4mの平坦地で、遺跡内では比較的標高が高い地点に立地する。本遺構の柱穴は、弥生時代の29号周溝墓や平安時代の7号掘立柱建物跡や24号土坑などと重複し、そのいずれよりも新しい。また東側には建物の向き



18号掘立柱建物跡堆積土

P13堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物・黃褐色土粒極少量含む)
- 2 黑褐色土 10YR2/1 (NP・炭化物・黃褐色土粒含む)
- 3 喀褐色土 10YR3/3 (NP無少量・黃褐色土塊含む)
- 4 褐褐色土粒 10YR2/2 (NP無少量・黃褐色土塊含む)

P14堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1 (NP・炭化物・黃褐色土粒含む)
- 2 黑褐色土 10YR2/3 (NP・炭化物・黃褐色土粒含む)
- 3 黑褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物無少量・黃褐色土粒含む)
- 4 喀褐色土粒 10YR3/3 (NP無少量・黃褐色土塊含む)

図24 18号掘立柱建物跡

を揃えて6・9・14号掘立柱建物跡が分布する。遺構検出面は、L III aとした沼沢火山灰を含む黄褐色土の上面で確認した。

18号掘立柱建物跡は南北5間、東西3間の側柱建物跡である。東側柱列を基準として、建物の向きは北に対して東に10度傾く。建物の平面形は南北に長い長方形で、その規模は北側柱列P 1-P 8間で6.8m、南側柱列P 11-P 14間が6.9m、東側柱列P 1-P 11間が9.4m、西側柱列がP 8-P 14間が9.2mを測る。柱間の距離は、2.0-2.2mと各柱列でほぼ揃っている。

柱穴の平面形は隅丸方形を基調とするが、P 4・12は円形で、P 14は正方形と形状にばらつきがある。柱穴の規模は、P 12は直径が25cmと小さく、P 13・14は一辺の長さが60cmと最も大きい。検出面からの深さは30-50cmである。P 14の底面には柱材の痕跡として、直径20cmで深さ2cm程のくぼみが見られる。

柱穴内の堆積土は柱痕跡と掘形埋土に分けた。柱痕跡はP 14で認められた。いずれも炭化物粒を含む黒色を基調とする土である。掘形埋土は黒色土塊と黄褐色土塊が混ざった土で、柱材を設置する際に堅く突き固められている。

18号掘立柱建物跡の柱穴からは、弥生土器と平安時代の土師器片や須恵器片が出土した。これら遺物の内、文様や装飾が特徴的な弥生土器を図29に示した。平安時代の遺物は、摩滅した小破片が多く図示していない。土師器の壺や甕とともにロクロを用いて整形されたもので、壺は内面が黒色処理される。甕の体部下半にはタタキ痕跡が観察できる。

図29-1は壺の口縁部破片である。口縁部直下に指頭によって器面を掘り起こすようなキザミを2段巡らす。口唇部には竹管を押し当てたキザミを密に施す。2は折り返し口縁となる壺の破片である。肥厚した口縁部下端に、指頭によるキザミが巡る。口唇部には竹管を斜めに押し当てたキザミが施される。内外面ともに指ナデで器面が整えられる。3は沈線文が描かれた壺の口縁部破片である。肥厚した口縁部下端に指頭によるキザミが巡る。口唇部には竹管によるキザミを施す。口縁部と頸部に太い沈線で横位の波状文を描く。地文は撲糸文である。

18号掘立柱建物跡は南北棟の大型掘立柱建物跡である。建物の向きを同じくする6号掘立柱建物跡などと関連するのであろう。また付近に分布する掘立柱建物跡群との重複関係を整理すると、東西棟の建物群よりも新しい時期に属する。遺跡内から出土する遺物の年代を勘案して、9世紀後半から10世紀代に属する可能性が高い。

58号掘立柱建物跡（図25、写真17）

58号掘立柱建物跡は、平成22年度に実施した3次調査において、その北半部を確認している。今回の4次調査によって、掘立柱建物跡の全容を把握することができた。本遺構は調査区②の北半部、E 8-H 3・H 4、I 3・I 4グリッドに位置している。周囲は近年の圃場整備によって削平された地点である。そのため調査区②の東側よりも70cm低く、検出面の標高は185.0mである。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂質土の上面である。58号掘立柱建物跡の周囲には、本建物に付

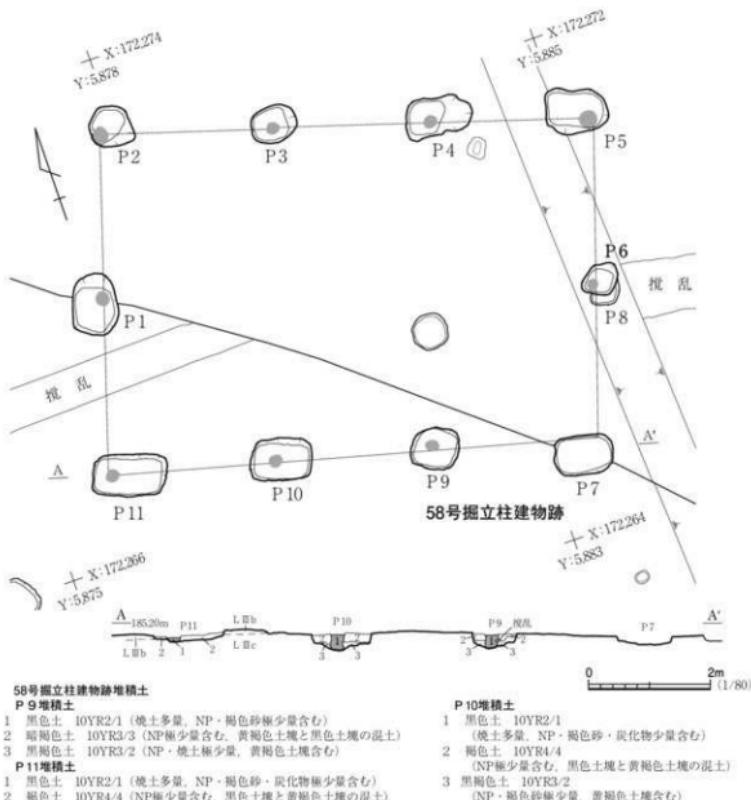


図25 58号掘立柱建物跡

属する2間×2間の小型総柱建物である59号掘立柱建物跡が北側に分布する。また南西側には廐棄坑と考えている166号土坑、西側には井戸跡である163号土坑が分布する。なお163号土坑の井戸枠の方向と、本建物跡の主軸方向が揃う特徴が見られる。58・59号掘立柱建物跡と163号土坑（井戸跡）が同時期の施設となると考えている。

58号掘立柱建物跡は東西3間、南北2間の側柱建物跡である。その平面形は東西棟の長方形となる。東側柱列を基準とする主軸方向は、北に対して16度東に傾く。規模は北側柱列P2-P5間が8.2m、南側柱列P7-P11間が7.9m、東側柱列P5-P7間が5.3m、西側柱列P2-P11間が5.6mを測る。柱間距離は南北柱列では2.4~2.7mと中央の柱間が狭くなる。東西柱間では2.7~2.9mと東西柱間が広くなる特徴がある。

柱穴の平面形は、隅丸長方形を基調とするが、P 2 や P 9 はやや歪んだ隅丸方形となる。規模は長辺の長さが 65~120cm、短辺の長さが 46~65cm となる。柱穴底面には円形のくぼみとなって柱材の痕跡が残る。検出面からの柱穴底面までの深さは、最大で 30cm と浅い。柱穴底面の標高は 184.7~184.9m である。

柱穴内の堆積土は、柱痕跡と掘形埋土に大別できる。柱痕跡は P 7 を除く柱穴で確認できた。いずれも焼土粒を多量に含んだ黒色土である。掘形埋土は黒色土塊と黄褐色土塊が混ざった土で、柱材の設置する際に突き固められて堅くしまっている。柱材は直径 20cm 程の丸太材と推定している。

58 号掘立柱建物跡の柱穴からは、弥生土器や平安時代の土器類や須恵器片が数点出土した。摩滅した小破片であるため、図示していない。

58 号掘立柱建物跡は東西 3 間、南北 2 間の側柱建物跡である。北側には 2 間 × 2 間の 59 号掘立柱建物跡が伴う。また西側には 163 号土坑とした井戸跡が分布している。これら建物の配置は、9 号掘立柱建物跡(東西 3 間 × 南北 2 間の側柱建物跡)、5 号掘立柱建物跡(2 間 × 2 間の総柱建物跡)、6 号土坑(井戸跡)にも見られる。桜町遺跡における平安時代集落内の姿を代表する施設が揃って確認できた。建物跡の年代は、井戸跡から出土した遺物の特徴から 9 世紀中葉頃と考えている。

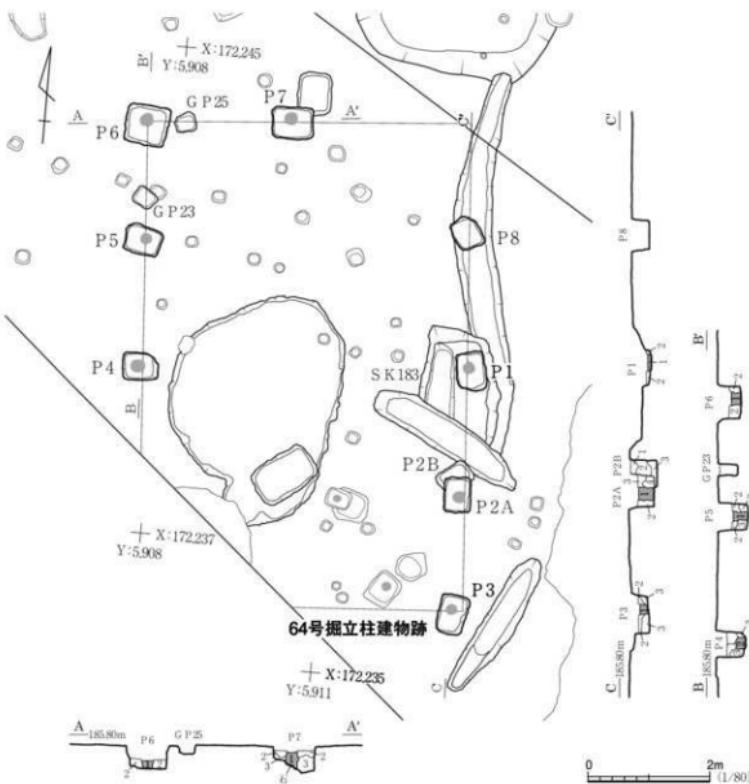
64 号掘立柱建物跡 (図 26・29、写真 18・35)

64 号掘立柱建物跡は調査区②の中央部、F 8 - A 6・A 7、B 6・B 7 グリッドに位置する。周囲は標高 185.6m の平坦面で、調査区内で近年の削平が少なく最も標高が高い地点となる。また調査区②でも最も遺構が密集する地点に分布することから、弥生時代の 28 号周溝墓、平安時代の 9 号竪穴状遺構や 183 号土坑や 10 号溝跡と重複する。重複関係を整理すると、28 号周溝墓よりは新しく、183 号土坑、10 号溝跡よりは古ないと判断した。本建物跡の柱穴と 9 号竪穴状遺構とは直接的な切り合いを持たないので、新旧は不明である。本建物跡の北側には 1 号竪穴状遺構、北西側には 9 号掘立柱建物跡などが分布している。遺構は遺物包含層である L II を除去後、L III a とした沼沢火山灰を含む黄褐色土の上面で確認した。

64 号掘立柱建物跡は南西隅の柱穴を確認できない。現況で南北 4 間以上、東西 2 間の側柱建物跡と推定される。北東隅の柱穴も 10 号溝跡に埋されて遺存していないため柱穴間の距離など詳細な計測値が不明である部分が多い。東側柱列を基準とする主軸方向は、北に対して 5 度西に傾く。建物跡の規模は東西幅が 5.4m、南北幅が 8.0m である。柱間距離は西側柱列で 1.9~2.1m、東側柱列で 1.9~2.1m、北側柱列では 2.3m を測る。北側柱列の柱間が東西柱列の柱間よりも幅広くなる特徴がある。

各柱穴の平面形は隅丸長方形となる。いずれの柱穴も長辺を各柱列に沿って配される。柱穴の規模は、長辺の長さが 60cm、短辺の長さが 52cm を測る。検出面からの深さは 15~50cm で、P 4・5 が最も深く、底面の標高は 185.1m である。その他の柱穴の底面の標高は 185.3m に揃っている。

柱穴内の堆積土は、柱痕跡と掘形埋土に分けられる。柱痕跡は P 8 を除き確認できた。土層の観

**64号掘立柱建物跡堆積土****P 1 堆積土**

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物・焼土極少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3
(NP・炭化物極少量含む。黄褐色土纏と黒色土の混土)

P 2 A 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物・焼土極少量含む)
- 2 黑褐色土 10YR3/2 (NP・炭化物極少量。青褐色土粒少量含む)
- 3 黑褐色土 10YR2/3 (NP極少量。黄褐色土粒少量含む)
- 4 黄褐色土 10YR3/3 (NP極少量。黒色土と黄褐色土の混土)

P 2 B 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物・焼土極少量含む)
- 2 黑褐色土 10YR2/3 (NP極少量含む。黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 黑褐色土 10YR3/3 (NP極少量。黄褐色土粒少量含む)

P 3 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/2 (NP・炭化物極少量含む)
- 2 にかい 黄褐色土 10YR4/3 (NP極少量。黑色土粒少量含む)
- 3 黑褐色土 10YR3/2 (NP極少量。黄褐色土粒少量含む)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3
(NP・炭化物極少量。黄褐色土塊含む)
- 2 黑褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物極少量含む)
- 3 黄褐色土 10YR3/3 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 5 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物極少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3 (黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 にかい 黄褐色土 10YR4/3 (黒色土と黄褐色土の混土)

P 6 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物・焼土極少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3 (NP極少量。黄褐色土塊少量含む)

P 7 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (NP・炭化物・焼土極少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3 (NP極少量。黄褐色土塊少量含む)
- 3 黑褐色土 10YR2/3
(NP極少量。黄褐色土と黒色土の混土)

図26 64号掘立柱建物跡

察から炭化物を含む黒褐色土で、ややしまりがない。本建物跡に用いられた柱材は直径20cmの丸太材と推定される。掘形埋土は黄褐色土塊と黒色土塊が混ざった土で、非常に堅くしまっている。

64号掘立柱建物跡のP 2～5, 7からは弥生土器、須恵器や土師器が出土した。これらの遺物は柱穴の掘形内から出土したもので、埋土や柱材の抜き取り後に混入したものである。それら遺物の内、形状や遺物の特徴が把握できる弥生土器を図29に示した。本建物跡の年代に関わる平安時代の遺物は、摩滅した小破片のため図示していないが、土師器壺と壺の破片が多い。

図29-6はP 7から出土した高壺である。口縁部上端と脚部裾を欠損するがほぼ完形に復元できた。壺部は底面から丸みを帯びて立ち上がり、中位に軽い段を作り口縁部に向かって外反して開く器形となる。外面ともミガキが密に施され、丁寧に仕上げられる。外面のミガキは、口縁部が縱方向から斜めになるのに対し、壺身の段から下位の部位は横方向のミガキとなる。内面は全体的に横方向のミガキが施される。脚部は「ハ」の字に開く器形である。脚部の中位には小さな円孔が4箇所開けられる。脚部と壺部の接合は、壺部の底面から粘土塊を脚内部に押し込んで接合される。外面の整形痕は器形に沿って縱方向のミガキを密に施して丁寧な仕上げとなる。内面は横方向のナデによって器面が均されている。7は壺の体部下半となる破片であろう。外面はやや粗い撲糸文が地文として施される。内面は摩滅して不鮮明であるが、指ナデの痕跡が確認できる。

64号掘立柱建物跡は調査区間に位置するため、その全容は不明であるが、南北4間、東西2間の南北に細長い特徴がある。本遺構と同様な規模を持つ掘立柱建物跡は、北側に位置する13号掘立柱建物跡で、主軸方向と同じくする。両掘立柱建物跡の距離も8mであり、同時期で計画的に配置されていた可能性が高い。年代は周辺から出土した遺物の年代観から、9世紀代と考えている。

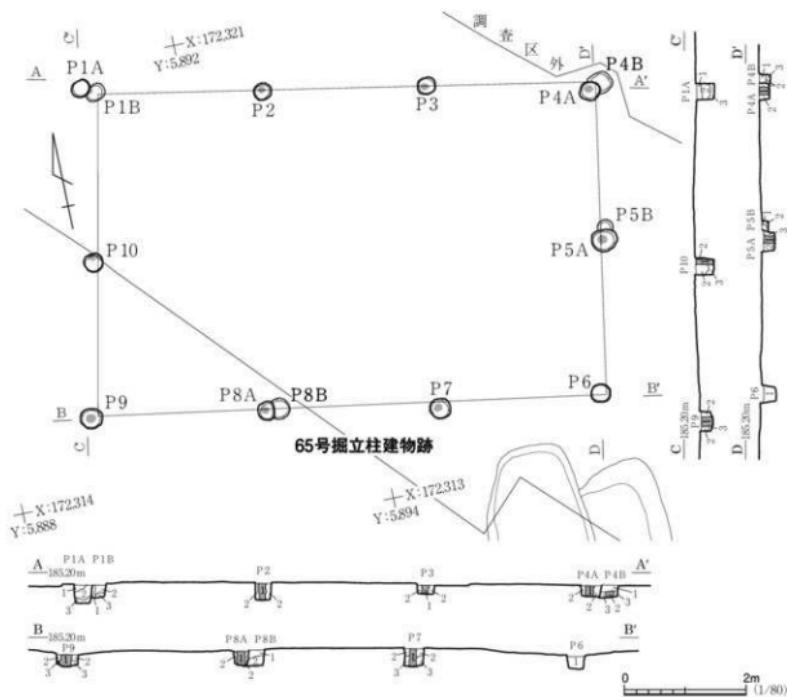
65号掘立柱建物跡（図27、写真19）

65号掘立柱建物跡は調査区③の中央部、E 7-I 9, J 8・J 9グリッドに位置する。周囲は標高185.0mの平坦地であるが、圃場整備による削平が著しい。本遺構と重複する遺構はないが、西側には193～195号・197号土坑、北側には196号土坑、南側には31号土坑が分布している。遺構はL III bとした黄褐色粘土層の上面である。

65号掘立柱建物跡は東西3間、南北2間の側柱建物跡である。P 1・4・5・8には柱穴の造り替えの痕跡が認められた。平面形は東西幅が長い長方形で、東側柱列を基準とする主軸方向は、北に対して10度東に傾く。規模は北側柱列が8.30m、南側柱列が8.35m、東側柱列が5.0m、西側柱列が5.45mを測る。柱間の距離は、南北柱列では2.0～2.2m、東西柱列では1.85～2.2mである。

各柱穴の平面形は円形を基調とする。規模は直径が24～34cmで、P 5が最も大きい。検出面からの深さは、18～34cmで、柱穴底面の標高は184.7mでほぼ揃っている。

柱穴内の堆積土は、柱痕跡と掘形埋土に大別できる。柱痕跡は黒色土を基調とし、炭化物粒を含んでいる。柱痕跡はP 1を除き、すべての柱穴で確認できた。その観察から柱材には、直径10cm程の細い丸太材が用いられたと推察している。掘形埋土は黄褐色土塊と黒色土塊が混ざった土で、



65号掘立柱建物跡堆積土

P 1 A堆積土

- 1 黃褐色土 10YR2/2
(NP極少量、黃褐色土塊多量含む、黒色土と混土)
- 2 黑褐色土 10YR2/1
(NP極少量、黃褐色土塊少量含む)
- 3 黃褐色土 10YR4/3
(NP極少量、黃褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 1 B堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1
(炭化物極少量、黃褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3
(NP極少量、黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)
- 3 棚所色砂質土 10YR4/1
(黄褐色土塊多量含む)

P 2堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1
(炭化物極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3
(NP極少量、黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 3堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1
(炭化物極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR4/4
(黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 4 A堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1
(NP極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR2/3
(NP極少量、黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 4 B堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2
(NP極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3
(NP極少量、黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 5 B堆積土

- 1 黄褐色土 10YR3/3
(黄褐色土塊多量含む)
- 2 海底砂質土 10YR4/4
(黄褐色土塊少量含む)

P 6堆積土

- 1 黄褐色砂質土 10YR3/3
(NP・炭化物極少量、黄褐色土塊多量含む)

P 7堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1
(NP極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR4/4
(NP・炭化物極少量、黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 8 A堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1
(NP極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3
(NP・炭化物極少量、黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 8 B堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/2
(NP・炭化物極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR4/4
(黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 9堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/2
(NP・炭化物極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR3/3
(NP極少量、黄褐色土塊少量含む、黒色土と混土)
- 3 黄褐色土 10YR3/3
(黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

P 10堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2
(NP・炭化物極少量、黄褐色土塊少量含む)
- 2 黄褐色土 10YR4/4
(NP極少量、黄褐色土塊多量含む)
- 3 黄褐色土 10YR3/3
(NP極少量、黄褐色土塊多量含む、黒色土と混土)

図27 65号掘立柱建物跡

硬くしまっている。

65号掘立柱建物跡のP1・4・7～10からは、弥生土器と平安時代の土師器片や須恵器片が各数点出土した。いずれも摩滅した小破片のため図示していないが、土師器はロクロ整形で内面が黒色処理された壊の破片が多い。

本遺構は東西3間、南北2間の掘立柱建物跡である。一部の柱穴に建て替えの痕跡が見られる。また本建物跡と主軸方向を同じくして8号掘立柱建物跡が分布し、その規模も8号掘立柱建物跡と同規模である。桜町遺跡の平安時代集落の中では、一般的な大きさの掘立柱建物跡である。周辺の掘立柱建物跡の配置からすれば、本建物跡の北側には、2間×2間の小型竪柱建物跡が伴う可能性が高い。

本建物跡の柱穴から直接的に年代を把握できる遺物は出土していないが、西側に分布する193～197号土坑から出土した遺物の年代観から、9世紀中葉頃を中心とした時期と推察している。

66号掘立柱建物跡（図28、写真16・20）

66号掘立柱建物跡は調査区②の中央部、E 8 - I 5・I 6グリッドに位置する。周囲は弥生時代と平安時代の遺構が密集する地点である。26号周溝墓の南溝とP2が重複し、本遺構が新しい。北側には7号掘立柱建物跡が主軸方向を同じくして分布する。遺構検出面はL III a上面である。

本遺構の南西側は調査区外へと続く。北側柱列の2間分と東側柱列の2間分を確認しただけで、

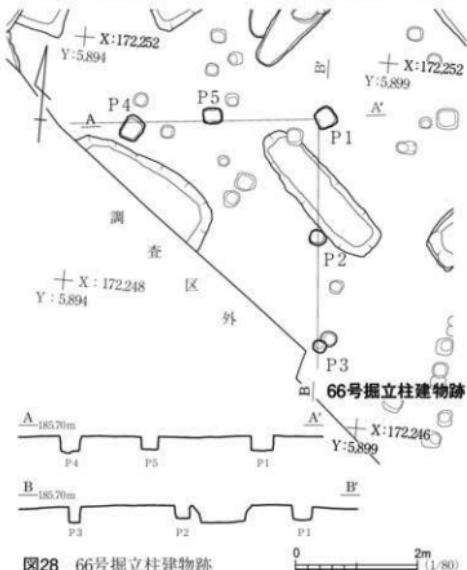


図28 66号掘立柱建物跡

その詳細な規模は不明である。東側柱列を基準とする主軸方向は北に対して5度西に傾く。柱間の距離は、北側柱列のP1～P5間が1.85m、P4～P5間が1.35mである。東側柱列のP1～P2間が2.0m、P2～P3間が1.8mである。

各柱穴の平面形は円形または隅丸方形である。その規模は24～36cmである。検出面からの深さは30cm前後で、柱穴底面の標高は185.30mに揃っている。

掘形内の堆積土は柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡は黒色土で、炭化物粒を含んでいる。柱痕跡の観察から、柱材には直径10cmほどの細い丸太材が用いられていると判断し

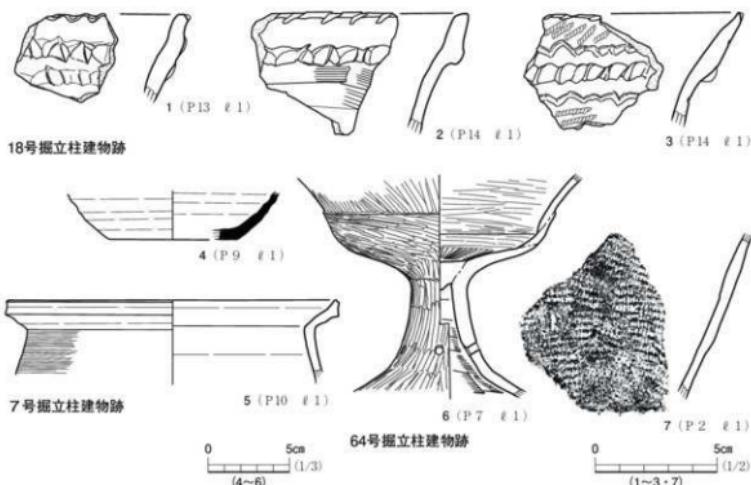


図29 7・18・64号掘立柱建物跡出土遺物

た。埋土は黄褐色土塊と黒色土塊が混ざった土で、硬くしまっている。なお、柱材の抜き取り痕は確認できない。

本遺構の柱穴からは、弥生土器と平安時代の土師器片が数点出土している。いずれも摩滅した小破片のため図示していない。

本遺構は南北2間以上、東西2間以上となる掘立柱建物跡である。主軸方向を同じくする7号掘立柱建物跡が北側に分布する。柱穴の規模が比較的小さいことから、小型の掘立柱建物跡であろうか。年代は出土遺物が少なく詳細が不明であるが、周辺に分布する掘立柱建物跡や廃棄坑の出土遺物と同時期で、9世紀中葉頃と推察している。

(福田)

第5節 土 坑

今回の4次調査では土坑を30基確認した。弥生時代の土坑は調査区②でのみ確認した。平安時代の土坑は、調査区①～③の掘立柱建物跡の周辺に多く分布する。本節では、遺構の構造が特徴的である弥生時代の164・165号土坑、平安時代の井戸跡である163号土坑を中心にまとめる。

1. 弥生時代の土坑

弥生時代に属する土坑は、164・165・181・182・184・192号土坑が該当する。164・165号土坑は掘形底面に木材が井桁状に組まれていた。丸太材を割り貫いた井戸枠が確認できないが、その構造は2次調査で確認した93号土坑に類似する。184号土坑は大半が調査区外へ続くため詳細は不明であるが、方形周溝墓となる可能性がある。その他の土坑は、その性格を特定できるだけの所見は得られていない。

164号土坑 (図30～32、写真24・39・42・43)

164号土坑は調査区②の中央からやや北側、E 8 - F 3・G 3グリッドに位置する。本土坑の北西側1.9mには165号土坑が分布する。周辺は近年の圃場整備により削平されて、南東側の遺構が密集する地点に比べて0.5m程低くなっている。そのため本土坑以外に弥生時代の遺構は遺存していない。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂の上面である。

検出段階では土坑中央部に黒色土の掘り込みがあり、その周りは黄褐色土と黒色土がブロック状に混ざった土が充填されている。検出時には大型となる柱穴のように見える。土坑の特徴が2次調査で確認した93号土坑と類似することから、調査の手順として、まず中央の黒色土を掘り込み、その後に周囲の充填土を掘り込むこととした。

黒色土の平面形は、上端部が崩落したのであろうか北西側が歪んでいるが、中位から底面は整った方形になる。その規模は一辺の長さが0.5mである。壁面は草木根の影響で細かな凹凸があるが、垂直に掘り込まれている。掘形底面よりも一段深く掘られている。検出面からの底面までの深さは0.74mである。底面はL III dとした褐色砂礫層に達している。

掘形の平面形は楕円形である。検出面での規模は、長軸の長さが1.64m、短軸の長さが1.42mである。底面の規模は、長軸の長さが1.3m、短軸の長さが1.1mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、部分的にえぐれる。底面は土坑中央に向かって深くなり、掘形底面上に木組みが造られている。

木組みは丸太材と長く剥ぎ取った樹皮を用いて、井桁状に組まれている。木組みの中央は四角形に開いており、この部分と黒色土の掘り込みが一致する。木組みの最下段は図32-8・9に示す太い丸太材を2本平行に据える。2段目は下段丸太材の中央部を開けて、下段と直交するように細い丸太材を8～10本並べる。さらに3段目は細長く剥ぎ取った樹皮と細い丸太材が用いられ、2段目の丸太材と直交するように敷いている。北半部では樹皮が良好に遺存していた。南半は遺存状

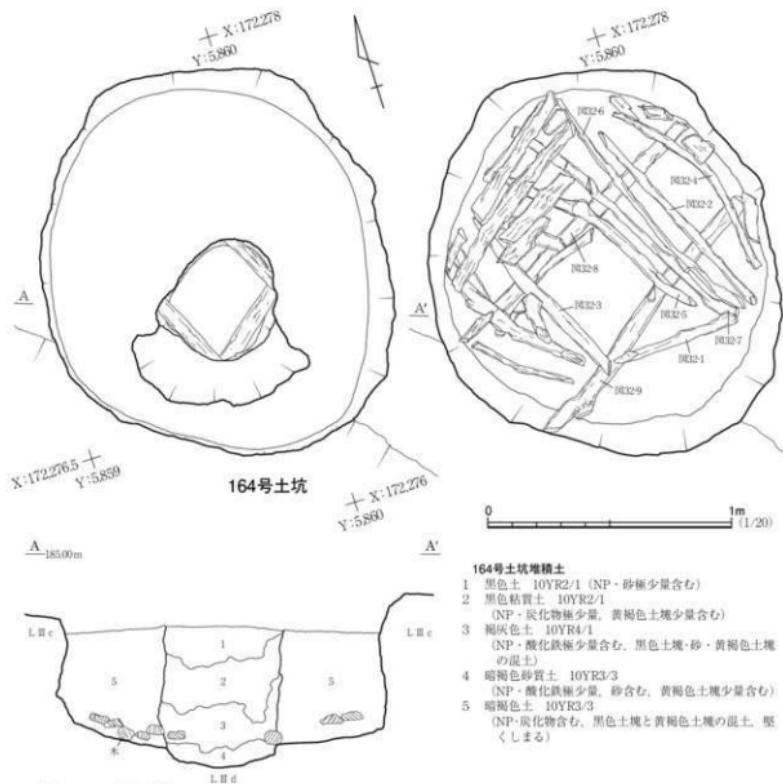


図30 164号土坑

態が悪く、丸太材の他に樹皮は確認できない。

164号土坑の堆積土は5層に分けた。1～4層は土坑中央部の黒色土である。1・2層は黒色土で均質な土質であり、自然流入土と判断した。3層はやや明るい色調の土で、掘形埋土の崩落土を含む。4は底面を覆う暗褐色土で、層中に薄い砂層が含まれる。水性堆積であろう。5層は掘形埋土である。黒色土と黄褐色土がブロック状に混ざった暗褐色土で、堅くしまっている。

164号土坑からは弥生土器が十数点と石器剥片が1点、土坑底面に組まれた割材と樹皮が併せて24点、埋土の下部からクルミの核果1点が出土した。弥生土器は土坑中央に堆積する黒色土中から出土したものと、埋土内から出土したものがあるが、人為的に埋設された出土状況ではない。また、いずれも小破片となった土器が多く、その中には煮炊きに用いられたのであろうか、外面に煤や炭化物が付着したものが含まれる。なお、クルミと図31-2の表面に付着した炭化物は放射性

炭素年代測定を実施し、その分析結果は付章2に掲載した。

図31-1は広口壺の口縁部破片である。幅の広い口縁部に交互刺突による立体的な波状隆線が全段めぐる。頭部は半裁竹管なども用いた横位の平行沈線が巡る。2は口縁部に山形突起が6箇所配された広口壺であろうか。口縁部下端に交互刺突による立体的な波状隆線がめぐる。口縁部の突起に反って沈線が巡り、弧文が配される。3は長頸壺の頭部であろう。弧文と波状文を組み合わせた矢羽形のモチーフを上下面違いに配した文様構成となる。モチーフの交点には円錐竹管の刺突が認められる。4・5は壺の上半部破片である。押し引き状の沈線で文様が描かれる。11は彫りが浅いクシ歯状施文具を用いて波状文が描かれた壺である。波状文は口縁部直下から密に施される。北関東地域の樽式土器の影響が強い土器である。12は外面が地文の撲糸文が施されるが、内面の整形痕にハケメが認められる。13~20は北陸系土器で、壺または甕の破片である。13は幅の狭い口縁部で、下端にわずかな段を持つ。口唇部が平坦に面取りされる。15は内外面ともに口縁部下端に段を持ち、口縁部が軽く外反して立ち上がる。口縁部はヨコナデで仕上げられる。頭部は整形

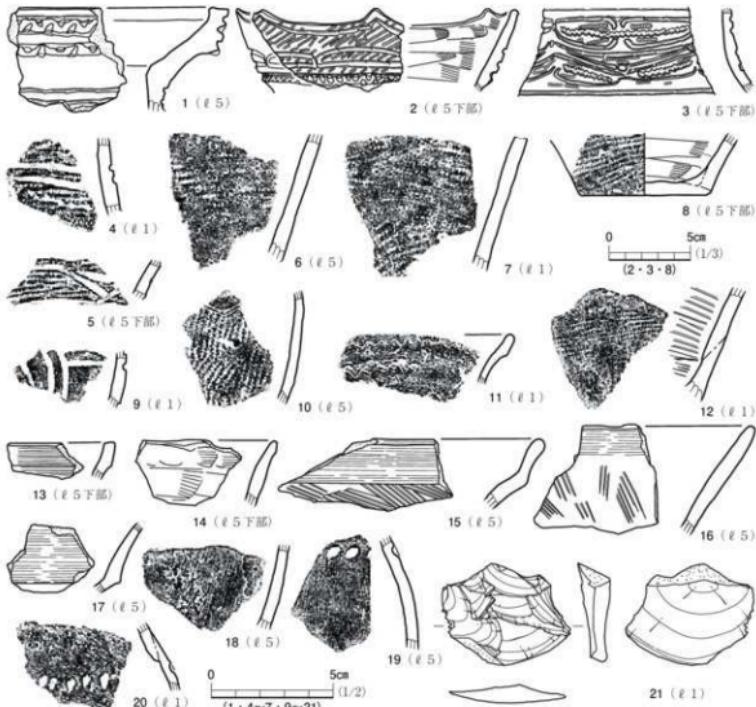


図31 164号土坑出土遺物（1）



圖32 164号土坑出土遺物（2）木質遺物

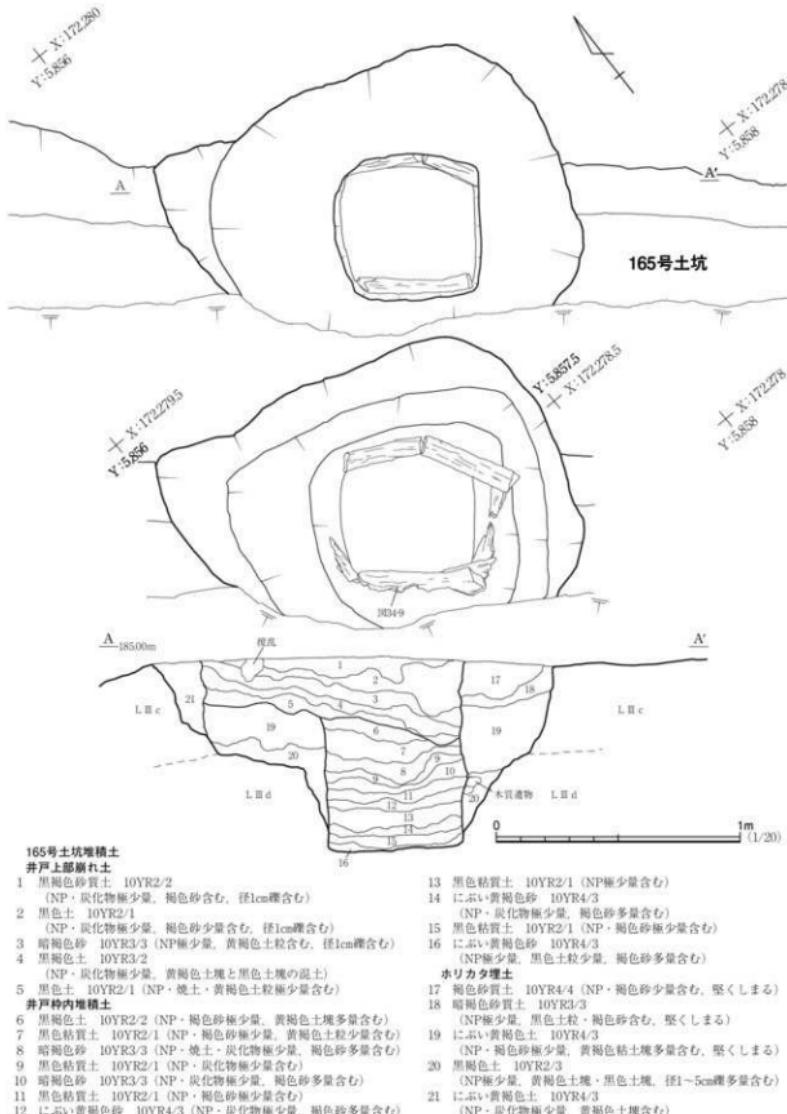


図33 165号土坑

痕としてハケメが残る。17はやや幅が広い口縁部で、下端に鋭い段をもつ。19・20は体部上半部の破片で、ヘラ状工具を押し当てた列点がめぐる。

図32は掘形底面に設置された木組みの構築材を図示した。樹種はケヤキである。詳細は付章1に掲載する樹種同定結果を参照されたい。

いずれも樹皮が遺存する丸太材である。長さを切り揃えたのであろうか、切断痕や枝を払った切断痕も確認できる。1・3・8・9の切断痕が明瞭である。切断面が平滑であることから、金属器の道具が用いられた可能性が高い。1の工具痕は材に対して直角に当たっている。刃先の形状がゆるく湾曲する工具が用いられているのであろう。8・9の工具痕は材に対して斜めになる。材に工具の刃先が当たった痕跡がなく、切断面がわずかに曲面となって振り抜いている。工具の動きとしては、オノやナタのように打ちつけて切断するのではなく、チョウナのような横刃の工具を用いているのであろう。材を横置きにし、工具にスナップをきかせた円運動で、刃先で削りとるような動きが推定される。細い枝などは刃物で一気に切り落としているが、太い枝は半ばほどに工具痕を残し、その後折り切っている。

165号土坑（図33・34、写真25・39）

調査区②のE 8 - F 3グリッドに位置する。本土坑の南東側1.9mに164号土坑が分布する。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂の上面である。

165号土坑は南西部を水路で壠されているため、検出時の平面形は歪んだ梢円形となる。掘形の

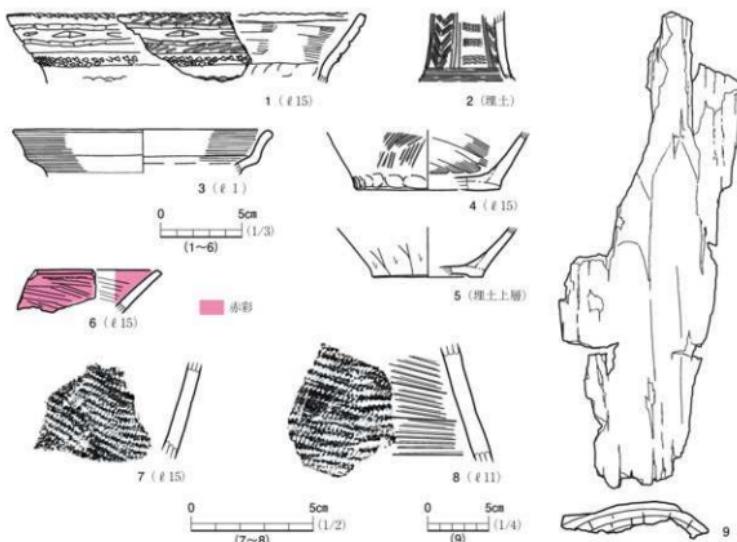


図34 165号土坑出土遺物

規模は東西方向の長さが1.65m、南北方向の長さが1.1mを測る。掘形底面は整った隅丸方形をなす。その規模は一辺が1.25mである。周壁は上端部が崩落により崩れ、やや開き気味になる。中位から底面にかけての壁面は急傾斜で底面に向かって狭まる。

土坑中央に見られる掘り込みは、上層部の黒褐色土を15cm程除去した段階で確認した。この黒色土の範囲は、一辺が0.6m程の隅丸方形をなす。検出面からの深さは0.78mである。掘り込みは草木根の影響で細かな凹凸が見られるものの、ほぼ垂直になる。

木組みは掘形底面から10cm程浮いた位置で、土坑中央部の掘り込みに面した部分だけが遺存している。遺存状態が悪いが、土坑中央部が六角形に空くように組んでいるのであろう。本来ならば164号土坑と同様に、多量の木材を用いた木組みであった可能性が高い。

遺構内の堆積土は、土坑上端部の崩落土を含む自然流入土、土坑中央部の木組み内部に見られる黒色土と掘形埋土の3つに分けた。上部堆積土は1～5層にあたる。黄褐色土塊と黒色土塊が混ざり、直径1cm前後の小礫を含む黒褐色を基調とする堆積土層である。土坑上部の崩落土を含んでいる。木組み内の堆積土は6～16層である。黒褐色土と黄褐色砂が互層をなして堆積する。いずれの堆積土も含有物が均質であることから、水性堆積に起因すると判断した。本土坑の機能時期は、土坑中央の木組みに囲まれた内部は、開放状態であったと考えている。掘形埋土は17～21層である。黄褐色土塊と黒色土塊が多量に混入する暗褐色砂質土と黄褐色砂が交互に堆積する土層である。人為的に埋め戻した土で、非常に堅くしまっている。木組みは掘形底面より10cm程浮いた位置に設置されている。

165号土坑からは弥生土器が十数点出土した。その他に土坑底面に組まれた割材が6点、5層下部からクリの鬼皮が1点出土した。本土坑から出土した弥生土器は、164号土坑と同様に、特段埋設された出土状況は認められず、破片となって堆積土中に混入したものと判断した。また図34-1・3は煮炊きに用いたためか、内外面とも炭化物が厚く付着していた。3に付着する炭化物とクリについて放射性炭素年代測定を実施し、その分析結果は付章2に所収した。

1は広口壺の口縁部破片である。幅の広い口縁部が軽く外傾して開く。口唇部は平滑に面取りされて、その断面形は四角形になる。口唇部にはヘラ状工具による斜位のキザミが巡る。口縁部には太い沈線で、2本の横線が描かれ、その沈線間には円形竹管を左右からの刺突が加えられる。口縁部下端に交互刺突が施される。斜め方向からの刺突が部分的に交互刺突にならずに乱れた部分が認められる。頸部にはクシ歯状施文具による横位波状文が巡る。2は細頸壺の頸部破片である。4本歯のクシ歯状施文具を用いて文様が描かれる。頸部文様帶を縦位に区画し、その内部にV字を5段重ねた文様と連続刺突による横線を3段描かれた文様を交互に配される。3は北陸系土器の壺である。口縁部下端にやや丸みを帯びた段が作られる。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられる。4・5は壺または甕の底部資料である。5はいわゆる輪台になる。6は高坏の口縁部破片である。口唇部が丁寧に面取りされて、その断面形が四角くなる。内外面ともに横位のミガキが密に施されている。また内外面ともにベンガラを用いて赤彩される。

9は掘形の底面付近で確認できた割材である。遺存状態が悪く切断痕などは観察できないが、ミカン割りされた材であろう。また部分的に樹皮が遺存している。樹種はトチノキである。

164・165号土坑は、掘形底面に造られた木組みや土坑中央部の掘り込みなどの特徴が共通する。土坑の堆積土の観察から、大きな柱穴との理解も可能であろう。掘形底面に設置された木組みが柱を支える裏込めの役割が考えられる。木組み内に柱材の痕跡がなく、その内部に充填された黒色土中に水性堆積による砂層が入ることから、柱材が抜き取られた後に降雨などの影響で流入した土である可能性が考えられる。一方、木組みの構造は2次調査で確認した弥生時代の井戸跡と考えている93号土坑の木組みに酷似する。93号土坑では、丸太材を削り貫いて作られた井戸枠を支えるように割材が井桁状に組まれていた。164・165号土坑は井戸枠が確認できないものの、木組みの内部が開放状態であった構造であれば、93号土坑と同じ規模の井戸跡とも考えられる。両土坑の性格を断定できる積極的な根拠を欠き、本項では井戸跡または大型柱穴とする両説を列記しておく。

年代は出土した遺物の特徴は、天王山式土器の特徴を残す在地器と北陸地域や北関東地域の外来系土器が混じる。図31-15や図34-3に示した甕の口縁部形状は、93号土坑出土土器の内容と矛盾ないことから、桜町I式期と考えている。

184号土坑（図35・49、写真27）

本土坑は調査区②の中央部、F 8-J 6グリッドに位置する。遺構の南西部が調査区外へと統くため、その全容は不明である。本土坑の北東側には26号周溝墓が位置する。

本土坑の平面形は梢円形をなす。その長軸方向は26号周溝墓南溝の方向とほぼ一致する。本土坑の規模は、長軸の長さが28m以上、短軸の長さが14mを測る。29号周溝墓の東溝とはほぼ同じ規模である。検出面からの深さは0.3mである。底面は草木根の影響により細かな凹凸があるものの、ほぼ平坦となる。また土坑の中央が最も深く、両端部に向かってわずかに浅くなる。底面の状態についても、29号周溝墓の周溝と類似している。本土坑の堆積土は2層に分けた。1層は炭化物や黄褐色土粒を含む黒色土で、2層は焼土粒や炭化物粒、黄褐色土粒を含む暗褐色土である。いずれの土層も混入物が均質に堆積することから自然流入土と判断した。堆積土の観察においても、周溝墓を構成する周溝内の堆積土と明瞭な違いは認められない。

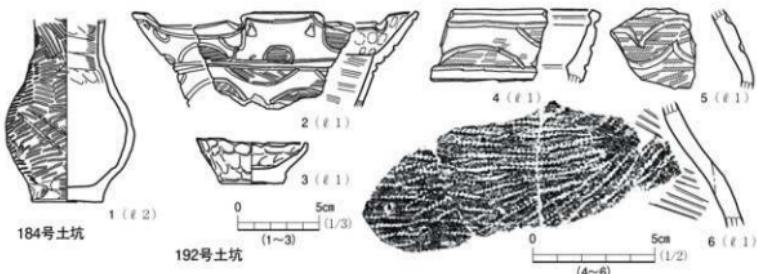


図35 184・192号土坑出土遺物

184号土坑からは、弥生土器が十数点出土した。その内形状が把握できたものを図35に示した。1は図49の土層断面図に示すように、土坑の底面から浮いた状態で1層の下部から出土した。口縁部を欠くが、小型の長頸壺であろうか。やや下彫れの体部から、細長い頭部が伸びる器形である。外面の調整痕として、器面をハケメで均した後に、地文となる撲糸文を施している。頭部には地文撲糸文が施されずに、ハケメが残っている。底部付近は横位の指ナデで整えられる。内面の整形痕は指オサエと指ナデを主体とし、やや粗雑な作りである。

本土坑は26・29号周溝墓の四辺を区画する周溝と形状が酷似する。本項では、調査区間に位置するため土坑の全容が把握できないだけでなく、これに対応する周溝が確認できないことから土坑とした。本土坑の年代は、26・29号周溝墓と同様に桜町I式期と考えている。

181・182号土坑（図48、写真27）

これらの土坑は幅が狭く、細長い溝状となる。調査区②の南部、標高185.6mの平坦面に位置する。いずれの土坑も5号周溝墓の南東側に位置する。遺構検出面はLⅢcとする黄褐色砂の上面である。両土坑とも底面は比較的平らで、両端部に向かって浅くなる。遺構内堆積土は黒褐色土を基調とし、いずれも自然流入土と判断した。

両土坑からは、摩滅した弥生土器の小破片が数点出土した。図示していないが、桜町I式期に相当する土器である。また、遺構の構造や堆積土の特徴などからは遺構の性格を特定できない。ただ遺構の形状などは、28号周溝墓の周溝と類似するが、本土坑と対応して墳丘の四辺を区画する周溝が確認できない点を指摘しておく。

192号土坑（図35・50）

本土坑は調査区②の中央部、E8-J5グリッドに位置する。26号周溝墓の西溝と重複し、本土坑が古いと判断した。平面形は細長い楕円形である。規模は長さが2.9m、幅が0.74mを測る。深さは5cmと浅い。底面は草木根の影響であろうか、細かな凹凸が目立つ。遺構内堆積土は炭化物粒と褐色砂を含む黒色土で、自然堆積と判断している。本土坑の性格を特定できる所見は得られていないため、その詳細は不明である。

本土坑からは弥生土器が十数点出土した。そのうち形状が把握できたものを図35に示した。図35-2は浅鉢であろうか。口縁部破片のみで底部は遺存していない。図19-2に示した浅鉢底部の形状から平底になるのである。器形は、やや丸みをおびた体部が頭部で屈曲し、口縁部が大きく開く。口縁部は台形をなす突起が4単位取り付く。外面の文様は、頭部に二重沈線で口縁部と体部の文様体を区画する。それぞれ弧文を面違いに配した文様をモチーフとする。弧文の内部には撲糸文が充填される。口縁部の台形突起には、その両端部に円形竹管を用いた刺突が施される。3は小型の鉢であろうか。製作時の指オサエが顕著に残り、やや粗雑な作りである。4は広口壺の口縁部破片である。口唇部は丁寧に面取りされて、その断面形は四角形になる。内外面ともに口唇部直下に横位の沈線が巡る。口縁部の文様は弧文を面違いに配置している。弧文の内部は撲糸文が充填される。5は壺の体部上半の破片である。面違いとなる連弧文が描かれる。6は長頸壺の体部上半

であろう。地文としてやや粗い撲糸文が施される。

本土坑は重複する26号周溝墓よりは古いが、出土遺物の特徴は、桜町Ⅰ式期の範疇で捉えられる。

2. 平安時代の土坑

平安時代に属する土坑は、その形態的な特徴から井戸跡、掘立柱建物跡に伴う廃棄坑、性格不明の土坑に分類した。井戸跡は163号土坑、廃棄坑は166・170・171A・171B・174・175・178・183・185・193～198号土坑の15基が該当する。その他性格不明の土坑は167～169・186・187・189～191号土坑の8基が該当する。

井戸跡 163号土坑（図36～46、写真22・23・40・44～50）

163号土坑は調査区②の中央からやや北西部、E 8-G 3グリッドに位置する。周囲は近年の圃場整備により削平されている。標高は184.8mで、調査区②の中央部に比べて0.6m程低い。遺構検出面はL III cとした黄褐色砂の上面である。本土坑の東側には58号掘立柱建物跡が分布する。

井戸跡の構造は、掘形内部に板材を用いた井戸枠を井桁状に組み上げている。掘形の平面形は、検出面では南側が直角四角形となる。底面付近は整った正方形になる。検出面での規模は、長辺の長さが1.47m、短辺の長さが1.4mである。底面は一辺の長さが1.2mを測る。検出面から掘形底面までの深さは1.08mを測る。井戸底である8層上面までの深さは0.8mである。掘形底面から0.2m上部に段があり、底面より一回り大きい平坦面が造られる。掘形の周壁は垂直になるが、南壁は崩れて大きく外側に広がる。

井戸枠は14枚の板材が井桁に組まれた状態で遺存していた。井戸底付近から井戸枠の破片が出土していることから、井戸口まで井戸枠が組まれていたのである。井戸枠の最下段は、周壁の段に乗せるように設置されている。井戸枠には全長が1m程の板材が用いられる。両端に組み合わせのための切り欠きが作られる。井戸枠は井桁に組み合わせられ、内壁の規模は一辺の長さが0.75mである。井戸枠東辺の向きは、北に対して30度東に傾く。井戸枠は、図45に示す模式図のように、切り欠き部で隙間なく組み合わるように、幅の異なる井戸枠を上下に組み合わせている。

井戸跡の堆積土は井戸枠内部と掘形埋土に分けた。井戸枠内部の堆積土は1～8層である。いずれの土層も黒褐色土塊や黄褐色土塊がブロック状に混入することから、人為的に埋め戻した土と判断した。上層の1～5層は掘形埋土を崩すように堆積する。井戸枠の上部を壊しながら井戸を埋めたのである。6・7層はそれぞれ水平に堆積する井戸底を一気に埋めた土層であろう。7層の下部と8層の上端部の境には、薄い砂層と木の葉など植物遺存体を含む黒色土が互層をなして観察できる。井戸が使用されていた時期の堆積土と判断した。8はグライ化した砂層である。井戸水をろ過するために、井戸の構築時にあらかじめ掘形底面に敷き詰めた砂であろう。8層の上面で遺物が出土することからも、8層上面が井戸底となると判断した。掘形埋土は9～14層に相当し、井戸枠の裏込め土である。にぶい黄褐色砂質土と黒褐色土が交互に堆積する。井戸枠の2段目上端と12層上面が描っていることから、井戸枠を組みながら埋めていたのである。

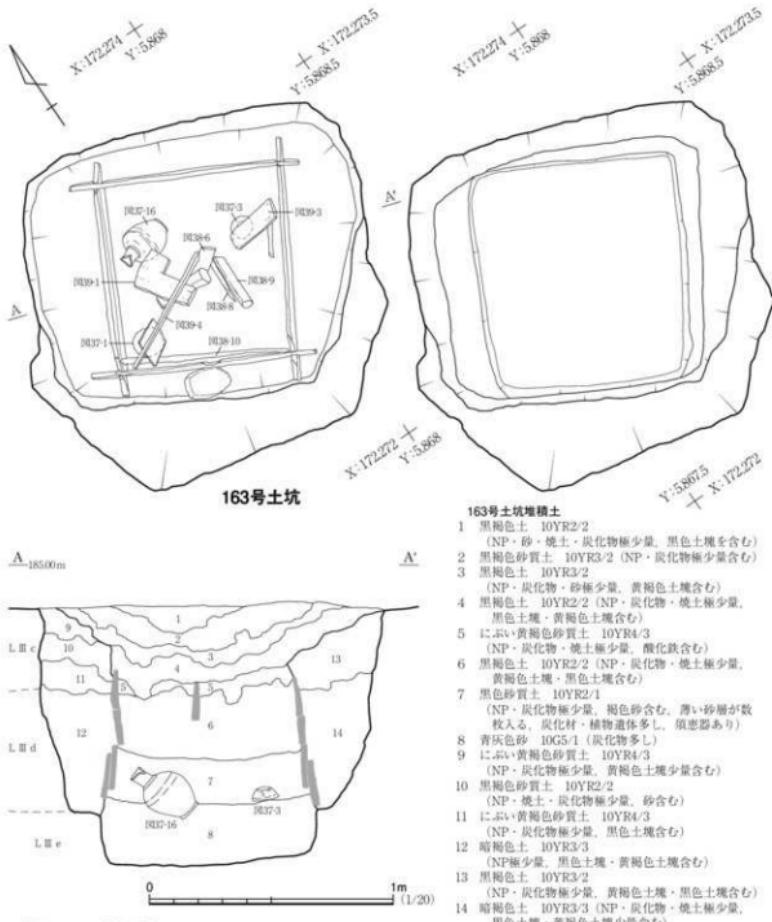


図36 163号土坑

163号土坑からは弥生土器が数点と平安時代の土師器や須恵器、木製品が出土した。その他に井戸枠が遺存していた。それらのうち形状が把握できた遺物について、土器類は図37、木製品は図38、井戸枠は図38～46に示した。遺物は井戸枠内部から出土したもののが大半を占める。特に8層上面から図37-1・2・16、図38-1・3・8・9が出土した。出土状態などから、井戸跡の廃絶に当たり一括で投棄された遺物と考えている。

図37-1～7は土師器の壊である。いずれも内面はミガキが施され、黒色処理される。内面の

ミガキは口縁部付近で横方向のミガキが密に施される。底面は放射状になるものと六角形になるものが認められる。1・2は体部が丸みを帯びて立ち上がる器形である。体部下端から底面は回転ヘラキリで整えられる。3は体部下端から底面の縁辺部まで回転ヘラキリで整えられるが、底面中央部に回転糸切り痕を残している。4は体部外面に墨書き認められる。文字の一部であるため、判読できない。6は底部の径が小さく、体部が直立気味に立ち上がる。口縁部の径が小さい、小型坏であろう。底部は回転糸切り痕が残る。7は大振りの坏であろうか。底部の径が大きく、体部が開き気味になる。8は土師器の鉢で、内面が黒色処理されている。内面は火熱を受けたのであろうか、

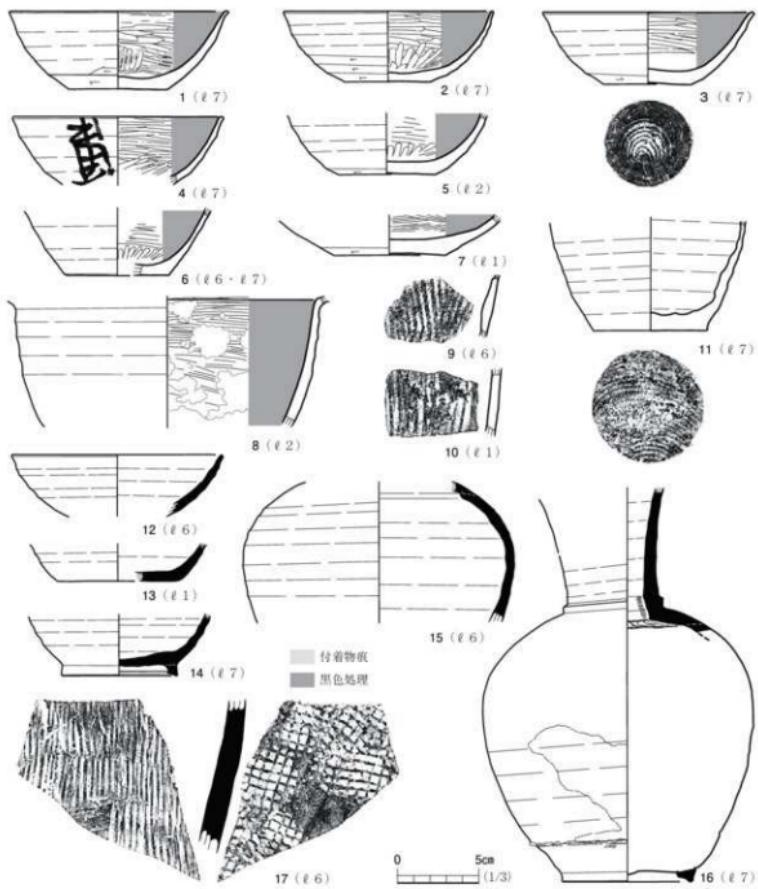


図37 163号土坑出土遺物（1）

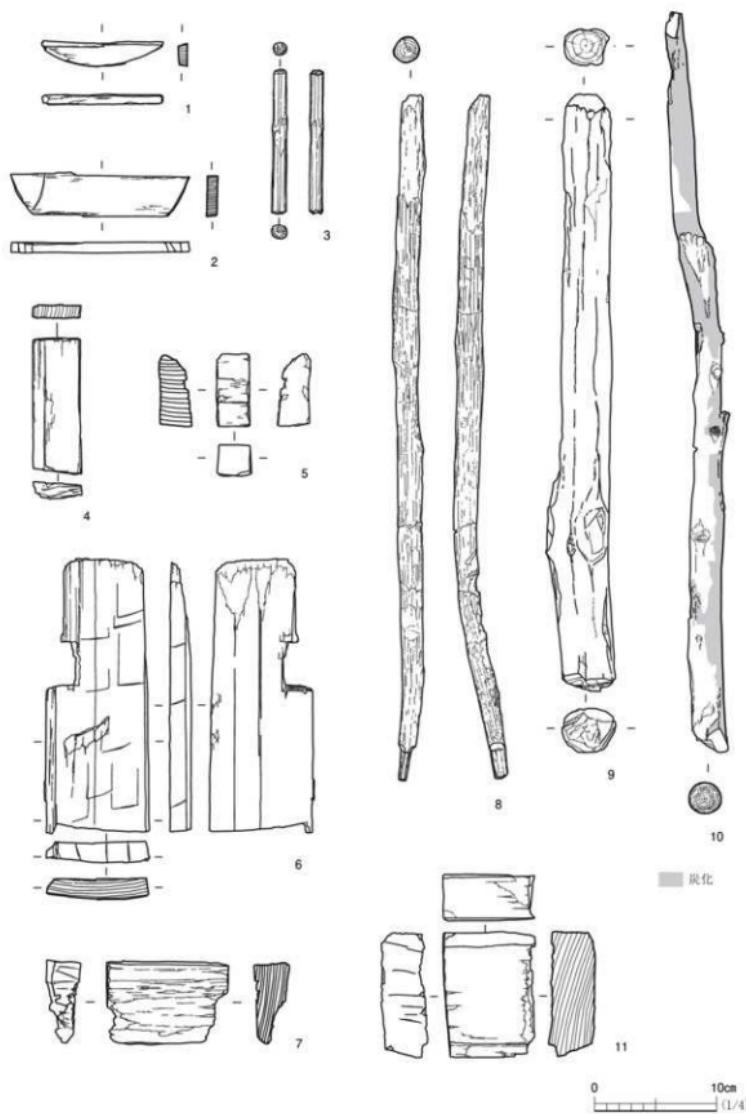


図38 163号土坑出土遺物（2）木製品

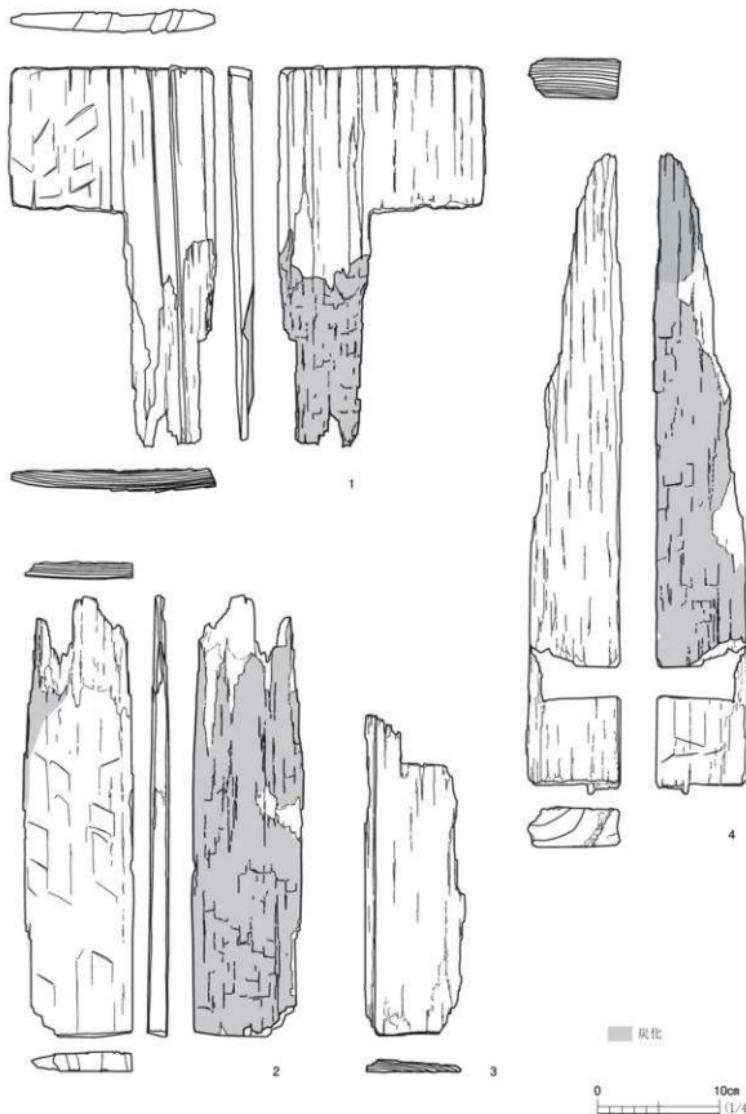


図39 163号土坑出土遺物（3）井戸枠

器面が薄く剥落している。そのためミガキの痕跡が不鮮明で、全体的には口縁部付近が横方向のミガキが密で、体部は斜め方向のミガキが観察できる。9・10は土師器甕の体部破片である。体部下半の破片で、外面にはタタキ具痕が残る。11はロクロを用いて整形された土師器の小型甕である。内外面ともロクロメを顯著に残す。底面にはロクロを止めて糸を用いて切り離した痕跡が残る。

図37・12・13は須恵器坏である。12は体部がやや丸みを帯びる器形となる。13はやや底部の径が広く、体部が直線的に立ち上がる。14は須恵器の瓶類であろう。高台が貼り付けられる。高台の断面形は四角形で、やや爪先立ちとなる。15・16は須恵器の長頸瓶である。15は体部上半部の破片で、内外面ともロクロメが観察できる。16は口縁部を欠損するが、ほぼ完形品である。体部下半は焼成時に焼き歪みが顯著で、焼台が貼り付いていた痕跡も認められる。また体部上半に見られる自然軸は褐色で発泡した状態であり、部分的に発泡した自然軸が剥落している。頸部は細く、やや直立気味に立ち上がる。頸部と体部の接合部にいわゆるリング状突起がめぐる。体部は上半部

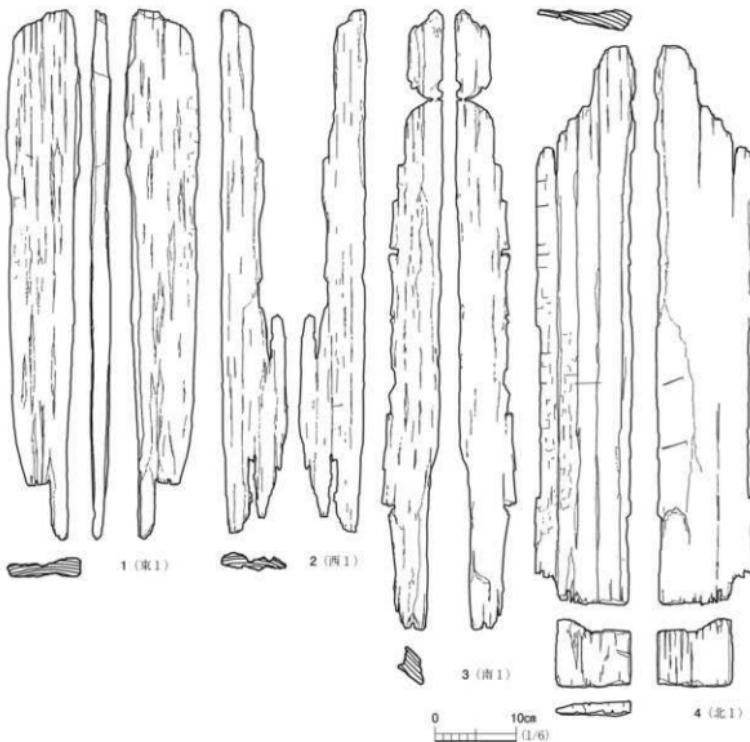


図40 163号土坑出土遺物（4）井戸棒

が丸く、底部に向かってすぼまる。高台は底面に貼り付けられ、ロクロの回転を利用して整形される。その断面形は三角形になり、やや爪先立ちで接する。17は須恵器甕の体部破片である。外面はタタキ具痕、内面は格子目文のアテ具痕が観察できる。

図38-1・2は曲物の底板である。1の側縁には縫じ皮を止める切込みが観察できる。3は図37-16に示す長頸瓶の内部に入っていた。棒状木製品としたが、用途は不明である。表面を丁寧に面取りされている。両端部は外側から中心に向かって削り、平滑に整えられる。4は用途不明の板状木製品である。5は井戸枠が組み合わせる部分に挟まれていた木片である。井戸枠の構築時に

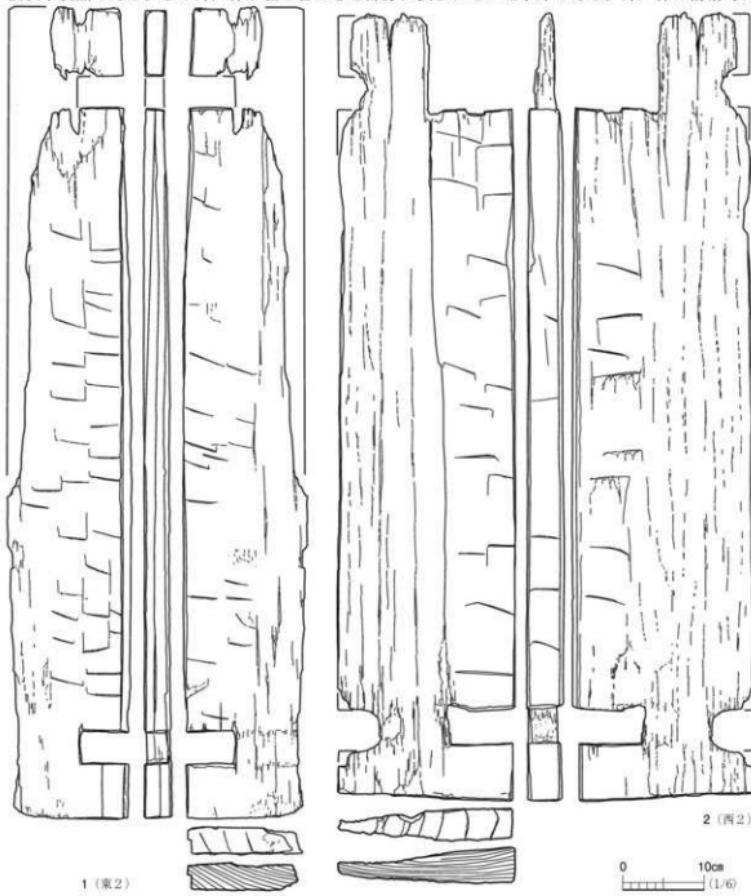


図41 163号土坑出土遺物（5）井戸枠

クサビとして用いられていたのであろう。6・7・11は井戸枠の破片であろう。出土状態は井戸枠としての原位置を保っていないことから、崩落した井戸枠と判断した。腐食がすすみ、板が痩せている。6は切り欠きが2箇所認められる。10は井戸枠南3に接して、7層下部から横になった状態で出土した。部分的に樹皮が遺存する丸太材で、下端部は斜めになる。出土状況からは用途は不明である。8は丸木弓で、樹種はエゴノキ属である。弭が残る部分を下にして、38図9を沿わ

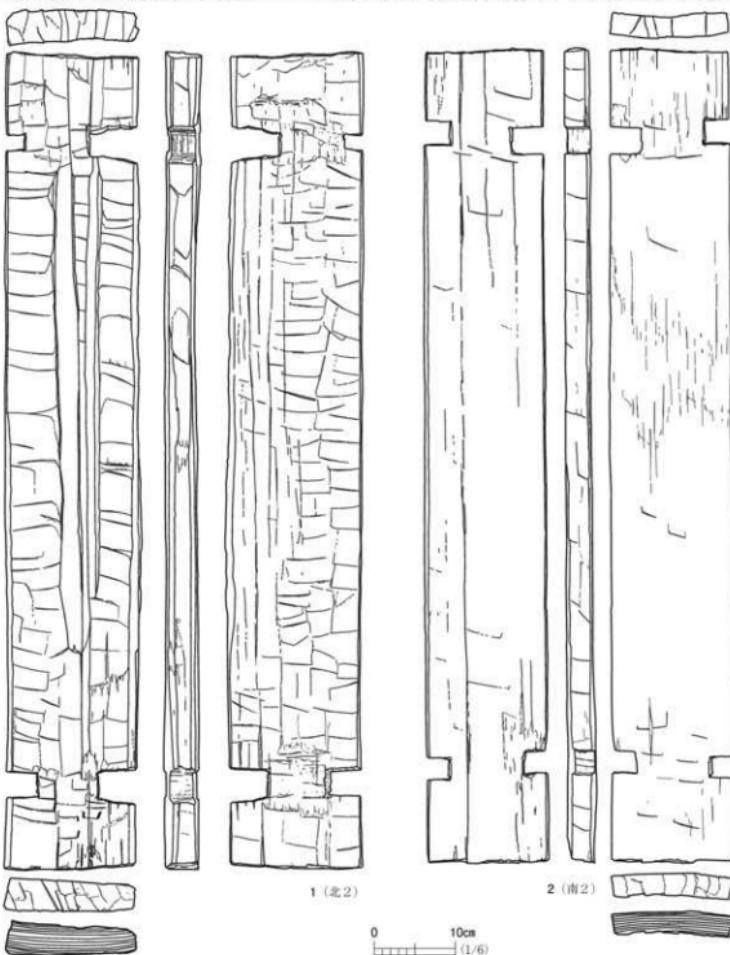


図42 163号土坑出土遺物（6）井戸枠

せて直立するように立てられていた。弭部分は8層の半ば程に達していた。8は出土状況に合わせた天地で図示しているが、上端部が腐食して遺存していないため、弓の本来の天地は不明である。また弓幹は土圧で変形しているだけでなく、取り上げ時に6片に折れてしまったため、図示した形状を留めていない。弓幹は直径2.3cmの丸木で、弭付近に見られる節を削られている。表面は弓幹に沿って丁寧に面取りされ、その断面形が丸く整えられる。弭は弓幹の先端部を両側面から削り出している。断面形は角が斜めに面取りされた長方形である。弓幹と弭の境には深さ2mm程の浅い溝

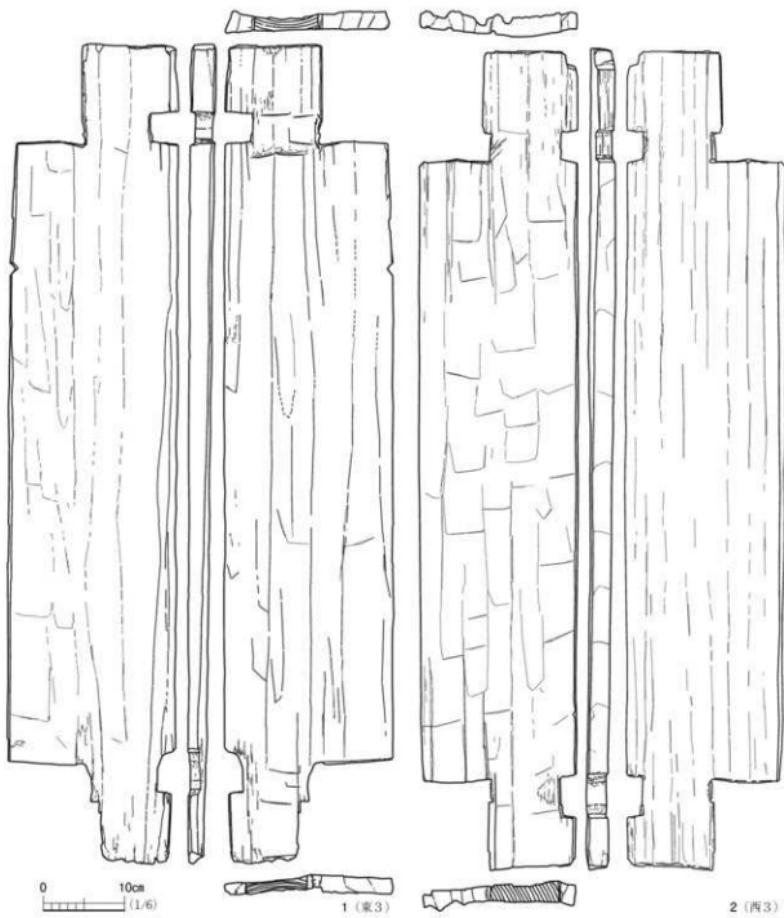


図43 163号土坑出土遺物（7）井戸棒

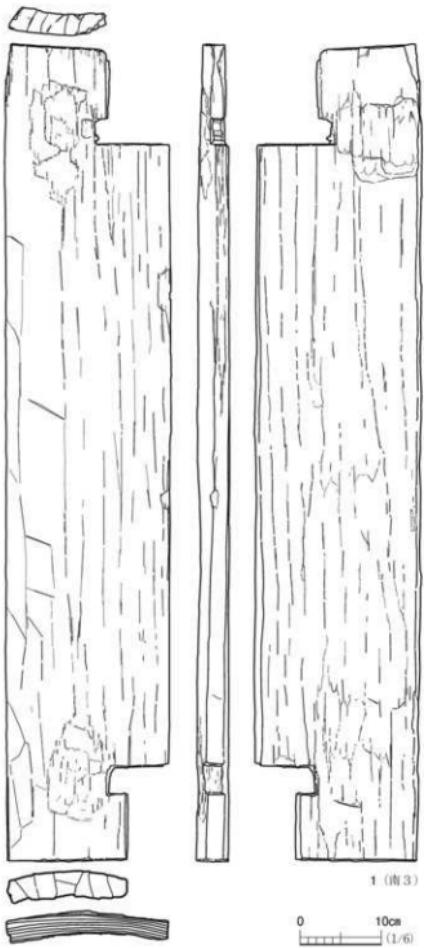


図44 163号土坑出土遺物（8）井戸枠

部分がかろうじて残っていた程度で、切り欠き部が遺存していない。東1は片側切り欠きで、端部がL字形であろう。北1は両側切り欠きで、端部の形状は西2と同じになる。東1と北1は裏面が炭化している。井戸構築時に井戸枠の腐食を防ぐために板材の表面を焼いたのであろう。南2と北2は幅が狭い板材が使われている。両側縁からの切り欠きを持ち、端部はT字形になる。東2と西2は幅が広い板材である。東2は腐食して接合しないが、片側だけの切り欠きであろう。西2は

が見られる。弦をかけるための溝であろう。なお、この部分には弦であろうか、紐状の繊維が残っている。その他に樹皮巻きや漆塗りの痕跡は認められない。9は弓に沿わせて直立気味に刺さっていた丸太材である。上端部は腐食しているが、下端部は切断痕が明瞭に観察できる。樹皮が剥ぎ取られた丸太材である。切断痕は材に対してほぼ直角になるように工具刃先を打ちつけ、最後は折り切っている。刃先はわずかに湾曲することから、オノであろうか。

図39は井戸内に崩落した井戸枠の破片である。腐食が進み、板材自体が痩せている。加工痕などは観察できない。1・4は井戸枠を組み合わせる切り欠きが遺存している。1・2・4は裏面が焼けて炭化している。

図40～46は原位置を保っている井戸枠である。井戸枠の名称は、上部から底面に向かって1～3段とし、四辺の方位を組み合わせて表記した。例えば西側の2段目の井戸枠は西2と称している。なお、井戸枠東3・西3の外側に板材が各1枚立てかけるように添えられていた。これらは井戸枠との木組みは認められないが、ここでは東4・西4と称した。

1段目の井戸枠はかなり腐食がすみ、形状は失われている。2段目と接する

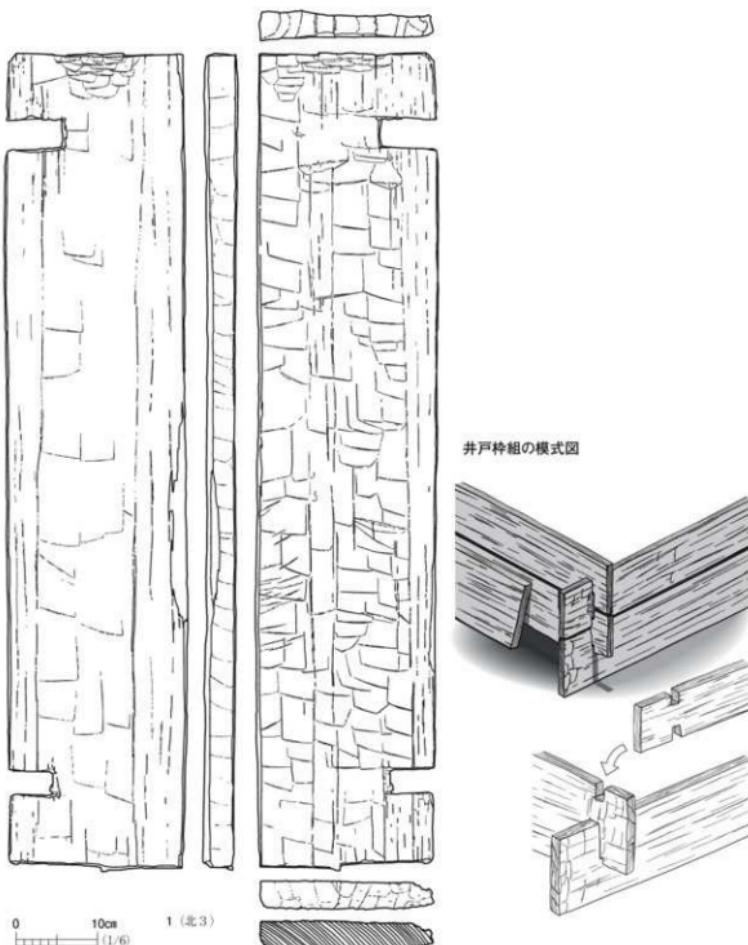


図45 163号土坑出土遺物（9）井戸枠

両側縁からの切り欠きがあるが、端部の形状は、L字形とT字形と形状が異なる。また井戸枠と掘形埋土の裏側には弱く焼けた痕跡がある。南3と北3は片側だけの切り欠きで、その端部がL字形になる。南3は両端部を切り取っている。東3と西3は両側縁に切り欠きを持ち、それぞれ切り欠きの深さが異なる。その端部は浅い切り欠き側にかえりを持つL字形になる。4段目は東3と西3の外側に立てかけてあった板材である。井戸枠とは組み合わされていない。3段目の組み合わせで

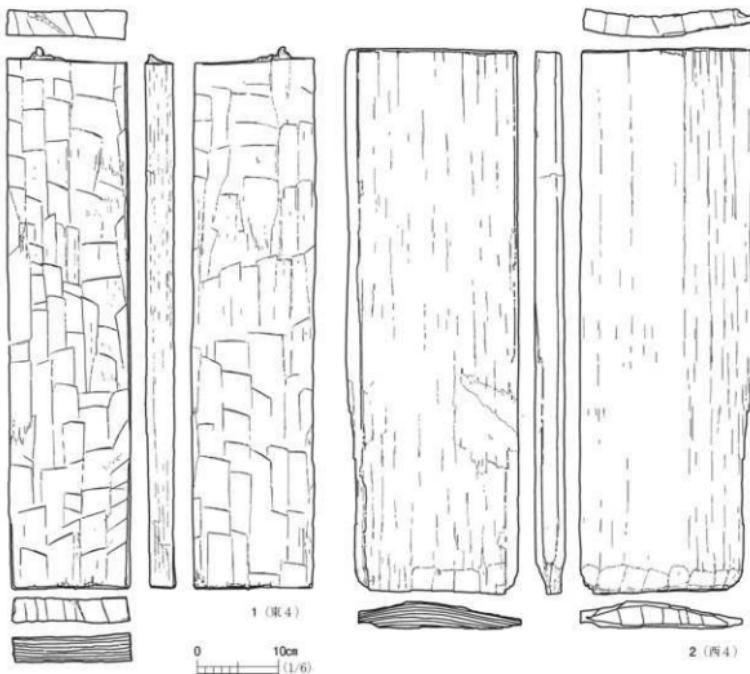


図46 163号土坑出土遺物（10）井戸掘形

生じた井戸掘形との隙間をふさぐ板と判断した。東4と西4は、いずれも切り欠きがない長方形の板材である。東4は小口面に切断痕を残すが、面取りして直角に切り揃えている。表面には工具痕が明瞭に残る。西4は原本の表皮に近い部位を使った板材で、外側が丸く湾曲する。小口面は両端とも直角に切り揃えられるが、下端部には両面から削りを加えて薄く仕上げている。

井戸枠の加工痕の観察から、大きく3種類の工具が用いられていたと考えている。板材に加工する製材と切り欠き部の加工に用いられた工具である。原本の伐採から板材をとるまでの痕跡は確認できない。板材の加工には表裏面を平滑に整える加工と小口面を直角に切り落とす加工がある。表面の加工痕は幅5cm前後で、刃先が緩やかに湾曲する。木目は沿って縱方向に薄く削ぎ取るように削っている。チョウナのよう横刃の工具が想定される。小口面は板材をある程度の長さに揃えて折り切った痕跡が残るが、いずれも小口面は直角に切り揃えて平滑になる。加工痕の刃先は直線的になる。刃先幅が分かる痕跡がなく不明である。切り欠き部の加工痕は、板に対して直角になるように当て切断している。切り欠きの奥には溝状の加工痕を残す。ノミのような工具であろうか。

163号土坑の年代は、出土した土器類の特徴から、9世紀中葉頃には廃絶を迎えたのであろう。

井戸底から出土した土器や木製品の出土状況から、井戸の廃絶に際して祭祀が行われていると判断した。井戸底に弓を突き立て、祭祀に用いた長頸瓶や壺や曲物を一括して投棄して、井戸を埋めたのであろう。祭祀の具体的な内容は不明であるが、井戸祓いに関わる祭祀の一つと推察される。

廃棄坑（図47～52、写真26・27・40・41）

廃棄坑とした土坑の特徴をまとめると、以下の点が挙げられる。①掘立柱建物跡の周間に複数基がまとまって分布する傾向にあるが、建物跡の南側には分布しない。②平面形は橢円形を基調とするが、不整形なものも多い。③規模は、長軸の長さが1～2m前後のものが多いが、3mを超える大型土坑も存在する。検出面からの深さは最大でも0.2m程と浅い。④堆積土は黄褐色土と黒褐色土が混ざった土で、土器類とともに焼土や炭化物を含む。明らかに人為的に埋め戻された堆積土である。⑤廃棄坑が複数まとめて分布するが、それぞれ重複する事例は少ない。⑥年代は出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃を中心とする。

4次調査の調査区①では18号周溝墓を壊すように多数分布する。2次調査の87・96・97・110号土坑を加え、170・171A・171B・174・175・178号土坑の合計10基が分布する。これらの周間に掘立柱建物跡が分布しない。2次調査時にも指摘するように、平安時代まで16号周溝墓などの墳丘が残っていたため、墳丘を避けて掘立柱建物を建てたのであろう。なお、18・27号周溝墓の南側は微高地の縁辺部となるため、掘立柱建物跡が分布しない可能性が高い。周辺の遺構分布を勘案すれば、比較的規模が大きい24・29号掘立柱建物跡に伴う廃棄坑であろうか。

調査区②では掘立柱建物跡が密集し、その存続期間も3時期に渡って比較的長期となる。調査区②の南側にも掘立柱建物跡が分布する可能性が高く、そのため廃棄坑と掘立柱建物跡のセット関係を見出すことが困難である。55号掘立柱建物跡の南西隅近くに166号土坑、64号掘立柱建物跡の西側に185号土坑が伴う可能性が高い。

調査区③の65号掘立柱建物跡の西側に193～195・197号土坑が分布する。それぞれ廃棄坑の形や規模は不揃いであるが、65号掘立柱建物跡の西側柱列に沿って分布する。なお、193・197号土坑は重複するが、それぞれ壁面付近のわずかな範囲の重複である。

これまでの調査成果から、廃棄坑が生活ゴミの廃棄を目的とする穴と考えている。集落内の衛生面へ配慮した結果として、生活スペースである建物の南側を避けて、建物の脇や裏手などに設けられたのであろう。また、平面形や規模などに特段の規格性は認められない。当然、廃棄坑の深さに規格がないと仮定するならば、近年の圃場整備で削平されてしまった廃棄坑も多数あった可能性が高い。平安時代の集落の姿として、掘立柱建物の脇や裏手にゴミ穴を設けていたのであろう。単にゴミ穴を多数同時に掘っていたのではなく、ゴミ穴がいっぱいにならば埋め戻し、その近くに新たにゴミ穴を掘ることを繰り返していたのであろう。廃棄坑が重複すると以前に埋めたごみが露出してしまうためか、廃棄坑全体の重複が少ないのであろう。

廃棄坑とした170・171・175・177・183・190・194・197号土坑から出土した遺物を図52に示した。1～6は170号土坑、7～13は171A号土坑、14が175号土坑、15が194号土坑、16が190号土坑。

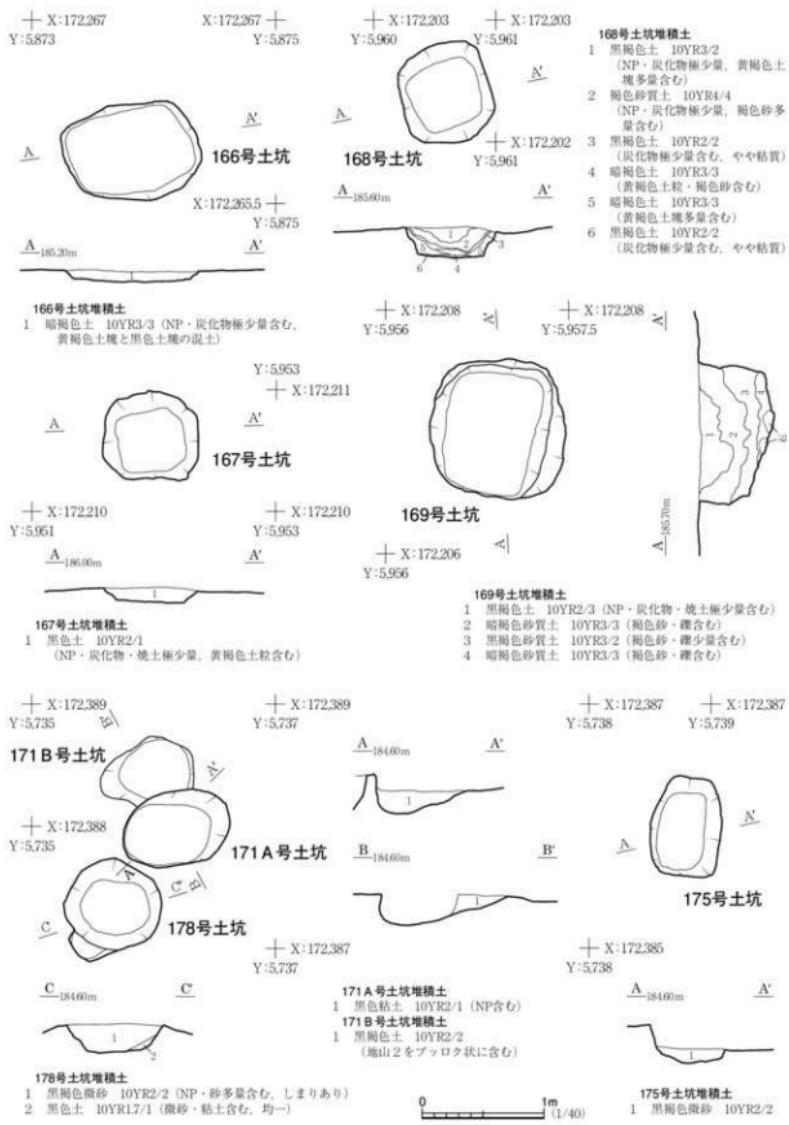


図47 166~169・171A・171B・175・178号土坑

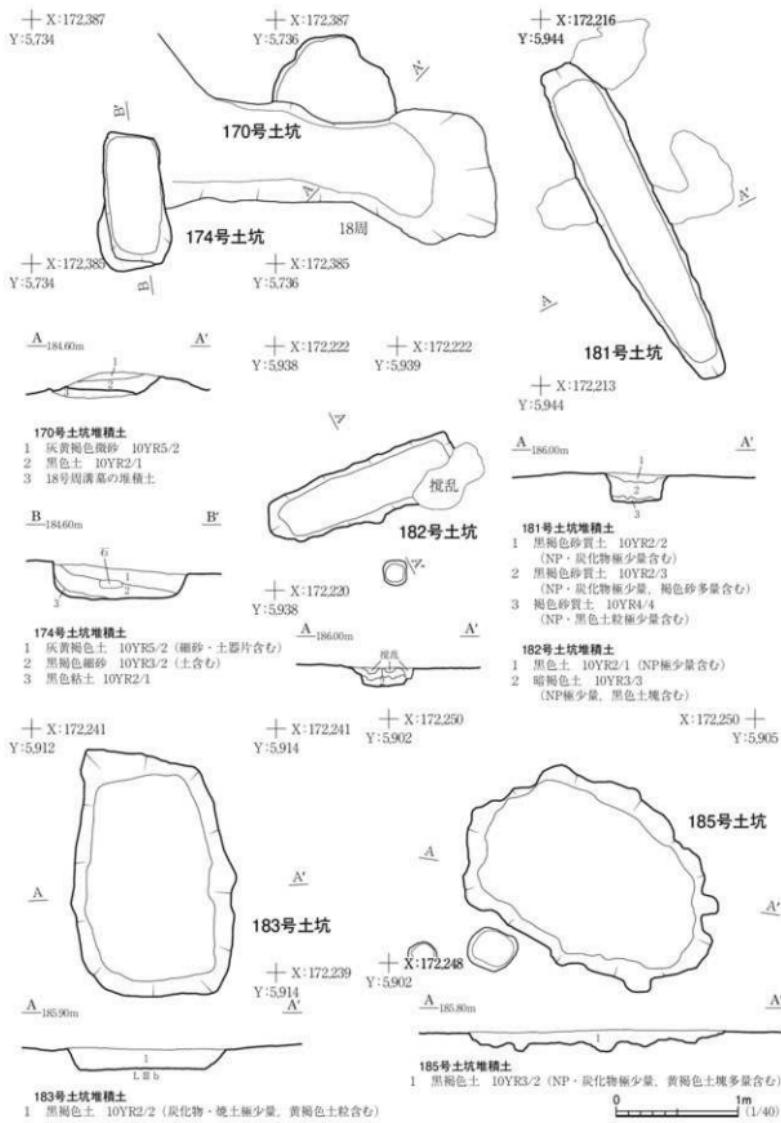


図48 170・174・181~183・185号土坑

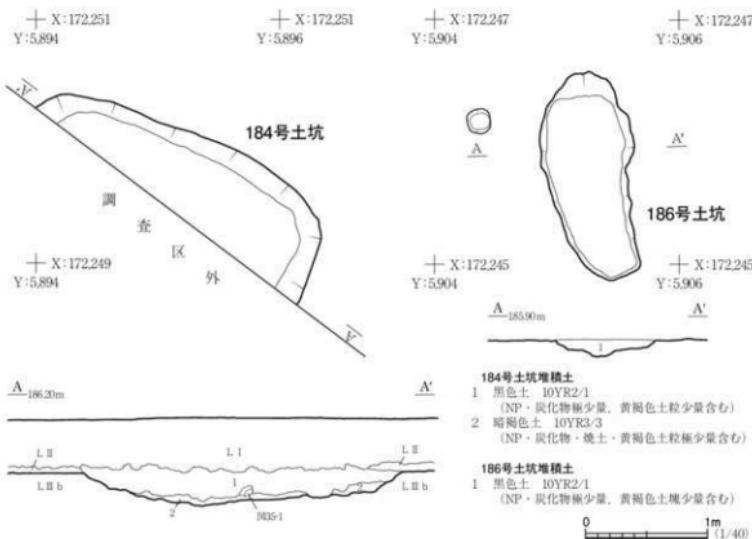


図49 184・186号土坑

17~19が177号土坑、20が197号土坑、21・22が183号土坑の出土遺物である。廃棄坑から出土した土器類は、土師器が壺と甕、須恵器は壺を主体とし、わずかに甕や瓶類の破片がある。

図52-1~3・8~10・14・15・17は土師器壺である。体部はやや丸みを帯びる器形で口縁部がわずかに外反する。17は体部下半に手持ちヘラケズリにより再調整されるが、それ以外は体部下端から底面を回転ヘラキリによって整えられる。黒色処理された内面は摩滅して不鮮明であるが、幅の狭いミガキが密に施される。口縁部から体部は横位ミガキである。底面のミガキは、放射状になるもの、六角形になるものがある。7・11・19~22は土師器甕である。ロクロを用いて整形される。7・11・19は体部下半にタタキ板の痕跡が残る。22は体部下半にケズリが施される。5は土師器の鉢である。内面には横位のミガキが密に施され、黒色処理される。

4・12・13・16・18は須恵器の壺である。底部の径がやや広く、器高が低い特徴がある。12は体部が直線的に立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラキリである。4は底部の小破片で、墨書が認められる。文字の一部であるため判読できない。6は須恵器の甕または瓶類であろうか。外面にはタタキ具の痕跡が残る。内面は体部上半部にロクロの回転を利用したカキメが観察できる。

その他の土坑（図47・51、写真26・27）

169号土坑は調査区②の南東部に位置する。標高185.3mと調査区②の中央部より0.3m低い。検出面での平面形は楕円形となるが、周壁中位から底面の平面形は長方形になる。検出面での規模は長軸の長さが1.15m、短軸の長さが1.1mを測る。検出面から底面までの深さは0.65mで、近年の

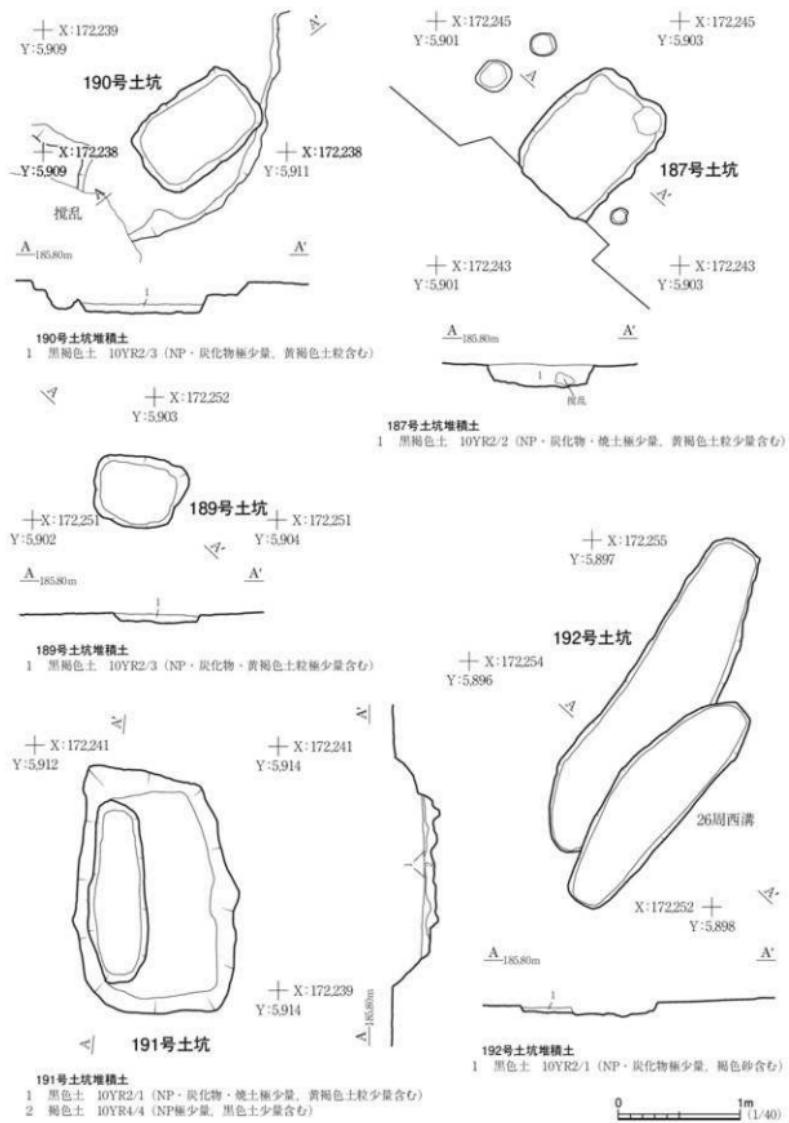


図50 187・189～192号土坑

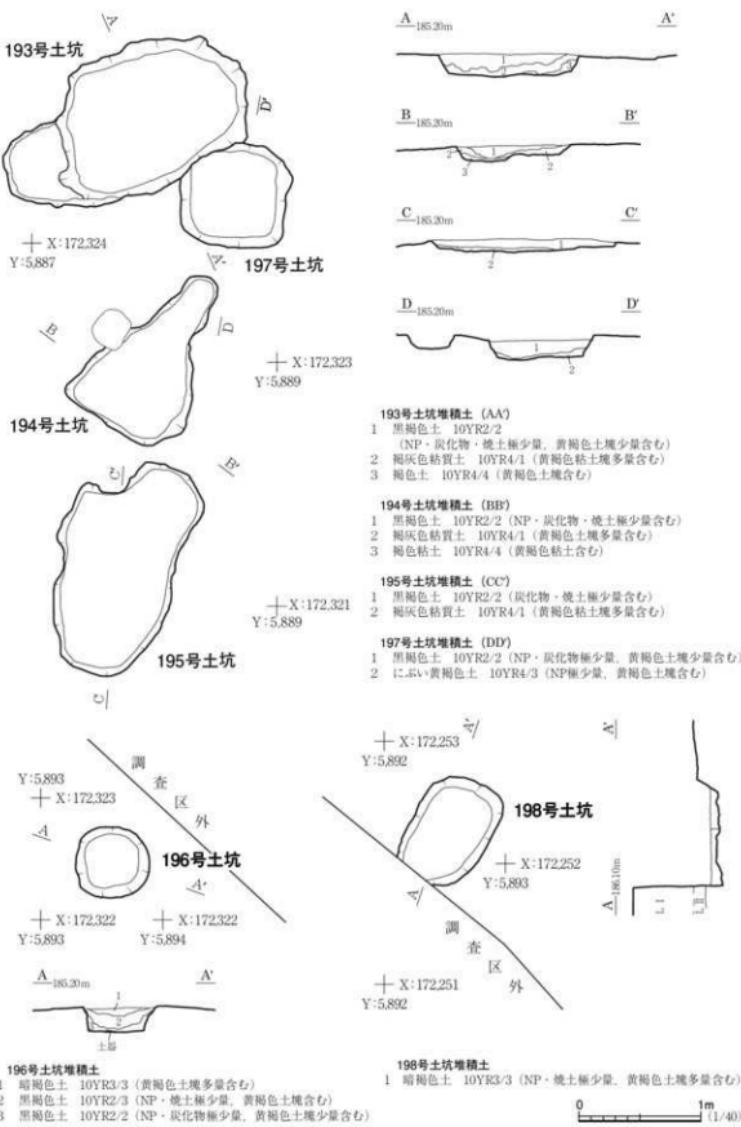


図51 193~198号土坑

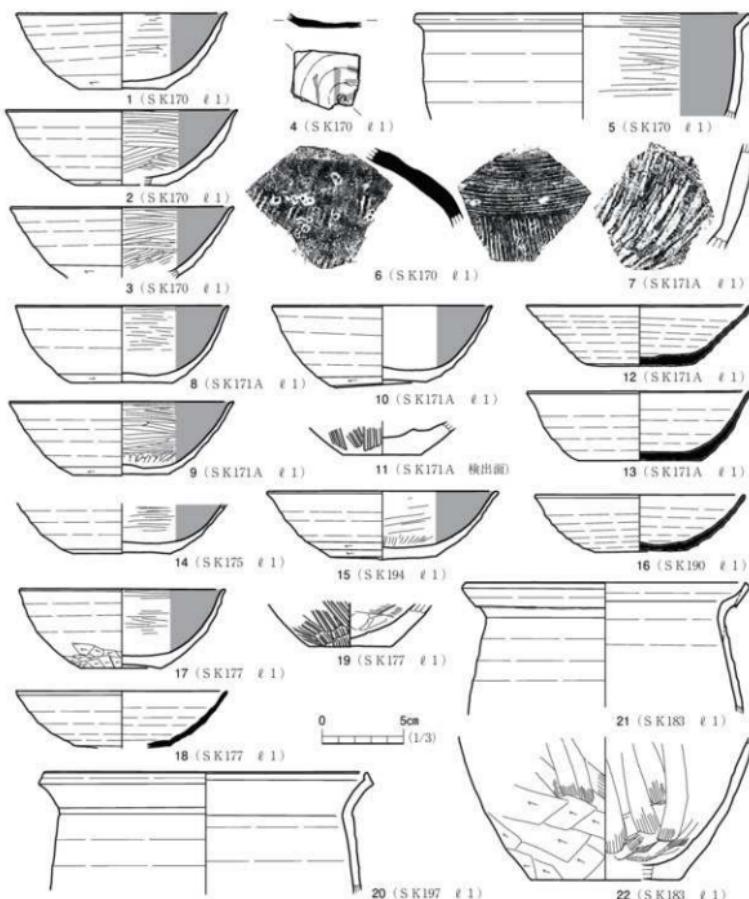


図52 170・171・175・177・183・190・194・197号土坑出土遺物

削平の規模を勘案すれば、本来はかなり深い土坑であろう。遺構内堆積土は黒褐色を基調とする自然流入土である。土坑の底面を覆う最下層には焼けた赤褐色になった人頭大の石が数個混入していた。これらは焼けて割れたものもあるが、人為的な加工は見られない。土坑の廃絶にあたり投げ込まれたものと判断している。遺物は平安時代の土器類がわずかに出土しただけである。

本土坑は削平されて本来の姿が不明であるが、深さが1.5mを超える可能性が高い。1次調査で確認した6号土坑に類似し、素掘りの井戸跡の可能性も指摘できる。

(福田)

第6節 溝跡

4次調査では溝跡を12条確認した。これらの溝跡の多くは、1～3次調査で確認している溝跡である。調査区①では37号溝跡、調査区②では1・10・15・49号溝跡の他に、51・56号溝跡を確認した。調査区③では近現代の水路である15・17・18号溝跡を確認した。調査区④では25号溝跡に統くと推定される、60号溝跡がある。本節では溝跡の性格などが特徴的である、平安時代の溝跡と近現代の水路についてまとめる。

1. 平安時代の溝跡（図12・54・55、写真41）

平安時代と推定される溝跡は、調査区①の37号溝跡、調査区④で確認した60号溝跡である。

37号溝跡 4次調査では37号溝跡の西端部を確認した。2・3次調査の成果とあわせて、ほぼ東西方向に延びる。溝跡の全長は100m以上である。37号溝跡は遺跡が立地する微高地に対して直交して延び、その西端部は地形的に微高地の縁辺となる。37号溝跡は平安時代集落を南北に分ける区画施設とともに、集落内の排水路として機能していたのであろう。

37号溝跡からは弥生土器や平安時代の土器類が出土した。その内形状が把握できたものを図55に示した。1～3は土師器の壺である。いずれも体部下端から底面にかけて回転ヘラケズリで再調整される。内面は摩滅しているが、ミガキが施された後に黒色処理される。4は土師器の高台付壺である。やや高い台が貼り付けられている。5・6は土師器の壺である。5は口縁部が「く」の字に大きく開き、口唇部が上方に摘み上げて整えられている。6は体部下半の破片で、外面には縱方向のケズリで器面調整される。7は須恵器の壺である。体部はわずかに丸味を帯びて口縁部と立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラキリである。8は須恵器の鉢であろう。器高が低く、体部は底部に向かってすぼまる。口縁部は頸部で開き、口唇部が上方に摘み上げられる。9・10は須恵器の長頸瓶である。いずれも口縁部から頸部の破片である。10は頸部と体部の境に、いわゆるリング状突起が巡る。会津若松市大戸窯跡の製品に特徴的に見られる。11・12・14は須恵器壺の体部破片である。いずれも外面には平行タタキ具の痕跡を残す。11の内面はヘラナデ痕、12は無文となるアテ具の痕跡が観察できる。14の内面は、ハケメ状工具を用いて器面調整され、最後にロクロの回転を利用したカキメで器面が仕上げられる。13は須恵器の小破片であるが、体部に円窓が開けられている。外面は平行タタキ具痕が認められ、その上に浅い沈線が観察できる。この沈線は大戸窯跡の壺に見られるいわゆる蝶状沈線であろう。壺形の器形となるのであろうが、用途は不明である。

60号溝跡 調査区④の村道の交差点付近で確認した。周囲は村道や農業用水路の建設、水道管埋設に伴い大きく改変されている。溝跡はわずかに長さ2m程を確認しただけである。2次調査で調査した25号溝跡につながるように延びることから、これら両溝跡が一連の遺構と判断した。25号溝跡は平安時代集落の東側を区画する溝跡と考えている。

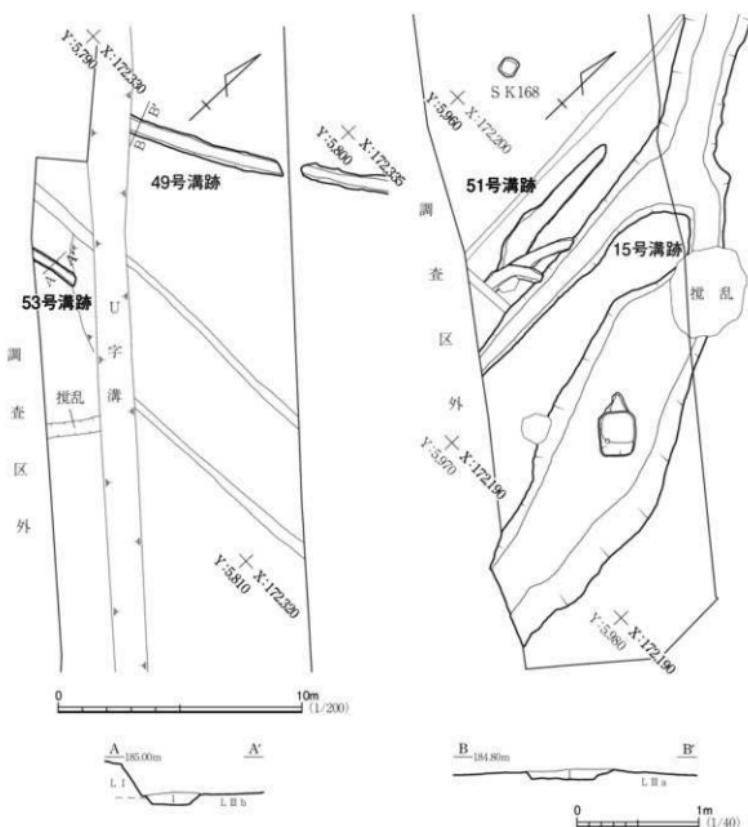


図53 15・49・51・53号溝跡

確認できた60号溝跡は長さが2.1m、幅が0.7mで、深さが5cmと極めて浅い。2次調査の成果とあわせて全長が約140m以上と長い。堆積土は黒褐色土の単層で、自然流入土である。60号溝跡の南端は3次調査でも確認していない。60号溝跡の延長線上で、平安時代の区画溝となる37号溝跡と交差する地点は、37号溝跡の流れが乱れる。明確な遺構の連続は確認できないが、25・60号溝跡と37号溝跡が合流する可能性がある。

37号溝跡は25号溝跡との合流点を超えてさらに東に延びる。調査区③の北部では確認できなかつたが、その方向は65号掘立柱建物跡の北側柱列と平行する。桜町遺跡の南部に広がる平安時代集

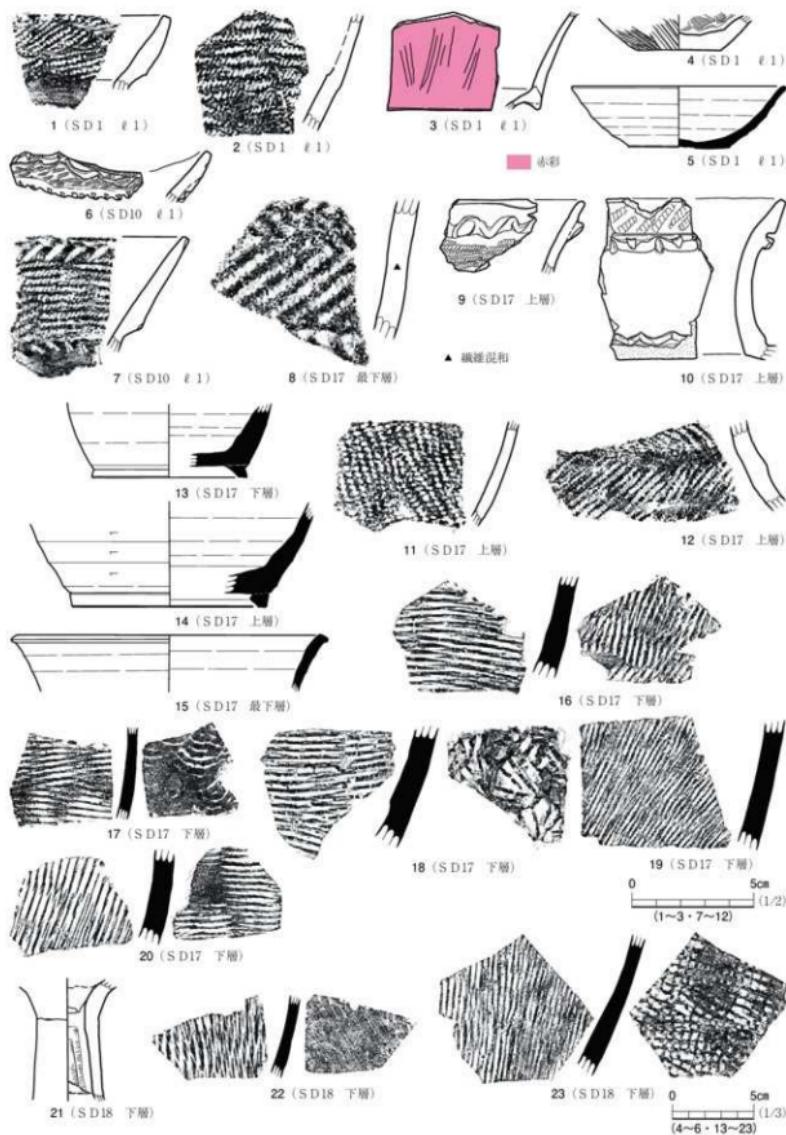


図54 1・10・17・18号溝跡出土遺物

落の北端を区画する溝跡になる可能性が高い。

その他の溝跡 溝跡の多くは、年代や性格を特定できない。重複関係から平安時代の遺構群より新しいが、中世以降の遺物が全く出土していない。また1・10・49号溝跡などは遺跡内を縦横に走ることから、何らかの区画を示しているのであろうが、その性格までは特定できなかった。本項では出土した遺物をまとめる。

図54-1～5は1号溝跡から出土した遺物である。1は弥生土器の広口壺であろう。口縁部下端にわずかに段を持つ。口唇部が面取りされて平滑になる。外面には地文となる撲糸文が施される。3は高壺の破片で、壺身下端に鋭い段を持つ。外面は縦方向のミガキが観察され、ベンガラによつて赤彩される。4は土師器壺の底部破片である。底部は径が小さい平底となる。外面にはタタキ具痕が残り、内面は指ナデで器面が均される。5は須恵器壺である。体部が直線的に立ち上がる器形である。底部の切り離しは回転ヘラキリである。

6・7は10号溝跡から出土した弥生土器である。6は波状口縁となる壺である。肥厚した口縁部下端に交叉刺突が認められる。口縁部は地文の撲糸文を施し、二本同時施文具を用いた波状文がめぐる。7は長頸壺であろうか。口唇部には棒状工具を斜め押し当てたキザミが充填される。口縁部幅が広く、肥厚した口縁部下端に指頭によるキザミが巡る。地文として撲糸文が施される。

2. 近現代の水路（図53・54、写真28）

今回の調査では1次調査から連続する近現代の水路である15・17・18号溝跡を確認した。昭和40年代の圃場整備の際に埋められた溝跡である。明治時代の条量図に一致することから、現在の会津若松市木流地区で潤川をせき止めて、湯川村八日町地区に農業用水を引いた水路と判断した。

15号溝跡は調査区③のF 8-C 2グリッドで西側に曲がり、1次調査で搅乱とした溝に続く。遺跡内で確認できた溝跡の規模は約160mとなる。用水を西側に分岐する水路であろう。南側では調査区①のF 9-H 1グリッドで分岐し、東側に分岐する溝が幅広く、深くなる。溝跡が大きく曲がる部分には木杭が打ち込まれている。

17・18号溝跡はそれぞれ平行して北西方向に延びる。堆積土の観察から、圃場整備の際に一気に埋め戻されている。4次調査で確認した17号溝跡の長さは30m、幅は7.5mである。18号溝跡の長さは24m、溝幅は4mである。溝跡底面の標高は、17号溝跡が184.4m、18号溝跡が184.8mであり、17号溝跡が約0.4m深い。いずれの溝跡も底面はL IVとした砂礫層に達している。17号溝跡はF 8-D 3グリッド地点で南岸が大きく張り出し、部分的に木杭が打ち込まれていた。水路の流れが変わるとともに、壁面が大きく崩落して土止めを行い護岸の痕跡であろう。また、18号溝跡はF 8-E 4グリッド周辺に木杭が認められる。壁面の崩落を修復した痕跡と判断した。

17・18号溝跡からは近現代の遺物の他に縄文土器・弥生土器や平安時代の土器類も出土した。圃場整備に伴う埋土に混入するものが大半を占める。一方、図54-13～20などは17号溝跡の底面付近から出土した須恵器である。水路が機能していた時期に周辺から流れ込んだ遺物であろう。

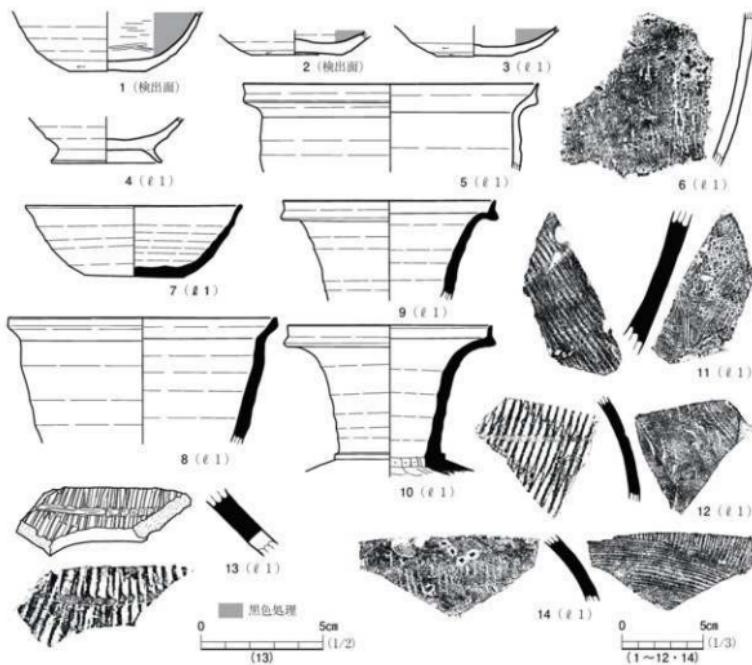


図55 37号溝跡出土遺物

図54-8は縄文土器である。やや粗い砂が多量に混入する胎土で、繊維混和痕が観察される。深鉢の頸部破片には羽状繩文が施される。縄文時代前期初頭頃の花積下層式に相当する。湯川村をはじめとする会津盆地内では極めて類例の少ない資料である。9~12は弥生土器の壺である。9は口縁部直下に粘土紐を貼り付け、その部分に下端に指頭によるキザミを施す。10は口縁部下端に横位沈線を巡らせて、肥厚した部分に交互刺突を施して立体的な波状隆線を作り出している。頸部は無文となり、体部との境に太い沈線による波状文で無文帯を区画する。11・12は体部破片で、地文として撚糸文が施される。弥生土器の特徴から桜町I式期に相当する。

13・14は須恵器瓶類の底部破片である。爪先立ちとなる高台を貼り付けている。15は壺の口縁部破片である。口唇部が面取りされて平滑になる。16~20は須恵器壺の体部破片である。外面は平行タタキ具痕が観察できる。内面のアテ具痕には数種が確認できる。16・20は外面と同じ平行アテ具痕、17は同心円文のアテ具痕、18は松葉状のアテ具痕である。

図54-21は弥生土器の高坏である。脚部に粘土塊を充填して坏身を接合する。22・23は須恵器壺の破片である。22は内面にナデの痕跡を残す。23は格子目文のアテ具痕が観察できる。(福田)

第7節 その他の遺構と遺物

1. 小柱穴 (図56、写真43)

本項では、明確な掘立柱建物跡を構成しない、不規則に分布する柱穴を総称してまとめる。柱穴の名称は、柱穴をPとし、グリッド(G)ごとに番号を付した。例えばF8-A1GP1と称する。

柱穴群は調査区②で確認できた。1次調査の成果とあわせて、近年の削平が少なく、弥生時代と平安時代の遺構が密集する地点で確認した。特に29号周溝墓から28号周溝墓の周辺、E8-J5・J6、F8-A5・A6で多数確認した。これら小柱穴の特徴をまとめると、平面形が方形で、一辺の長さが50~60cmと大きく、平安時代の7号掘立柱建物跡などの柱穴と比べて遜色ないもの。平面形が円形を基調とし、その直径が20cm前後と小さいものがある。

これら柱穴の年代を特定するだけの遺物がなく、詳細は不明の柱穴が多い。柱穴の重複を整理すれば、弥生時代の周溝墓より古い柱穴はないが、平安時代の9号竪穴状遺構、64号掘立柱建物跡などより新しいものが認められる。柱穴の多くは平安時代を中心とする時期であろう。一方弥生時代の遺構には、周溝の内部に掘立柱建物跡が配される6・12号周溝状遺構の存在も知られている。これら小柱穴の一部は弥生時代に属するものも含まれる可能性があるが明確でない。

小柱穴から出土した遺物は図56に示した。1は壺の口縁部破片である。口縁部下端が肥厚し、その部分に指頭によるキザミが巡る。口唇部にはヘラ状工具の側縁を斜めに押し当てたキザミが充填される。口縁部と頸部には太い沈線による横位の波状文が巡る。地文はやや粗い撲糸文が施される。2・3は高坏の脚部破片である。2は脚の下端に段を持ち、その段の部分に交互刺突が観察される。脚下半には小さい円孔が4箇所開けられている。北陸系高坏の器形そのままに、在地の交互刺突が施された珍しい高坏である。3は外面にミガキが施される。脚下半に小さい円孔が配される。4は壺の底部破片である。底部の直径が広く、外面には撲糸文が施される。5は北陸形土器で、底部の径が小さい壺であろう。内外面ともに指ナデが観察できる。6はアメリカ式石錐である。石材は珪質頁岩である。

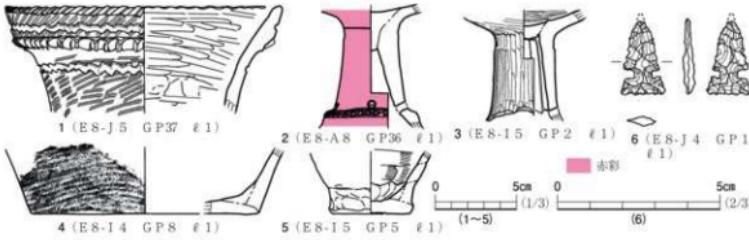


図56 小柱穴出土遺物

2. 遺構外出土遺物（図57～59、写真41・43）

4次調査では遺構外出土遺物として、弥生土器や石器、平安時代の土器類がコンテナ箱で約5箱出土した。その内形状が把握できたものを図57～59に示した。遺構外出土遺物の分布は、遺物を包含するLIIが遺存していた調査区②中央部から出土したものが大半を占める。

弥生土器 図58-1を除き、そのほとんどは弥生時代後期後半頃の桜町I式に相当する土器である。図57-24、図58-2など在地土器と外来系土器の特徴が混ざったものもあり、在地化した土器も見られる。なお、弥生土器の胎土はすべて桜町遺跡周辺の粘土を用いて作られている。他地域からの明らかな搬入品は確認できない。

図57-1～14は、太い一本引きの沈線で文様を描き、交互刺突による波状隆線文を施す土器である。2は交互刺突が乱れた事例である。下方からの刺突を巡らせた後に、上方からの刺突を充填したために、最初の下からの刺突が全て潰れている。4は口縁部が波状となる。口唇部直下には、2つの刺突が一組となる交互刺突が巡る。頭部には横位沈線を2本巡らし、その間に交互刺突を施して、立体的な波状隆線を作り出している。5・6は横線で区画された口縁部の文様帶内部に、面違いに弧文が配される。12は体部破片で、ボタン状に粘土粒が貼り付けられ、その部分に円形竹管を器面對して垂直に押し当てて刺突している。13は二本同時施文具を用いて文様が描かれる。口縁部文様帶には弧文が面違いに配される。

15～24は肥厚した口縁部下端に指頭によるキザミが施される土器である。口縁部の形状とあわせて文様構成のバリエーションは多彩である。15は口縁部直下に粘土紐を巡らし、その上部にキザミを施す。16・17・19は折り返し口縁となる壺で、肥厚する口縁部下端にキザミが施される。19は口唇部直下には竹管を用いた上方からの刺突が充填される。頭部は無文となり、体部には撲糸文が施される。18・20・21・24は口縁部下端に段を持ち、肥厚した段の部分にキザミを施す。20は無文であるが、18・21は撲糸文が施される。24は口縁部にいわゆる擬凹線が巡る。頭部の文様はクシ書き波状文であろう。在地土器と外来系土器の特徴が混ざった土器である。25・27・28は口縁部に装飾が施されない壺である。28は口縁部の幅が広い。外面は地文となる撲糸文が施され、内面はハケメが残る。26は全体的な器形は不明であるが、口縁部が大きく開く。口縁部下端に2個一組の粘土粒が垂下するように貼り付けられる。口縁部が垂直に立ち上がり、撲糸文が施される。口唇部の内面には浅い沈線が巡る。桜町遺跡では類例に乏しい土器であり、南関東地域の弥生土器に類似する特徴であろうか。29は壺の体部破片である。4本歯のクシ歯状施文具を用いて、文様帶を区画する下向きの連弧文が描かれる。2次調査で出土した1号土器棺墓の資料（『会津10』図31-2）と類似する。30～33は壺または甕の底部資料である。30はわずかにハケメが観察できる。32・33は外面に地文となる撲糸文が施される。

図58-2～10はクシ歯状施文具を用いて文様が描かれた壺である。2は口縁部直下に粘土紐を貼り付け、その部分に指頭によるキザミを施す。頭部の文様はクシ書きで縦に区画して、その内部

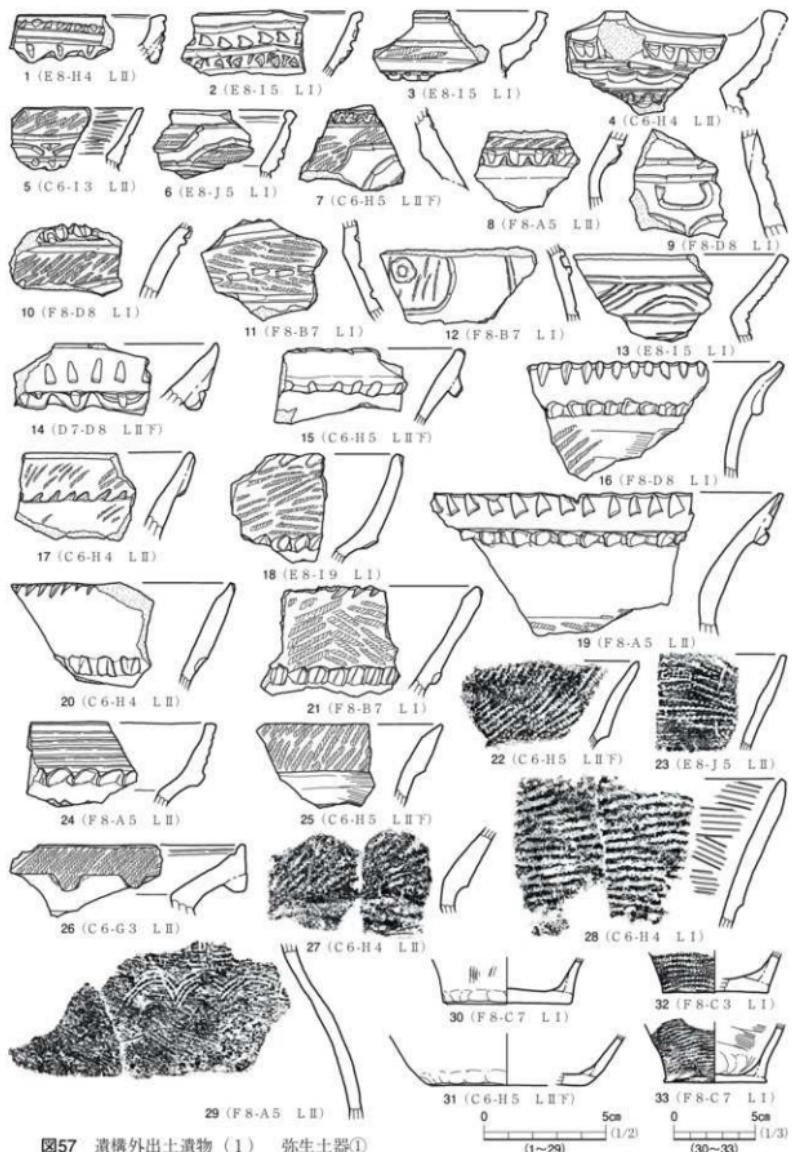
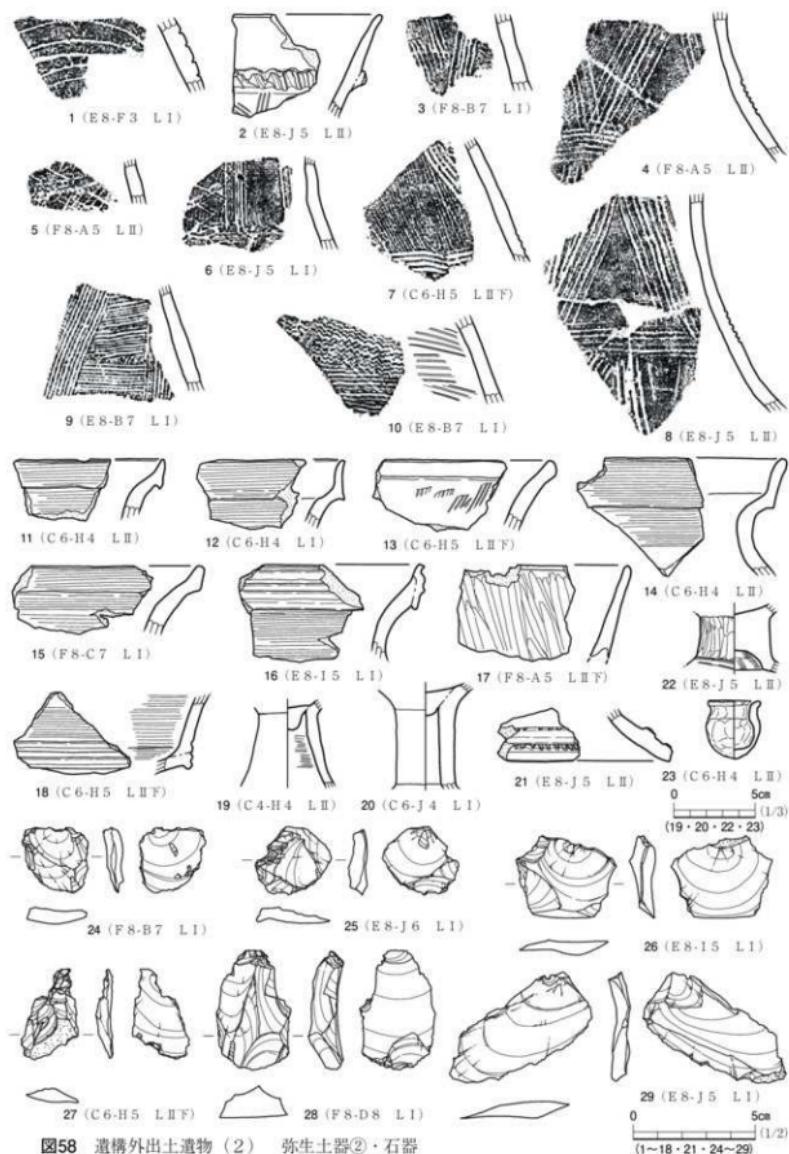


図57 遺構外出土遺物（1） 弥生土器①



に山形文が充填されるのである。3・4・7・8は頸部文様帶を鋸歯文で区画する。4・8は文様帶が2段になる。5は格子文が描かれる。6は頸部文様帶を縦区画して無文部を配し、区画内は格子文が充填される。10は波状文と廉状文が描かれる。

図58-11～22は北陸系土器をまとめた。11～16は壺または甕の口縁部破片である。11・12は口縁部幅が短く、口縁部下端が下に垂下する。14は口縁部の幅が広く、内外面ともに段を持つ。16は口縁部の幅が広く、いわゆる擬凹線が巡る。これらの破片は内外面ともにヨコナデで仕上げられるものが多い。17は壺の口縁部であろう。直立気味に外傾する口縁部の破片で、縦方向のミガキが密に施される。18～22は高坏である。18は坏身下端に浅い沈線が3条巡る。19は「ハ」の字に聞く脚である。20～22は直立する脚の下端に段を持ち、裾部が広がる。21は裾部に浅い沈線が巡り、沈線間にキザミが充填される。23は甕を模したミニチュア土器であろう。器面には指圧痕が観察できる。

図58-1は壺の体部破片である。半裁竹管状の二本同時施文具を用いて円文が描かれる。文様の彫りは浅く、その断面はV字形となる。文様などの特徴から弥生時代中期に属する。桜町遺跡では弥生時代中期に属する土器片は数点確認されているだけである。

石 器 桜町遺跡では石器は極めて少なく、これまでの調査で出土した石器を合計しても50点ほどである。石器のほとんどは小さな剝片で、石錐を除けば定形的な製品は極めて少ない。24～27・29は剝片である。いずれも珪質頁岩である。28は二次加工のある剝片であろう。打点を打ち欠いており、側縁に細かい剝離を加えている。

須恵器 図59-1～3は坏で、いずれも底部の切り離しは回転ヘラキリである。1は器高が低く、体部が湾曲して立ち上がる器形となる。2は体部が直線的に立ち上がる器形である。3は底部の径が広く、体部が直線的に立ち上がる。4は小型の甕である。丸い体部から頸部で屈曲し、口縁部が直立気味に立ち上がる器形となる。5は甕の頸部から体部上半部の破片である。体部外面には平行タタキ具痕が残り、頸部はロクロナデで整えられる。6は小型の瓶類であろう。頸部に向かって丸みを帯びてすぼまる。底面には小さい高台が貼り付けられる。その断面は三角形となる。内面はロクロメが顕著で、底面には粘土が高く遺存している。7は長頸瓶の底部破片であろう。体部下半はロクロの回転を利用してケズリによって整えられ、底面に高台が貼り付けられる。

土師器 59図-8・9は坏である。丸みを帯びた体部から口縁部が小さく外反する器形となる。いずれも体部下半から底面は回転ヘラケズリで再調整される。内面はミガキの後に黒色処理される。8は口縁部から体部は横方向のミガキが密に施されるが、見込部のミガキは放射状になる。10は内外面ともに黒色処理された高台付坏である。器形はやや丸みを帯びた体部で、口縁部がわずかに外反して開く。高台は底部に貼り付けられ、ロクロの回転を利用してナデによって整えられる。高台はわずかに爪先立ちとなるが、その断面形は四角形である。内外面ともに器面がミガキで仕上げられる。外面は内面に比べやや粗い横方向のミガキで、ロクロメの凹凸が遺存する。内面は体部下半まで横方向のミガキが密に施され、見込は六角形になるミガキが施される。11・12は甕の口縁部破片である。器形はやや内傾して立ち上がる体部から口縁部が屈曲して開く。口唇部は直立す

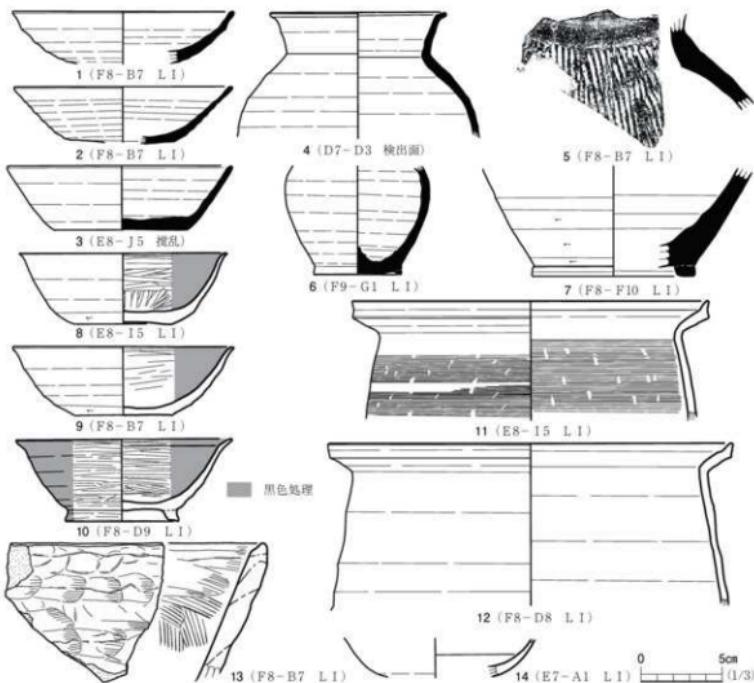


図59 遺構外出土遺物（3） 土師器・須恵器・青磁

るようすに摘み上げられている。11は体部の整形にロクロの回転を利用したカキメが施される。

13は口縁部の破片で全体的な器形は不明であるが、大型の鉢であろう。外面は粘土紐の積み上げ痕が残り、指頭痕や指ナデなどや粗い調整である。内面はハケメで器面を均し、口縁部付近は横方向の指ナデで整えられる。内面に炭化物は付着していない。胎土は他の土師器に比べて砂が多く含まれる。近年実施された会津地域における発掘調査の出土例では、喜多方市小田高原遺跡〔阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告書1〕（2011年）で類例が散見できる。さらに新潟県山三賀遺跡でも出土例が知られている。それらの類例によると、口縁部の径が50cm、器高が30cm以上とかなり大型の鉢で、器面の調整痕は内外面とも縱方向のハケメが顕著である。また使用痕跡として、外面に薄く粘土が塗布され、内面には炭化物が厚く付着している。具体的な用途は不明であるが、火にかけて用いられている。

青磁器 図59-14は、4次調査で出土した唯一の青磁器片である。やや丸みを帯びる体部となる椀であろう。内外面ともやや青みがかった緑色の釉薬が観察され、内面の見込付近に陰刻の線がめぐる。胎土は灰色である。詳細な年代は不明であるが、中世後半頃の所産であろう。（福田）

第3章　ま　と　め

桜町遺跡における弥生時代の遺構群については、今回の4次調査によって、その全容を把握することができた。これまでの調査成果は、「会津綾賀北道路遺跡発掘調査報告5・10・11」で収録し、会津地域を中心として弥生時代後期後半から古墳時代受容期にかけての土器や周溝墓の変遷や在地社会の変化に着目した考察を加えた（福田・福島2005・2011年）。

本章では4次調査の成果をまとめるとともに、弥生時代の桜町遺跡について総括する。

第1節　4次調査の成果

本節では、今回の4次調査によって得られた資料を追加し、これまでの調査成果を補うこととする。次に桜町式土器に特徴的に見られる在地土器と外来系土器の特徴が折衷する土器（本項ではキメラ土器と呼称）の様相をまとめめる。また資料が出揃ったB群土器の文様的な特徴もまとめ、北関東地域との広域交流のモデルを検討する。

1. 4次調査の成果

4次調査で確認した弥生時代の遺構は、5・18・19・25～29号周溝墓と164・165号土坑などである。周溝墓は桜町Ⅰ式期の周溝四隅が途切れる方形周溝墓（5・26・28・29号周溝墓）、16号周溝墓の西側を取り囲むように分布する桜町Ⅲ式期の小型円形周溝墓（18・19・25・27号周溝墓）を確認した。

周溝墓の特徴について

5・26・28・29号周溝墓は、周溝の四隅が途切れる方形周溝墓である。出土遺物の特徴から桜町Ⅰ式期に相当する。四隅切れ周溝墓は、これまでに13基確認した。周溝墓の規模から、5・9号周溝墓が一辺12mを超える大型方形周溝墓となるが、それ以外は、一辺の長さが3～6mと小型方形周溝墓となる。また墳丘の平面形は、東西方向が長い長方形になる特徴が見られる。なお9号周溝墓は正方形となる唯一の周溝墓である。四隅部の形状については、9号周溝墓の復元案から四隅部がスロープ状になり、いわゆる四隅突出形となる。小型となる2・3・26・29号周溝墓についても、周溝端部が墳丘から外に向かって台形状に聞くように直線的に整っている。9号周溝墓と同様に、小型周溝墓でも四隅部はスロープで、墳丘の平面形は四隅突出形となると考えている。

周溝墓の分布と主軸方向から、大きく4つのグループが看取できる。5号周溝墓と主軸方向を描える4号周溝墓との一群（グループA）。1号周溝墓と主軸方向が描う、2・3・5・7・8・28号周溝墓の一群（グループB）。26号周溝墓と主軸方向が描う29号周溝墓との一群（グループC）。

遺跡北側に分布する9・14号周溝墓（グループD）に分けられる。

桜町I式期の四隅切れ周溝墓は、規模に大小が認められる以外に、周溝墓の構造や出土遺物の内容などに違いを見出すことができない。グループDは桜町II～III式期へと継続することが確認できたが、桜町遺跡南部では、四隅切れ方形周溝墓で造墓行為が停止している。集落内の生活スペースが北部に移動し、グループDが集落の中心となったのであろう。

桜町III式期の周溝墓は、18・19・20・23・25・27号周溝墓の6基が確認できた。いずれも小型で円形を基調とする周溝墓である。大型で前方後方形となる16号周溝墓（桜町II式期）の西側から南側を二重に取り囲むように配されることから、16号周溝墓→18～20号周溝墓→23・25・27号周溝墓の構築順を想定している。

桜町III式期の周溝墓は、墳丘の平面形と周溝の特徴から3つに大別できる。20号周溝墓に代表される周溝が途切れる部分が外側に張り出し、前方後円形になるもの。墳丘の土橋部で途切れる周溝が外側に張り出す特徴は、桜町II式期の10・15・16号周溝墓にも見られる。さらに、これらの周溝墓は、墳丘形が主軸方向に長い長方形で、墳丘の形状は前方後方形になる。次に18・19号周溝墓は、墳丘の平面形が隅丸方形になり、四隅に明確な稜がない。墳丘上端までを復元すれば、円形に近い墳丘となる可能性が高い。23・25・27号周溝墓が最も外側に配された周溝墓である。周溝全体を確認できた23号周溝墓からすれば、周溝の幅がほぼ一定で、円形に巡る。

桜町III式期周溝墓の特徴をまとめると、墳丘の平面形が前方後方形（16号周溝墓）から隅丸方形（18・19号周溝墓）へ変化し、最終的には円形（23・25・27号周溝墓）となる。さらに土橋部で途切れる周溝が外に張り出す（20号周溝墓）が、徐々に張り出しが消失する（23・27号周溝墓）と理解でき、いわゆる前方後円墳の出現過程における周溝の形状変化とは異なる。

26号周溝墓の出土土器（図14-1）について（図62）

桜町遺跡2次調査で提示した桜町式土器の分類を基準とする。4次調査では、桜町I式期の四隅切れ周溝墓から比較的良好な資料が得られた。桜町I式土器については、基本的には先の分類から大きく逸脱する資料はないが、26号周溝墓西溝から出土した二重口縁壺（図14-1）と十王台式に酷似した土器（図15-3）が供伴して出土した点が特筆される。

二重口縁壺の出土状況は、西溝中央の底面より2～3cm浮いた位置から横倒して潰れた状態で確認できる。周溝内の堆積土からは、周溝底面を薄く覆う程度の流入土であり、周溝墓の完成から土器型式を違えるほどの時間経過は想定できない。西溝内に埋設遺構の存在も認められないことから、26号周溝墓と時期を越えて混入したとは考えにくい。また図15-3は二重口縁壺の周囲から細片となった状態で出土し、二重口縁壺との時期差を示す出土状況は見られない。

図14-1は球形になる体部に対して頸部から口縁部までが長いプロポーションとなる。頸部は外反して開き気味に立ち上がり、幅広となる口縁部幅が外反して開く。体部の器形は、中程に最大径を持つ球形で、頸部との境が明瞭でない。体部下半は径の小さい底部に向かってすぼまる。底部は焼成後に打ち抜かれたためか遺存しない。

会津地域の二重口縁壺は、喜多方市内屋敷遺跡6号周溝墓、会津坂下町稻荷塚遺跡の第15号堅穴住居跡と第5号周溝墓の資料がある。内屋敷遺跡の二重口縁壺は、体部器形が球形となる点は共通するが、底部に向かって細くすぼまることがない。口縁部と頸部は開き気味に外反する。体部と頸部の境がより明瞭で、口縁部から頸部までが低くなる。口唇部直下と口縁部下端に円形竹管の刺突がめぐる。稻荷塚遺跡の二重口縁壺はいずれも小型壺で、体部の器形がほぼ球形となる。頸部が直立気味で長さも短く、口縁部は大きく外反して聞く特徴がある。その他に男塙遺跡第2号周溝墓の二重口縁壺は体部の器形が球形になる。体部と頸部の境は明瞭で、体部に対して頸部の径が細い。頸部は短く外傾して聞く。口縁部は内外面に明瞭な段をもち、受け口状に外反して聞く。

会津地域の類例は、いずれも体部に対して頸部から口縁部までの長さが狭くなる。体部が小さい底部に向かってすぼまることなく、ほぼ球形となる特徴が見出されよう。また二重口縁壺と併伴する出土遺物には桜町I式期の遺物がない。年代は桜町II式以降、古墳受容期後半から古墳時代前期に相当する時期であろう。桜町遺跡の二重口縁壺より後出的な要素を持つものと理解している。

次に北陸地域及び近畿地域に類例を求めるとき、石川県宿東山遺跡と同県漆町遺跡、大阪府久宝寺南遺跡を示した。久宝寺南遺跡の二重口縁壺は、頸部の径が太く頸部が長く外反して立ち上がる。口縁部は頸部端部に繼ぎ足のように作られる。口縁部幅が長く外反して聞く。体部の器形はほぼ球形になる。桜町遺跡の資料と比較すれば、頸部が長く外反する器形は類似する特徴が見られる。久宝寺南遺跡壺の年代については、第V様式後半から庄内式最古段階に位置付けられている。漆町遺跡の二重口縁壺は大型壺に分類される。資料的には少ない器種であるらしい。口縁部が直立気味に外傾して立ち上がる特徴がある。頸部は太く外反して立ち上がる。漆町9群に相当する資料である。桜町遺跡の事例では27号周溝墓の図16-7と類似する。一方、宿東山遺跡の二重口縁壺は、頸部から口縁部までの長さは短い。体部が球形で、小さい底部に向かってすぼまる。口縁部の幅が広く、直線的に外傾して聞く。併伴する資料の検討から「月影式」に位置付けられよう。

会津地域の二重口縁壺は、古墳受容期後半頃になると頗著に見られ、様々な器形的バリエーションを持っている。北陸地域の編年案を概観すると、二重口縁壺は月影式には確実に見られるが、出土例が極めて少ない。会津地域において月影式に適する二重口縁壺の資料は知られていない。桜町遺跡の出土資料が最古段階の二重口縁壺に位置付けられる可能性がある。ただ、土器のミクロ的要素のみの検討であることは確かであり、桜町式土器との併行関係を検討できる資料の増加に注視したい。なお本稿では、久宝寺南遺跡の事例に年代的な併行関係を求めたわけがないが、畿内第V様式後半から庄内式最古段階に祖型を持つとされる二重口縁壺に類似することは極めて興味深い。本県を含む東北地域南部の弥生時代後期の土器編年を考える上で象徴的な遺物になる可能性がある。この点については、改めて別稿を用意したい。

164・165号土坑

164・165号土坑の構造は、第2章述べたとおり、掘形底面に木材を井桁状に組み、井桁の中央が開いた状態である。両土坑の機能について、大型柱穴または井戸跡とする両説を併記した。こ

これら遺構の類例として、桜町遺跡93号土坑、石川県猫橋遺跡13・38号土坑と比較する。

桜町遺跡93号土坑は、『会津10』において、丸太材を割り貫いて井戸枠とするとした。調査時に井戸枠の半分を先に掘り上げてしまい、残りの半分は腐食が進んで取り上げ時にはバラバラの状態であった。しかし井戸枠の保存処理を行い、接合する段階になって側縁部のある破片を見ついた。そのため本項では『会津10』の内容を改定し、継割りにされた割り貫き材を組み合わせて円筒形の井戸枠としていたと結論付ける。93号土坑の構造は円筒形となる井戸枠の外側に削材を用いて井桁状に組まれている。井戸枠が削材の上に乗っていないことから、報告では井戸枠の固定材とした。井戸枠の内径は45cmと狭い。

猫橋遺跡13号土坑は、割り貫き胴の破損品を組み合わせ、円筒形の井戸側をしている。井戸側の内径は50cm程である。井戸側の下に長さ90cm、幅30cm程の板材を井桁状に3段組まれている。この井桁に組まれた板材については、報告によれば井戸構築時の足場や井戸側の沈下防止の機能を推定している。なお、井戸の構築材には船の部材が転用されている。猫橋遺跡38号土坑は、長さ70cm以上、幅40cm程の板材を4枚方形に組み合わせて井戸側とする。井戸側の内寸は一辺が約30cmである。井戸底からやや上部の位置で、井戸側を取り囲むように板材が重ねて敷き詰められている。報告によれば、板材に井戸側が乗っていないことから、井戸の構築時に足場としてしかれた板と推定している。この板材は壁材の転用とされる。

これら弥生時代の井戸跡に共通する特徴として以下の点が挙げられよう。
①井戸側をもつ。井戸枠が割り貫き材を組み合わせて円筒形になるもの、4枚の板材を四角く組み合わせるものがある。
②井戸側の内径が30～50cmと井戸掘形に比べて小さい。
③井戸側の周間に木材を井桁に組んで敷き詰めている。この木組みは井戸掘形の下部にのみに確認でき、深さを変えて複数の木組みは設置されない。
④木組み自体は数段重ねた程度で、10cm前後の厚さにしか組まれない。
⑤井戸底は掘形周壁に段を設けて、一回り小さくなるように深く掘り込まれている。

上記する井戸の特徴と桜町遺跡93・164・165号土坑と比較すれば、93号土坑は①～⑤すべてに共通する特徴をもつ。猫橋遺跡13号土坑と同様に、井戸枠が割り貫き材を組み合わせた円筒形をなす。木組みに削材を用いているが、井戸枠が木組みの上に乗らない点は猫橋遺跡38号土坑に共通する。一方、164・165号土坑は、①の井戸枠を欠くが、②～⑤の特徴とは共通する。164号土坑の木組みには丸太材に混ざって、細長く剥ぎ取った樹皮も含まれていた。猫橋遺跡の報告で指摘するように、木組みは構築時の足場にも用いられていたのであろう。

164・165号土坑の性格としては、井戸枠を確認できないが、木組み構造は弥生時代の井戸跡である93号土坑などに類似することから、ここでは井戸の可能性が高いと評価できよう。柱穴については、桜町遺跡94・96号土坑から梯子や建物部材が出土し、大型となる高床建物の存在が推定される。しかし、桜町遺跡で確認した弥生時代の掘立柱建物跡は小規模で、木材を利用して根固めする柱穴は確認できない。当然165・164号土坑を柱穴とする積極的根拠も得ていない。井戸跡や柱穴いずれにせよ、今後の調査による類例の増加に注視したい。

2. 桜町式土器におけるキメラ土器（図60）

桜町I式土器には、在地土器（A群土器）に北関東地域（B群土器）と北陸地域（C群土器）とする外來系土器の特徴が折衷するキメラ土器が散見できる。本項では製作技法・器形・文様の特徴に着目して、桜町I式土器におけるキメラ化の様相を確認する。資料の呼称は、報告書名－図番号－枝番号と連記し、例えば『会津綏貢北道路遺跡発掘調査5』図9-1は、5-9-1とした。

製作技法 器面の調整に用いられるハケメが顕著になることが挙げられる。土器製作時にスギ板のような道具で土器の器面を平らに均した痕跡がハケメと称する。このハケメはC群土器の製作技法である。桜町遺跡の資料ではC群土器以外に、A群やB群土器にもハケメが観察される。10-12-5は外面の地文より前の段階にハケメで器面調整される。10-12-6は内面の器面調整にハケメを残す。5-71-1はB群土器で、クシ描文を描く前の段階にハケメが観察できる。桜町遺跡の事例から、ハケメは文様や地文を施す前の段階に施された器面調整の一つで、その用いられ方は北陸地域の土器製作技法と同じである。

次に土器が薄く作られる傾向が見られる。器面の観察から胎土内に含まれる砂粒が動いていることから、ナデと区別した。本書の実測図ではケズリのように表現し、カキトリと呼称した。土器の内面を削り取り薄く仕上げる方法で、特にC群土器に見られる。壺または甕の体部では粘土積み上げ痕の部位、体部と頸部の接合部位などに顕著に残り、12-14-1が好例となる。A群土器でも同様で、10-115-4にカキトリ痕が見られ、北陸系土器の製作技法が用いられている。

桜町遺跡より古い能登遺跡の資料には、ハケメやカキトリとする調整痕が観察できない。北陸系土器が会津地域で受容されたこととあわせて、土器の製作技術も受容したことを示している。

器 形 器形全体が分かれる土器、特にB群土器が少なく、今後の検討課題が多い。少なくとも北陸地域のオリジナル土器とは、器形が異なるC群土器が見られることは確かである。例えば、口縁部の形状からC群土器に分類したが、体部の器形がA群土器に類似するものもある。5-9-10などは好例で、体部の器形が卵形と丸い。北陸地域の土器は底部が小さく、体部下半が細くすぼまる器形になる。器形と製作技法の関係では、10-23-1と10-24-1の比較で明らかのように、同じ器形であるが、器面調整にハケメを残すものと地文の撲糸文を施すものがある。これらを概観すると、壺や甕の製作技法や口縁部の形などは外來系土器の特徴を取り入れるが、器形は在地の特徴を強く残していると判断でき、キメラ化の主体が在地にあることが分かる。

一方、キメラ化されずに外來系土器をストレートに受容している器種もある。特に高坏が顕著である。桜町I式土器には5-69-29や10-12-4な在地土器の特徴をもつ高坏が見られるが、高坏のほとんどはC群土器である。極めて少ないキメラ化の例として、12-56-2は器形や製作方法はC群土器であるが、脚部下端の段にA群土器の典型となる交互刺突が施される。

その他、北陸地域の土器に普遍的に見られる器種の内、桜町遺跡では器台や装飾器台が極端に少ない。器台は5-77-21であろうか。『会津10』で指摘したように、桜町式土器は周溝墓出土の

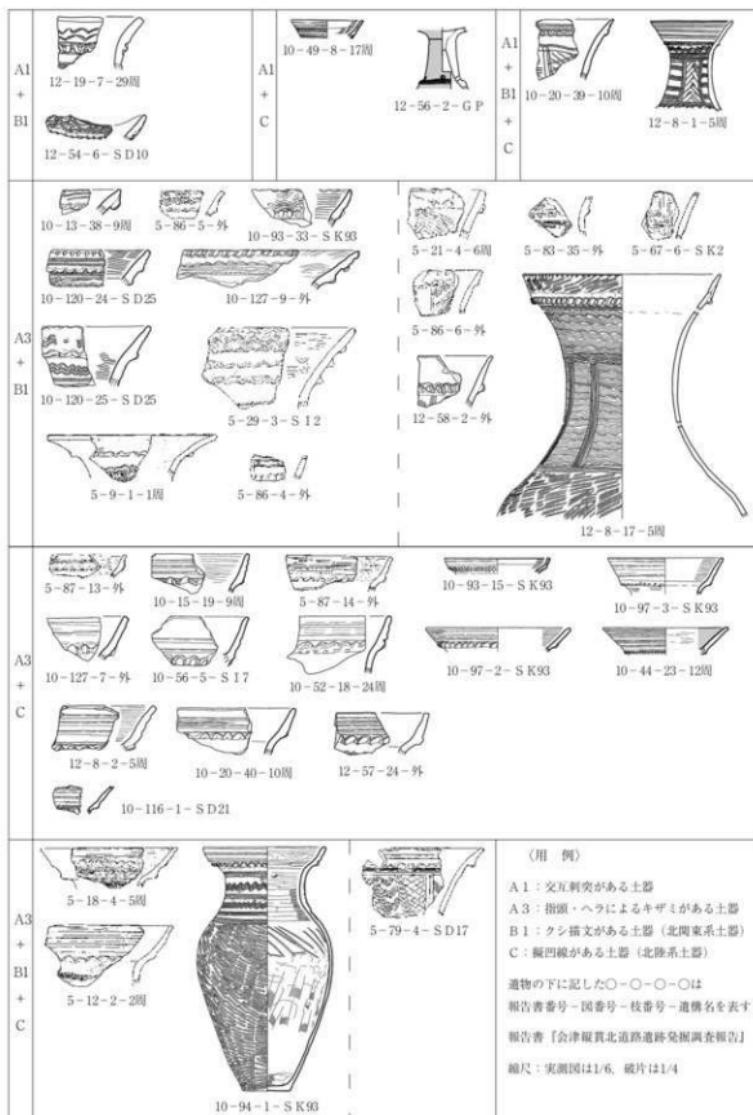


図60 桜町式土器におけるキメラ土器

〈用例〉

A1：交互刺突がある土器

A3：指頭・ヘラによるキザミがある土器

B1：クシ描文がある土器（北関東系土器）

C：擬凹線がある土器（北陸系土器）

遺物の下に記した○-○-○-○-○は

報告書番号 - 國番号 - 枝番号 - 遺物名を表す

報告書「会津坂上北道路遺跡発掘調査報告」

縮尺：実測図は1/6、破片は1/4

土器が多く、住居跡など日常生活に用いられた土器が少ない点が反映した可能性もあるが、北陸地域の土器のなかでも、壺や甕、高坏を主体として器種を選択的に受容していると結論付けた。つまり桜町遺跡では生活や周溝墓における葬送儀式に器台を多用しない。これは北陸地域をはじめとする周辺地域における土器のあり方にも異なる点である。周溝墓の造営は取り入れたが、同時に葬送儀式を完全に受容したのではないであろう。この点は桜町遺跡における弥生文化の受容とその理解度を考える上で、新たな検討課題となるであろう。なお、会津地域で周溝墓や古墳に器台が用いられる時期は、桜町Ⅲ式期になると出現し始め、会津坂下町稻荷塚遺跡などが類例となるであろう。さらに古墳時代前期の小型精製土器の普及とともに数量や器形的バリエーションとともに顯著に見られる。器種の選択的受容についても、在地社会の生活スタイルに基づく要請と理解できる。

文 様 文様や加飾など外表的な土器の特徴から、A群土器では交互刺突を施すものをA群1類、指頭によるキザミを施すものをA群3類とした。B群土器は十王台式土器に類似するものをB群1類、樽式土器に類似するものをB群2類とした。

A群1類とした交互刺突を施した波状隆線文で装飾された土器とB・C群土器とのキメラ化は全体的に少ない。A1+Bは破片であるが、A群1類の特徴である太い沈線による波状横線・蓮弧文をクシ歯状施文具で描いている。C群土器とのキメラは口縁部の浅い沈線、いわゆる擬凹線が数状巡る点が顯著である。12-56-2とするC群高坏に交互刺突が施されたものは極めて少ない。A1+B+Cでは、A1は口縁部下端のやや肥厚した段の部分、Bは頸部文様帯に縱区画文と連続刺突による横線・格子文・鋸歯文が充填文、Cは口縁部の擬凹線が組み合わせられる。全体的な器形が分かるものはないが、12-8-1の器形はA群土器の細頸壺、12-54-6は波状口縁となる広口壺に分類できる。

A群3類とのキメラはA群1類に比べれば資料数が多い。B群1類の要素は口縁部と頸部に見られる連続刺突による横線文・波状文、縱区画と数種の内部充填文が描かれる。B群1類でも鋸歯区画を描く土器とのキメラは見られない。C群の要素は口縁部の擬凹線にあり、A群1類とA群3類ともにキメラ化の様相は同じである。C群土器に顯著な有段口縁となる器形で、口縁部下端の段の部分に指頭によるキザミが巡る。10-97-3は口縁部の形状はC群に近く、ヘラを用いたキザミが巡る。10-94-1は器形的にはA群広口壺に近い。文様要素とは別に、器形的要素ではA1類とのキメラは在地A群の器形が多く、A群3類とC群のキメラにおいては在地A群とC群の壺の器形に近似するものが含まれる。

A群3類とB群2類のキメラは全く見られない。12-8-17は多段波状文が密に施されるが、樽式土器のクシ歯とは明らかに異なる。また樽式土器に典型的に見られる、頸部が長く延びて、体部中位に鋭い棱を持ち底部に向かってすぼまる器形の長頸壺は見られない。ここでも土器の施文方法は受容するが、器形までは取り入れないことがわかる。

文様以外の要素である地文の撲糸文について、桜町遺跡では十王台式土器の特徴である羽状となる撲糸文が全く見られない。キメラ土器でも地文は在地の伝統的な撲糸文を堅持している。

まとめ 桜町遺跡のキメラ土器を概観すると、以下の点が挙げられよう。①キメラ土器は決して多くない。これまでの調査から図60に示したものだけである。②土器製作には確実に北陸地域の技術、特にハケメを用いた器面調整が導入される。③C群土器を選択的に受容する傾向が見られる。壺や甕においてもA群土器の器形が基礎となる。同様にキメラ土器も器形はA群であり、B・C群土器の文様要素を取り入れたものが多い。④キメラの要素として、B群1類の縦位区画と内部充填文、C群の口縁部擬四線が主体を占める。一方、キメラ化されない要素には、十王台式土器に特徴的な羽状撲糸文、櫛式土器の連続波状文や廉状文、C群の体部上半の列点文などが挙げられる。

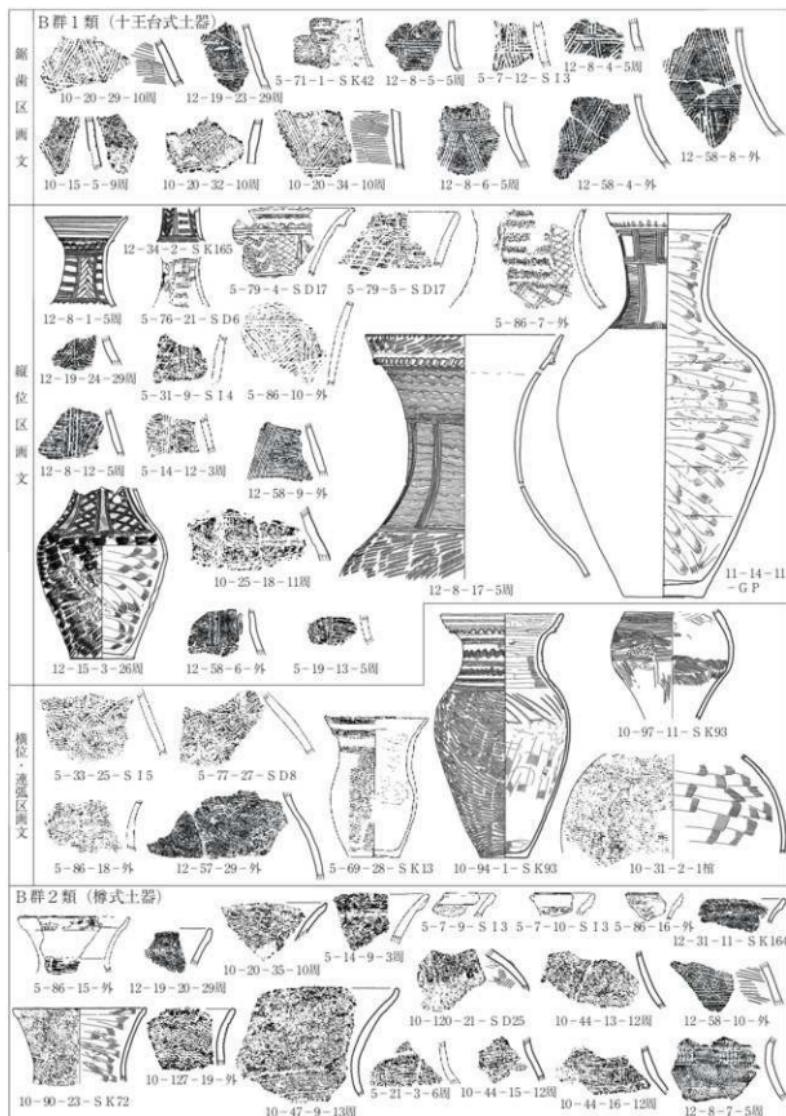
以上のことからも、キメラ土器はA群土器に外來系土器の一特徴が付加されたものである。桜町I式の基準となる93号土坑出土資料にもキメラ土器が含まれる。『会津10』で提示した、外來系土器や周溝墓造営の受容を起因とする会津地域の在地社会の変化とキメラ土器の出現に時間差を示す所見は認められない。また、キメラ土器は桜町II式以降に独自な変化は示さず、装飾華美なA・B群土器の減少にあわせて減少・消滅している。桜町遺跡のキメラ土器は、広域交流の活発化に起因してオリジナルには見られない、在地社会の内在的変化を表す事象と言える。さらに東日本にみられる土器をみても、地域ごとに個性あふれる土器が存在する。例えば新潟県新津八幡山遺跡でも北陸地域西部の土器と東北地域の土器のキメラ化した土器「八幡山式土器」もその一つと評価できる。キメラ土器は古墳時代の前段階となる地域社会の特徴の一つと言える。

3. B群土器の特徴について（図61）

桜町遺跡のB群土器は、十王台式土器に類似するものをB群1類、櫛式土器に類似するものをB群2類とした。B群土器自体が少なく、キメラ化したものを含むため、各地域におけるオリジナルとの比較が困難である。本項では、あえて時間的な併行関係を捉えることとし、今後の広域編年に対する議論の方向性を提示したい。

B群1類土器 器形が分かれる資料が少ないが、細頸壺と長頸壺が主体となる。その他に10-121-19に示す十王台式の高杯も見られる。B群1類の文様は、3~8本歯のクシ歯状施文具を用いている。その文様は短いストロークで施文具を動かし、波状文の屈曲部や連続刺突による横線文など施文具の「とめ」が明確である。文様は頭部を中心で描かれ、横位文や波状文によって文様帯を区画される。さらに頭部文様帯の内部を縦位または鋸歯状のクシ描きで区画する。文様帯内部の区画方法を基に、鋸歯区画、縦位区画、横位文や波状文のみの文様と3種に分類した。さらに充填文には波状文・格子文・山形文・V字文・横位文がある。

鋸歯区画は面違いとなる三角形が横向方に展開する。鋸歯区画と充填文の組み合わせによるパリエーションがあり、10-20-29は無文となる鋸歯区画と内部に格子文が充填された鋸歯区画が交互に配される。5-71-1は鋸歯区画に波状文が充填される。さらに文様帯に区画が2段になるものもある。5-7-12は鋸歯区画が2段描かれる。12-8-6は縦位区画と鋸歯区画が2段に組み合わされ、それぞれ内部に波状文が充填される。



縦位区画では、頸部文様帯を縦に4～6に区画し、それぞれの区画に充填文を描くもの。区画の間に無文部を配するものが見られる。充填文には波状文・格子文・山形文・V字文・横線文などがある。無文部がない縦位区画では、隣り合う区画の充填文はそれぞれ異なる傾向があり、その組み合わせでバリエーションがある。5-79-5は格子文と波状文、5-79-4は格子文とV字文、12-34-2は波状文とV字文、12-8-1は波状文と山形文などである。12-8-17は波状文を密に施した後に縦位区画するものもある。縦位区画に無文部を配する以外は、充填文に大きな違いはない。12-15-3は隣の区画と同じ格子文が充填される。また縦位区画にも鋸歯区画と同様に2段に文様帯を区画する。11-14-11はやや体部上半が張る器形で、横線文を充填する縦位区画と無文部は交互に配され、さらに上下で互い違いに配される。5-86-7は縦位区画の下部に格子文が全周する。多段になる区画の組み合わせにも数種あるのであろう。

次に頸部文様帯に横線文と波状文のみが描かれる土器がある。桜町I式の基準資料となる10-94-1は横線文と波状文を交互に描く。その他に頸部文様帯と体部の境に下方に開く連弧文が描かれる土器もある。5-33-25は連弧文が繋がって、大振りな波状文となる。10-31-2は頸部文様帯に縦位区画が配される。これらはA群1類土器にも見られる文様要素で、天王山式土器の特徴の一つとされ、5-12-1は太い沈線で下方に開く連弧文が描かれる。

桜町遺跡におけるB群1類土器の年代的な位置としては、5・26号周溝墓の資料から桜町I式期には確実に伴う。桜町II式期ではB群土器自体が減少傾向となり、15号周溝墓に伴う1号土器棺墓の資料がある。桜町III式期に伴う資料は極めて少なく、10-116-5に示す小型壺であろう。12-8-1に示すように桜町I式期に会津地域にB群1類が受容されると同時に、キメラ化したのであろう。桜町II式期以降は北関東地域との交流が低調になったのであろう、その数は減少する。

B群1類土器と福島県浜通り地域と茨城県の資料と比較する。茨城県でも比較的資料が豊富な那珂川下流域の資料では、東中根遺跡では広口壺や長頸壺などがある。その頸部文様帯は連弧文や重層V字文を主体とし、上下2段に描かれるものもある。なお十王台式に顕著な縦位区画はこの段階から認められる。本県浜通り地域では、いわき市輪山遺跡1号住居跡の資料が該当する。頸部文様帯は連弧文と重層V字文が主体となる。伊勢林前式以来の弥生時代中期末から後期初頭の影響を強く残す。一方、桜町遺跡のB群土器には、頸部文様帯に連弧文を主体とする資料や重層V字文が重なるものも見られない。輪山遺跡の資料は、桜町I式土器よりも古い段階の文様要素と考えた。

次に水戸市薬王院東遺跡39号住居跡の資料では、頸部文様帯が上下2段となり、上部は縦位区画に格子文と波状文が充填される。下段は格子文が描かれる。桜町遺跡の5-86-7と共通する。また薬王院東遺跡40号住居跡では鋸歯区画内部に格子文が充填される資料が見られる。これも桜町遺跡の10-20-32などに散見できる。また粗いクシ歯施文具で文様を描く10-25-18は大洗町長峯遺跡20号住居跡にも見られる。ひたちなか市山ノ上遺跡の資料では、無文部を配した縦位区画と波状文の充填文が描かれ、体部と文様帯の境に下方に開く連弧文が配される。桜町II式期に相当する1号土器棺墓10-31-2に共通する。

十王台式土器の特徴の一つである、細く括れた頸部に指頭押印された隆起線が数条めぐるものがある。十王台南遺跡1号住居跡の資料がこれに該当する。この隆起線は桜町遺跡B群土器には全く見られない。これが桜町遺跡B群土器の下限を伺う要素であろう。

以上のことから、桜町遺跡においてB群土器が出現する時期は、頸部文様帶に連弧文を描かない段階から頸部に指頭押印された隆起線を持たない時期に限定される。あえて土器型式に当てはめると、一部は東中根式の新しい段階に遡る可能性もあるが、概ね十王台式の古い段階に位置付けられるよう。ただし器形の分かる資料が少なく、文様要素の一部を基準としたことから、今後の検討課題が多いことは言うまでもない。桜町遺跡ではB群土器が客体で、その交流が低調傾向であることから、オリジナルの地域における土器変化と運動しない。さらに両地域が継続的な交流を保っていることも考慮に入れ、本項では大枠としての年代的位置付けに止める。

本県浜通り地域、資料が豊富ないわき市の資料と比較する。桜町遺跡のA群とC群土器も一定量供伴することが既に知られている。例えば桜町I式の基準となる93号土坑出土土器と玉山古墳下層出土の第II群土器、横山古墳群1号住居跡出土土器、八幡台遺跡V類土器、平塙諸荷遺跡2号周溝墓出土土器に共通点が多く見出される。ここで問題となるのが、客体となる外來系土器の供伴関係である。会津地域との関係では、天王山式土器と北陸地域の土器、茨城県域の十王台式土器である。

いわき市八幡台遺跡V類土器は「八幡台式土器」の基準資料である。この土器群の内容は、桜町遺跡A群3類とする口縁部下端に指頭によるキザミを巡らせた土器を主体とするが、十王台式土器に見られる縦位区画や横位波状文が描かれる土器、さらに北陸地域の土器に類似し、器面調整にハケメを残す資料が見られる。幅広の口縁部に横位沈線を数条巡らすものもあり、北陸地域の土器に顕著な擬凹線を模した意匠であろう。桜町I式の基準となる10-94-1と器形が酷似するものに、1号住居跡の無文土器（第31図20）がある。口縁部下端が肥厚するが内面に明瞭な段を持たない。頸部は直立気味で、体部は肩が張る器形となり、10-94-1と器形が酷似する。その他応時遺跡4号住居跡の広口壺は口唇部にキザミが付加されるもの、有段口縁や体部の器形も酷似する。

八幡台遺跡の資料は、地理的にも北陸地域との交流が多い桜町遺跡の土器群と様相は異なる。桜町遺跡の分類を基準とすれば、八幡台遺跡V群土器は、A群3類を主体とする中に、A群1類・B群1類・C群が含まれる。本県浜通り地域において広域交流が活発化する段階の資料と理解できよう。この点を積極的に評価し、桜町遺跡と同様な地域社会のあり方を示し、その土器群の特徴に桜町I式基準資料との差異も見られない。桜町I式と概ね八幡台遺跡の時期が近いと考えた。

玉山古墳下層の第II群土器では、桜町遺跡A群1類が玉山1・2類、A群3類が玉山4類、B群1類が玉山3類、C群は玉山5類に相当する。これら弥生土器の多くが玉山古墳の盛土に含まれ、明確な供伴関係を伺う出土状況ではないらしい。玉山古墳第II群土器を概観すれば、各類の出土量に違いがあるものの、その内容は桜町式土器との共通する特徴が見出される。玉山1・2類は口縁部が大きく開く、広口壺または長頸壺であろう。口縁部の文様に連弧文や波文を中心で描く楕円文があるなど共通点が見出せる。玉山4類は肥厚する口縁部下端に指頭によるキザミが巡る。口縁部

の形状やキザミが2～3段巡るものもあり、桜町A群3類との共通点は極めて多い。玉山4類は縦位区画を主体とし、無文部を配するものも含まれる。充填文は格子文と波状文であろう。地文は羽状となる撚糸文が施される。桜町B群1類とは、縦位区画と充填文の組み合わせは共通する。十王台式の特徴である指頭押圧による隆線文がない点も共通する。一方、桜町B群1類とは地文が羽状の撚糸文になる点は異なる。いわき市が十王台式土器の本拠地に近いことが大きな要因であろう。玉山5類では、a種高坏では十王台式に見られるものが多いが、坏身と脚の接合に粘土を充填する作りのものが見られる。坏身下に擬凹線状の浅い沈線が巡る。10-89-1とする桜町II式にともなう高坏に類似する。b種とする壺・甕の口縁部形状は、桜町I式基準資料の10-97-6、甕C-1と分類するものと酷似する。以上のことから玉山古墳第二群土器の内容は桜町式土器との類似点が多いことは確かで、本県会津地域と浜通り地域との関連を伺い知る良好な視座となる。

本県浜通り地域の資料を概観すると、桜町I・II式土器と同じ内容の資料が散見できる。ただ桜町遺跡A群土器各類の出土比率が異なり、いわき市域では八幡台遺跡や横山古墳群1・4号住居跡に見られるA群3類が主体となるのである。また外来系土器とするB・C群土器が含まれるが、それぞれのオリジナルとは明らかに異なる。それぞれの地域との交流頻度や空間的距離に影響しているのである。いわき市域の十王台式土器はオリジナルと変わらない特徴を示すが、北陸地域の土器とは器形や製作技法などに違いが見られる。本県浜通り地域と北陸地域との直接的な交流ではなく、本屋敷古墳群2号住居跡の資料を検討した阿部朝衛が指摘するように、北陸地域の土器に類似する土器は会津地域で変化した土器が介在するとし、この状況は桜町遺跡との関連でも桜町I式期から認められる。

B群2類土器 文様は5～6本歯のクシ歯状施文具を用いて、彫りの深い連続波状文や廉状文を描く。全体的な器形が分かるものはないが、体部に対して口縁部から頸部が長く延びる壺であろう。口縁部は幅が短く、口縁部が折り返し口縁になるもの、口縁部下端が肥厚するものも含まれる。口縁部の文様は、無文になるもの、横位波状文が施されるものがある。頸部は多段の横位波状文が密に描かれるものが多く、無文のものも少量ある。頸部の括れ部には廉状文を施し、廉状文より下位となる体部は撚糸文が地文となる。B群2類とのキメラ土器は確認できない。このことは元来、樽式土器に立体的意匠による装飾華美なものがない。口縁部の幅が短く、有段口縁となる壺や甕がない点が影響している。有段口縁の下端に施されるA群土器の交互刺突や指頭によるキザミやC群土器の擬凹線も採用されないのである。さらに体部の地文に撚糸文が施されることは、B群1類と同じく会津地域で堅持される特徴の一つであろう。

群馬県の事例によれば、樽式2期には壺や甕の頸部が長くなるとともに、榛名山山麓地域では折り返し口縁が盛行するとされる。また樽式土器には天王山式と報告される東北系土器や十王台式土器なども客体的ではあるが出土例も少なくない。群馬県域の天王山式土器と報告されるものに桜町式土器が含まれる可能性があるものの、破片資料が多く、明確な共伴関係が掴みづらい。桜町I式を敢えて樽式土器との併行関係を求めれば、B群2類に折り返し口縁が多いことから、樽式2期に

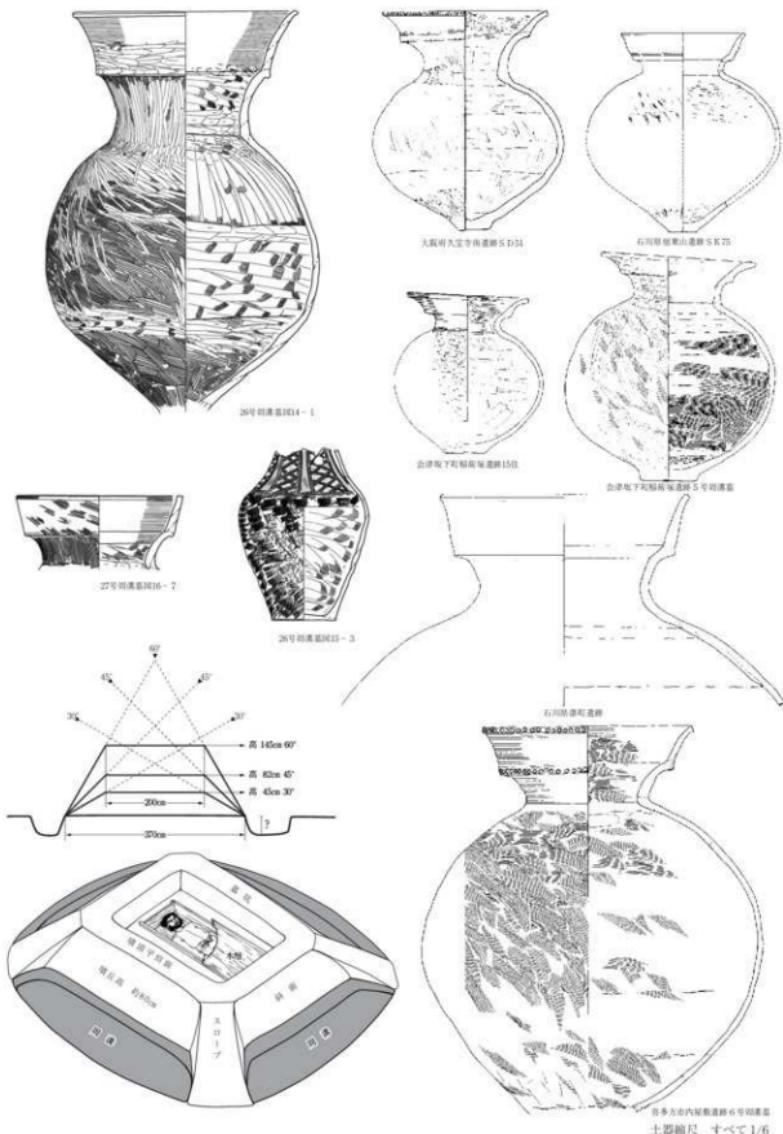


図62 参考資料 二重口縁壺の類例と26号周溝墓復元案

近い時期であろうか。なお櫛式系段階前半とされる有馬遺跡211号住居跡からは、18号周溝墓から出土した桜町Ⅲ式土器（10-36-7）に類似した北陸系の壺が見られ、桜町式土器と群馬県域の土器との併行関係を捉える指標となる。

櫛式土器を主体とする群馬県域においても、桜町遺跡と同様に、地域独自の個性ある土器と共に他地域の土器が出土する。弥生時代後期後半から古墳受容期において、活発な広域交流の一端が見られる。それぞれ地域の独自性を維持しつつ、広域交流を必要とする社会であったと推定される。

広域交流モデル 桜町式土器は弥生時代後期後半から定型的な前方後円墳の出現までの土器群である。加えてキメラ土器の検討をまとめると、①各地域において在地の伝統的土器群に混ざって外来系土器を伴う。在地土器と外来系土器のキメラ化も見られる。②継続的に変化する外来系土器と継続しない外来系土器がある。外来系土器の頻度と継続性に地域差が大きい。③古墳文化の受容時期に時間差がある。

桜町遺跡の事例では、桜町Ⅰ式期に北陸地域と北関東地域、本県浜通り地域との交流が想定できる。土器だけでなく、周溝墓や井戸跡や住居跡、稲作農耕技術など生活様式を含む社会を維持・管理するシステム全般に渡る影響がある。これらは北陸地域との交流を通して、会津地域の在地社会の要請に応じて外来的文物を選択的に受容していったと考えた。桜町Ⅱ式以降は北関東地域との交流が低調となる一方で、北陸地域の社会システムを継続することで、東北地方南部でもいち早く前方後円墳に代表されるヤマト王權との関わりを強くしているのであろう。古墳文化が倭國の外縁地域に受容される過程において、会津地域には高地性集落の環濠集落がなく、征服や移民など緊張関係を持った外圧が想定できない。外來要素の選択的受容に表出される在地社会の内在的変化が大きい。一方北関東地域の状況は、十王台式土器と櫛式土器など地域色豊かな土器が継続して用いられている。弥生時代後期後半から終末期にかけて、それぞれの隣接地域との交流が活発になり、各地で様々な土器が認められる。北関東地域では、最終的に在地弥生土器と五領式の土師器と供伴例が示すように、定型的な前方後円墳が造営される時期まで地域の独自性が強くのこる。さらに本県浜通り地域では、桜町Ⅰ式期に相当する八幡台遺跡や玉山古墳下層の時期には会津地域を介した北陸地域と茨城県域との交流が認められるが、それ以降は十王台式土器が一般的に用いられる。また浪江町本屋敷古墳群2号住居跡の例から、桜町Ⅲ式期には浜通り地域と会津地域の交流が認められるが、継続しない。浜通り地域は会津地域とは違って、茨城県域の社会システムを選択・受容した結果であろう。当然、前方後円墳の出現時期も、「塙釜式」の成立以後となる。

東北地方南部における古墳文化の受容には時期差だけでなく、その受容と伝播のベクトルが地域ごとに異なる。弥生時代後期後半頃の東日本では、広域交流の活発化→隣接地域との結束強化→古墳文化の受容という流れにおいて、各地域間の独自性が強く、その時間的・空間的ベクトルも様々な様相を示している。前方後円墳の出現以前は、弥生時代後期以来の地域色豊かな社会が、倭國の外縁地域における一般的な有様であったのであろう。各地域で数多く設定された該期の土器型式は、さながら倭伝の冒頭「倭人の国邑、もと百余国」が言いえて妙である。

(福 田)

第2節 桜町遺跡の調査意義

4次に渡る発掘調査によって、桜町遺跡の東南端から北西端にかけて、遺跡の中心部を貫いて幅60m、長さ500mの大きなトレンチが設定された。これにより、弥生時代終末期の集落及び墳墓、平安時代の集落、室町時代から現代に至る桜町遺跡の概要が明らかになった。なかでも弥生時代の調査成果は、この地で本格的な水稻耕作を生業とする生活が営まれていたことを明らかにした。会津平の歴史像は、大きく変わった。要点を整理しておきたい。

時間軸の設定 弥生から古墳への過渡期の実態解明は、日本史研究の焦点である。これを解明するためには、土器型式による考古学上の時間軸を確立することが不可欠である。ところが、会津地域における弥生時代後期では、独自の土器型式が設定されていなかった。これまで、天王山系土器の土器組成を保証する良好な発掘調査成果が得られていなかったことに主因がある。

そこで会津地域の土器編年は、近接地域で設定された編年を援用して、考古学型式論による方法から考えられてきた。たとえば、天王山式土器に顕著な交互刺突による文様が刻み凸面に変化すると想定した年代基軸などである。それは確かに、古い要素から新しい要素への変化ではあるが、型式を構成する土器群を保証する土層秩序の裏付けがないという限界があった。

また、参考にした編年案の前提となった基礎資料が、包含層からの出土土器、あるいは遺跡から表採された土器片の場合もあった。これらの資料では、同一土器の部位による特徴の相違、土器の組成内容、意系統土器との共存関係、前後する土器型式との区分などに疑念が生じる。

ひとつの土器型式には、新旧の様相が混在しているし、儀礼用あるいは日常用という違いもある。作り方に精粗もある。さらに異なる地域の土器も含まれる場合もある。発掘調査の現場での検証を省いて提示された土器編年案は、分析者の考えを示してはいるが、検証は困難である。

いうまでもないが、土器編年には3つの分析手続きがある。①一つの土器型式を構成する土器群の把握、②土器型式が維持される時間幅の限定、③分布する地域の範囲である。①と②は、発掘調査をふまえて可能になる。③は、困難な作業である。歴史研究における地域の把握は、境界の設定基準が不明瞭な場合が少なくない。①と②が保証されていても③が不十分であれば、土器型式というよりは、土器群の段階変化として理解すべきであろう。関東地方から東北地方南部で、考古学的時間軸が定まらないのは、発掘調査現場で型式内容の検討が不十分なことも一因であろう。

桜町遺跡の調査で設定した桜町I～III式は、この点を反省して設定した。桜町I式の土器組成は93号土坑から出土した土器群を基準にしている。井戸跡である。構築時、(あるいは造り替え)の下部構造から多量の土器が出土し、井戸底からは廃棄される直前の土器が出土している。井戸が造られて廃棄されるまでの時間幅で把握できる土器群である。これと、四隅切れ周溝墓から出土した土器を合わせて、桜町I式の土器群を提示した。分布範囲は、新潟平野東部からいわき市方面まで広がっている。

桜町Ⅱ式は、101号土坑の資料を基準にしている。土坑墓に埋葬された土器である。これに、方形墳丘に土橋の設けられた周溝墓から出土した土器を合わせて設定した。この時期、分布範囲は米沢盆地に進出する一方で、新潟平野やいわき市方面では目立たなくなる。

桜町Ⅲ式は、18号・20号周溝墓と21号溝跡から出土した土器群から設定した。これを100号土坑出土資料で補強した。桜町Ⅰ式・Ⅱ式が閉鎖造構から出土している資料に対して、土器群としての根拠はやや脆弱である。しかし縄文の施文や凸帶など、それまでの在地要素がほぼ消え在地土器の伝統が薄れること、北陸系土器を咀嚼して会津平独自の土器群に変化している点を考慮して設定した。仙台湾岸の塩釜式、関東の五領式とは、異なる要素も少なくない。分布圏は、会津平から東方に広がっている。器形と種類や作り方からは、土師器の範疇で捉えられる土器である。

桜町Ⅰ式に顕著な特徴は、在地の土器とあわせて、北陸方面と北関東方面の要素を合わせた土器が目立つことである。異なる遺伝子をもった土器の部位が合体したもの、キメラ土器である。北陸に特徴的な口縁部の擬凹線、東関東のクシ描きによる頸部の区画文様、それに在地の器形と摘み出し凸帶を合わせた土器などである。キメラ土器から、北陸の月影式・東関東の十王台式、それに桜町Ⅰ式の各型式が同時に存在した一点が判明した。月影式（いわゆる月影土坑土器）を介して、おむね庄内式前半に対応する時期である。

土器の作り方も、北陸方面から西日本に連なるハケメやヨコナデ、内面のカキトリによる整形が多用される。一方で、十王台式の羽状撚糸文や北陸の装飾器台など、受容されない要素もある。在地の要素をベースに、周辺地域の土器が受容された結果である。

水稻農集落会の成立 桜町遺跡で検出された周溝墓、掘立柱建物跡、井戸跡、大溝などは、安定した農耕社会がこの地でも営まれてきたことを明らかにした。稲穀圧痕の付着する土器、コメやマメ、アサの実なども出土している。水田は未確認ではあるが、狹鋤の出土は近くに水田が存在していた証拠である。畑も営まれたであろう。農作物とともに山川の産物も、食料や生活資材として利用されていたであろう。

出土した土器は、軽量薄壳が主体である。外面に炭化物が付着した煮炊き用の土器である。これ以外の壺や高杯が少量である。大型壺は、赤彩が施されている。儀式用であろうか。また器台は、ほとんど出土していない。北陸方面のような多種多様な土器組成ではない。石器は、石鏃以外は剥片と石核程度である。道具類の鉄化が進んでいる状況証拠であろう。布の痕跡は確認していないが、アサの実の出土から、植物纖維による衣服の存在は想定されよう。

会津平の低地では、堅穴住居跡の検出例は少ない。低地部では自噴水のために、堅穴住居を住居とすることができなかったのである。それに代わって、周間に排水溝を備えた掘立柱建物跡が導入された。近隣では、北陸地域に特徴的な住居様式である。低湿地と冬場の豪雪、寒冷気候に対応した構造である。91・94号土坑から出土した建築部材によって、近辺に大型建物が造られていたことが判明した。4次調査で検出した164号・165号土坑は、井戸跡と柱穴跡の可能があり、井戸とするには、汲水部の直径が40cm前後と狭い。柱穴説も捨てがたい。

2次・3次調査で確認した21号溝跡は、現状では小さな規模である。しかし検出面から削平された厚さと表土を想定すれば、幅3m、深さ2m以上の大溝となろう。これにより、桜町遺跡が立地する自然堤防から集落の範囲を明示する役割があった。弥生時代の集落に特徴的な施設である。この地での本格的な農耕集落は、桜町I式期に確立した。

古墳の受容まで 会津平の低部域では、弥生時代中期までの墓は再葬墓あるいは土坑墓からなる格差のない集団墓である。墓は、被葬者の社会関係を踏まえて営まれる。この時期の人々には、顕著な格差はなかった。稀に、豊かな副葬品が伴う墓もあるが、被葬者の個人的能力によって獲得したものであり、富や地位を世襲する首長は出現していない。

一方、桜町遺跡で検出された周溝墓には大小があり、また土坑墓や土器棺墓もある。周溝墓と土坑墓では、造営労力に大きな格差がある。葬られる墓に格差が生じたことは、集落を構成する人々の間に生じた役割の分化があったことを示していよう。

四隅切れ周溝墓は、東海地域を起源として関東・北陸方面に波及したことが判明している。弥生時代前期後半に出現して、会津平では桜町I式期に受容された。周溝は外側に膨らむ形で、四隅の土橋部が明確に造られている。これに墳丘部を想定すれば、いわゆる四隅突出形になる。

同様な形の墳丘墓は、山陰地域を中心に造られている。山陰地域のそれは、墳丘の四隅が突出することにより造りだされた形である。山陰の四隅突出形墳丘墓には、貼石はあるが周溝はない。東日本の四隅切周溝墓は、周溝の四隅に設けられた土橋部の発達により出現したのである。貼石はない。北陸の四隅突出形墳丘墓も、同様である。やはり東海系周溝墓の発展形であろう。山陰系四隅突出形墳丘墓とは、出自が異なる点に留意したい。収斂変化である。

桜町II式期には方形墳丘に土橋が、桜町III式期には円形墳丘に土橋が設けられる。しかし、土橋の前端まで周溝を巡らした例はない。同様な墳丘墓は、九州まで分布している。庄内式期に東北地方南部から九州に至る地域で活発になった物流や思想・政治の地域間交流の結果である。ただし会津平では、西日本の土器が出土していないことから、北陸・関東を介した間接的な結びつきである。

桜町遺跡の周溝墓は、集落内の協業による労力で造ることが可能であろう。ところが堂ヶ作古山墳や会津大塚山古墳の造営には、膨大な労力とそれを組織・運営する社会体制が前提となる。堂ヶ作古山墳全長84mの大古墳であり、しかも山頂部に造られている。山裾との比高差は110m前後もある。想定される当時の人口は、少ない。機械もない。会津平全体の人々の協業によって築造されたのである。古墳の造営は、王権が会津平で成立したことを示している。北陸でいう古府クルビ式期から高畠式、古墳時代前期の中葉近くであろうか。古墳からは、桜町I・II式や十王台式土器は出土していない。古墳の受容が、この時期まで古くならないことを示している。

会津の原型 東北地方では、青森県砂沢遺跡(前期末)垂柳遺跡(中期)や宮城県中在家南遺跡(中期)などで水田の跡が確認されている。農耕具や道具類も明らかにされている。これらの水稻耕作は、繩文時代の技術を基本にして作られている。いずれも、海に近い土地である。しかしこれの集落が、弥生時代後期まで継続する例はない。弥生時代後期の東北地方は、気候が寒冷化した時代で

ある。水稻農耕は放棄され、北方の狩猟採集を生業とする文化が南進したと考えられていた。

会津平の弥生遺跡は、前期や中期までは丘陵部や山間部に分布している。縄文時代と変わらない場所である。そこで生活は、縄文時代の生業と共通する部分が少なくなかったであろう。墓制も中期までは、縄文的な再葬墓・土坑墓である。本格的な水稻農耕は、成立していなかった。また会津平の中期土器は、天王山式土器に継続しない。中期と後期には、大きな断絶がある。

会津平低地部で、集落が急増するのは弥生時代後期である。北方文化と結びついた天王山式土器を伴う集落である。この土地は、水稻農耕には適しているが、狩猟採集生活には不向きな場所である。それまでの集落分布が希薄な理由である。一方この場所は、水稻農耕に適している。今日、東北地方でも最良の耕地が蓄積されている土地である。会津平に至った北方文化は、狩猟採集ではなく水耕農耕生業としていたのであろう。寒冷化を逃れて、水耕耕作に適した場所を求めて南進したのではないだろうか。

会津平の天王山系土器前半期、能登段階では、北方文化の要素が顕著である。北陸地域や関東地域との結びつきは、極めて希薄である。集落の様相も大きく異なっている。文化圏の南端境界を形成していた。能登遺跡から出土した石鏡・石匙・石錐・石斧・磨石・凹石などの石器は、縄文時代の技術基盤を継承している。田舎館遺跡や砂沢遺跡と比べても大差はない。白河天王山遺跡では、コメも出土している。水田が確認されていないだけである。生業が狩猟・採集に戻ったのでは、決してない。会津平底部の弥生後期集落は、水稻農耕を営んでいたと考えたい。

会津平で交流が活発になるのは、桜町I式期からである。北陸を主に東関東方面を従に交流があった。集落施設の変化は急であった。桜町遺跡では、掘立柱建物、井戸、集落を区画する溝、周溝墓、農作物の種子などが確認されている。北陸の要素を取り入れて、本格的な農耕社会が確立されたのは、桜町I式である。北陸や関東方面の人々が移住して伝えられたのではなく、在地社会が主体に変容した水耕農業であった。北方文化の伝統は、会津平で色濃く保たれていた。

続く古墳の出現は、桜町式期における水稻農耕社会の成熟を前提とした出来事である。会津平の人々は、主体的に古墳を受容したのである。古墳の受容は、会津平は、首長層を核として一つの政治圏を形成するまでになったことを示している。このことは、ヤマト政権を背景とした北陸勢力による制圧、あるいは移住という出来事ではなかった。

今日、弥生文化の多様性が注目されている。日本列島における水稻農業の受容が、これまでより古くなることが明らかになった。弥生文化は、長い時間をかけて東方に向かって段階的に普及した。各地域にごとに、それぞれの環境に適合した稻作文化が存在し、定着過程も一様ではなかった。会津平では、弥生後期の寒冷化に対応して、北方から受容されたと考えた。他の地域とは異なる、特異な水稻耕作の伝播例である。

会津は、東北地方で最も豊かな土地である。その基盤は、水稻農業と会津を単位とする政治社会の確立にある。弥生時代後期から古墳の出現に至る3世紀前後に、今日の会津が会津である原型が誕生した。まだまだ仮説の段階である。成否は、今後の調査に期待したい。

(福島)

引用・参考文献

《発掘調査報告書》

- 福島県文化振興事業団 1990 「能登遺跡」『福島県文化財調査報告書』第242集
 1991a 「原敷遺跡」『福島県文化財調査報告書』第262集
 1991b 「和泉遺跡」『福島県文化財調査報告書』第263集
- 湯川村教育委員会 2006 「桜町遺跡発掘調査報告」『湯川村文化財調査報告書』第4集
 1990a 「宮東遺跡・男垣遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書』第16集
 1995 「下ヶ森古墳・福荷塚遺跡発掘調査報告」『会津坂下町文化財調査報告書』第33集
- 会津若松市教育委員会 1999a 「史跡若松城跡」『会津若松市文化財調査報告書』第64号
 2004 「屋敷遺跡」『会津若松市文化財調査報告書』第94号
- 塙川町教育委員会 1998 「館ノ内遺跡」『塙川町文化財調査報告』第4集
 1999 「古屋敷遺跡」『塙川町文化財調査報告』第6集
 2004 「内星敷遺跡」『塙川町文化財調査報告』第12集
- いわき市教育委員会 1977 「輪山遺跡—先人器・弥生時代遺構の調査—」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第4冊
 1980 「八幡台遺跡—弥生・室町時代集落跡の調査—」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第5冊
 1994 「土ノ内遺跡—縄文時代から平安時代の集落跡の調査—」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第38冊
 1998 「平度諸荷遺跡」
 2002 「巖山古墳群」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第82冊
 2006 「応時遺跡—古墳時代後期集落の調査—」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第115冊
 2009 「県指定 玉山古墳—東北南部における前方後円墳の調査」
 「いわき市埋蔵文化財調査報告」第135冊
- 堂ヶ作山古墳調査団・会津若松市教育委員会 1991 「堂ヶ作山古墳」I 『会津若松市文化財調査報告書』第17号
 1996 「堂ヶ作山古墳」III 『会津若松市文化財調査報告書』第50集
- 法政大学 1985 「本屋敷古墳群の研究」法政大学
- 東北学院大学文学部史料学セミナー・原町市教育委員会 1996 「高見町A遺跡発掘調査報告書」『原町市埋蔵文化財調査報告書』第12集
- 米沢市教育委員会 1988 「比丘尼平遺跡発掘調査報告書」『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第21集
- 新潟県教育委員会 1979 「下谷地遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第19集
 2000 「裏山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第96集
 2006 「正尺C遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第165集
 2001 「八幡山遺跡発掘調査報告書」
- 富山県文化振興財团 2006 「下老子井川遺跡発掘調査報告」『富山県文化振興財团埋蔵文化財発掘調査報告』第31集
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986b 「唐町遺跡」I
 1988 「唐町遺跡」II
 1989a 「唐町遺跡」III
 1989b 「塗町遺跡」IV
 1987 「信東山遺跡」
 1990 「松任市一塚イチノツカ道路」
 1995 「谷内・杉谷遺跡群」
 2000 「金沢市戸水C遺跡・戸水C古墳群(第9・10次)」
- 石川県教育委員会 2002 「加賀市猫橋遺跡」
 松任市教育委員会 1995a 「旭遺跡群」I

第3章 ま と め

- 松任市教育委員会 1995b 「旭遺跡群」Ⅱ
1995c 「旭遺跡群」Ⅲ
- 大阪府教育委員会 1996 「久宝寺南」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
財団法人大阪文化財センター

《論 文》

- 石川日出志 2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号 新潟県考古学会
2004 「弥生期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 大木直枝 中村五郎 1970 「山草荷2式について」『信濃』
- 小田本治太郎 1989 「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』Ⅱ (石川考古学研究会誌) 第32号
石川考古学研究会

- 加藤 学 2011 「新潟市正尺C遺跡出土の縄文施文土器 天王山系土器の下限を探る—」

『研究紀要』第6号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 木本 元治 2009 「南東北の弥生時代後期の土器編年 一今津地域を中心に—」『福島考古』第50号 福島県考古学会

- 小森 紀男 1988 「古墳出現期における外来系土器の検討 一朝木県内出土例を中心として—」

『栃木県考古学年報』第10号 栃木県考古学会

- 齋藤 瑞穂 2011 「十王台式の北漸と赤穴式羽状縄文技法の成立」『東国の地域考古学』六一書房

- 流沢 規朗 2009 「新潟県の影響一外來系鏡の検討 2—」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会

- 千田 一志 2009 「福島県会津盆地における弥生時代後期から古墳時代前期までの様相」

『福島考古』第50号 福島県考古学会

- 中村 五郎 2010 「本誌第50号発表の木本元治・千田一志論文をめぐって」『福島考古』第51号 福島県考古学会

- 野々口陽子 1996 「いわゆる畿内系二重口縄文の展開」『京都府埋蔵文化財論集』3 京都府埋蔵文化財センター

- 古屋 紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義 一東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』第104号 駿台史学会

《書籍》

- 浅川 淳男編 1998 「先史日本の住居とその周辺」同成社

- 甘柏 健編 2008 「倭国大乱と日本海」『市民の考古学』5 同成社

- 石野 博信 1985 「古墳文化出現期の研究」学生社

- 川村 浩司 2003 「古墳出現期時の研究」高志書院

- 菊地 労郎 2010 「古墳時代史の展開と東北社会」大阪大学出版会

- 設楽 博巳 2008 「弥生再考幕と社会」塙書房

- 高瀬 克範 2004 「本州島東北部の弥生社会誌」六一書房

- 藤尾慎一郎 2011 「<新> 弥生時代」吉川弘文館

- 吉岡 康暢 1991 「日本海城の土器・陶磁」『人類史叢書』9 六興出版

《学会資料等》

- 庄内式土器研究会 1997 「庄内式併行期の古墳出土土器」『庄内式土器研究』XIII

- 1998 「北関東を中心とした庄内式併行期の土器の移動」『庄内式土器研究』XVI

- 1999a 「庄内式併行期の土器生産とその動き」『庄内式土器研究』XIX

- 1999b 「庄内式併行期の土器交流拠点」『庄内式土器研究』XX

- 2003a 「越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XXVI

- 2003b 「越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XXVII

- 埋蔵文化財研究会 1991 「弥生時代の掘立柱建物 本編」第29回研究集会実行委員会

- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 「東日本における古墳出現期過程の再検討」

- 茨城県考古学協会・十王町教育委員会 1999 「十王代式土器制定60周年記念シンポジウム 茨城県における弥生時代研究 の到達点－弥生時代後期の集落構成から」

- 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 福島県立博物館 2000 「東日本弥生時代後期の土器編年」

- 第9回 東日本埋蔵文化財研究会・福島大会

- 新潟考古学会 2005 「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」

写 真 図 版



1 調査区近景

1 調査区①南東部（南から）
3 調査区①北西部（北西から）

2 調査区②南東部（北西から）
4 調査区②北西部（南東から）



1

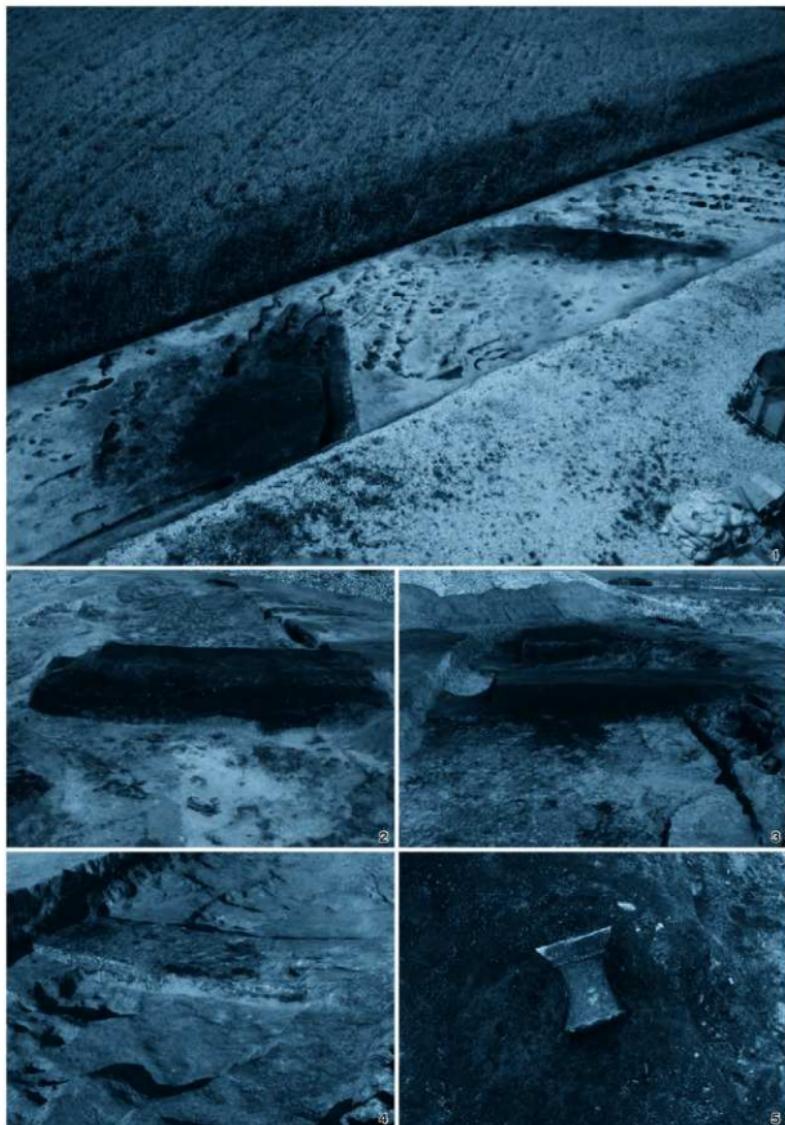


2

2 調査区近景

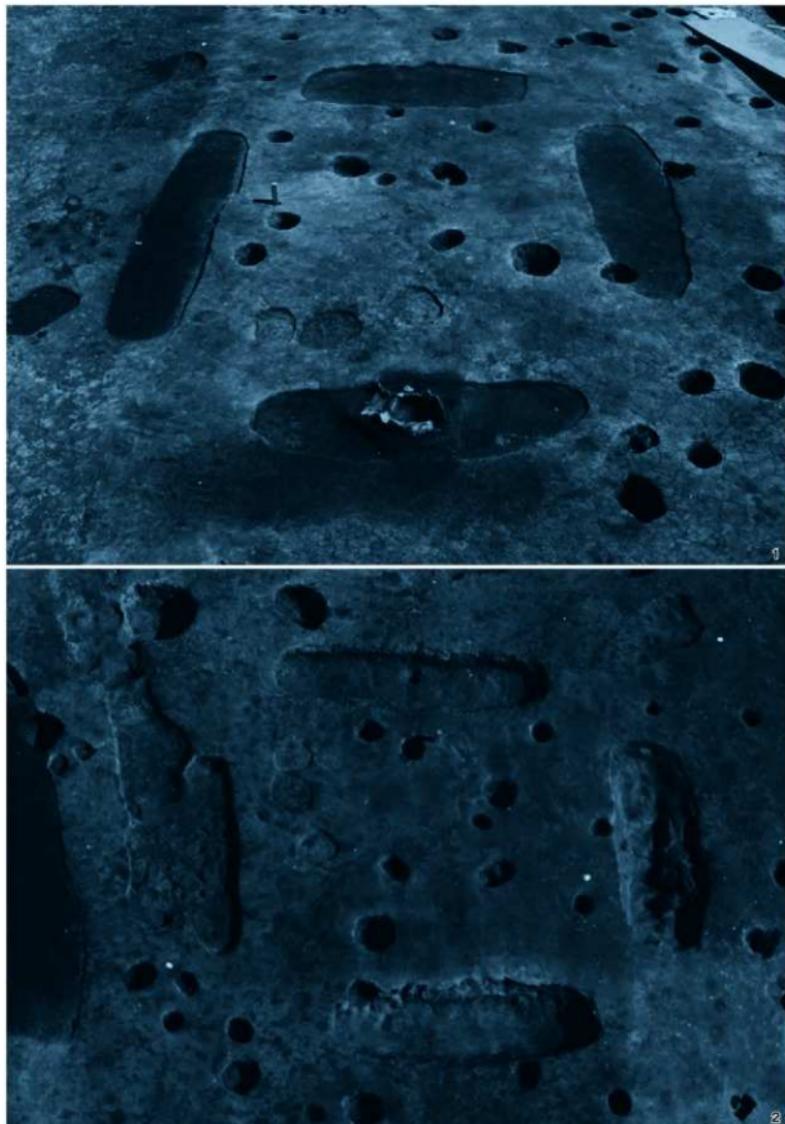
1 調査区③南東部（西から）

2 調査区④東部（西から）



3 5号周溝墓

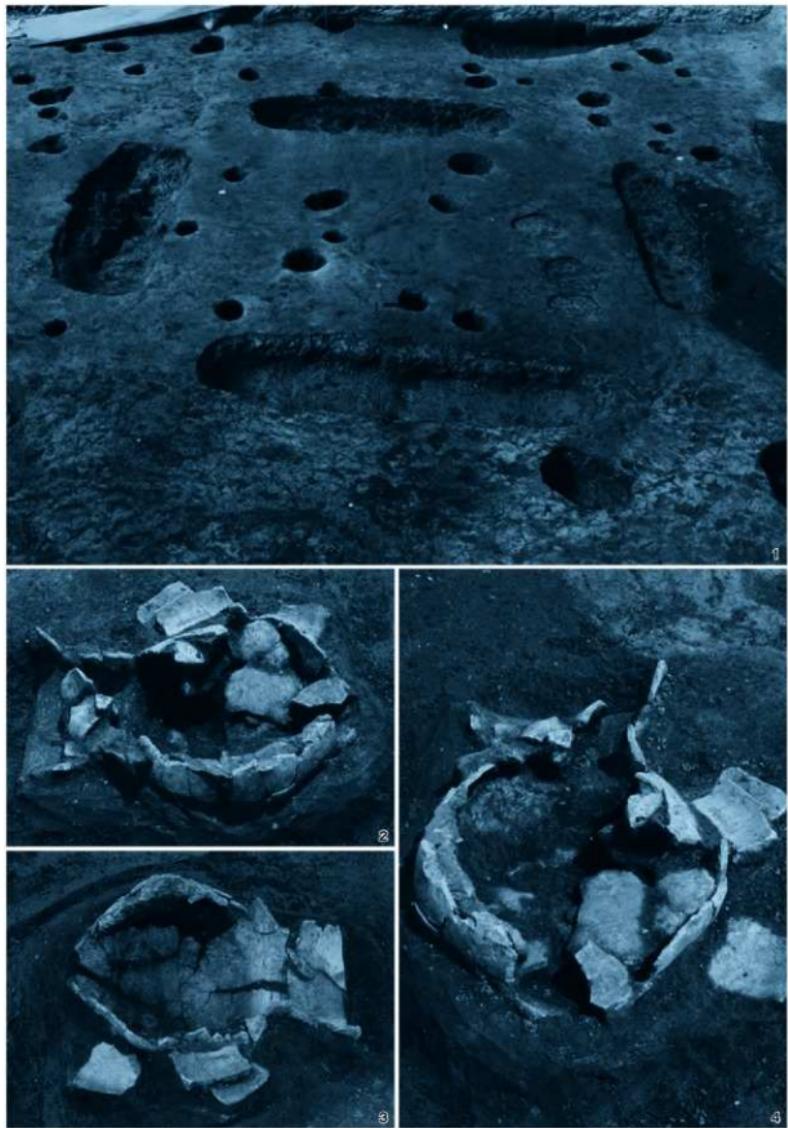
1 檻出（北東から）
2 西溝土層（西から）
3 南溝土層（西から）
4 南溝出土土器（北東から）
5 南溝出土土器（北東から）



4 26号周溝墓（1）

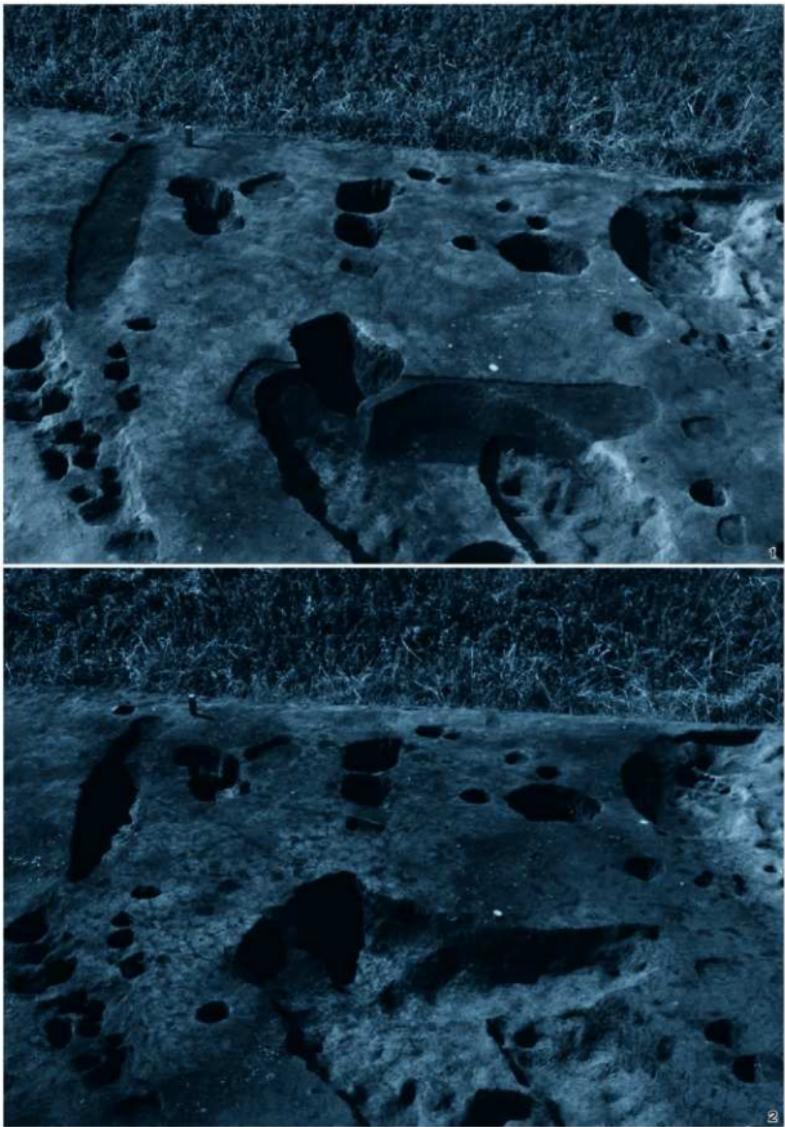
1 検出状況（西から）

2 全景（東から）



5 26号周溝墓（2）

1 全景（北から）
2 西溝土器出土状況（西北から）
3 南溝土器出土状況（南東から）
4 西溝土器出土状況（南西から）



6 28号周溝墓

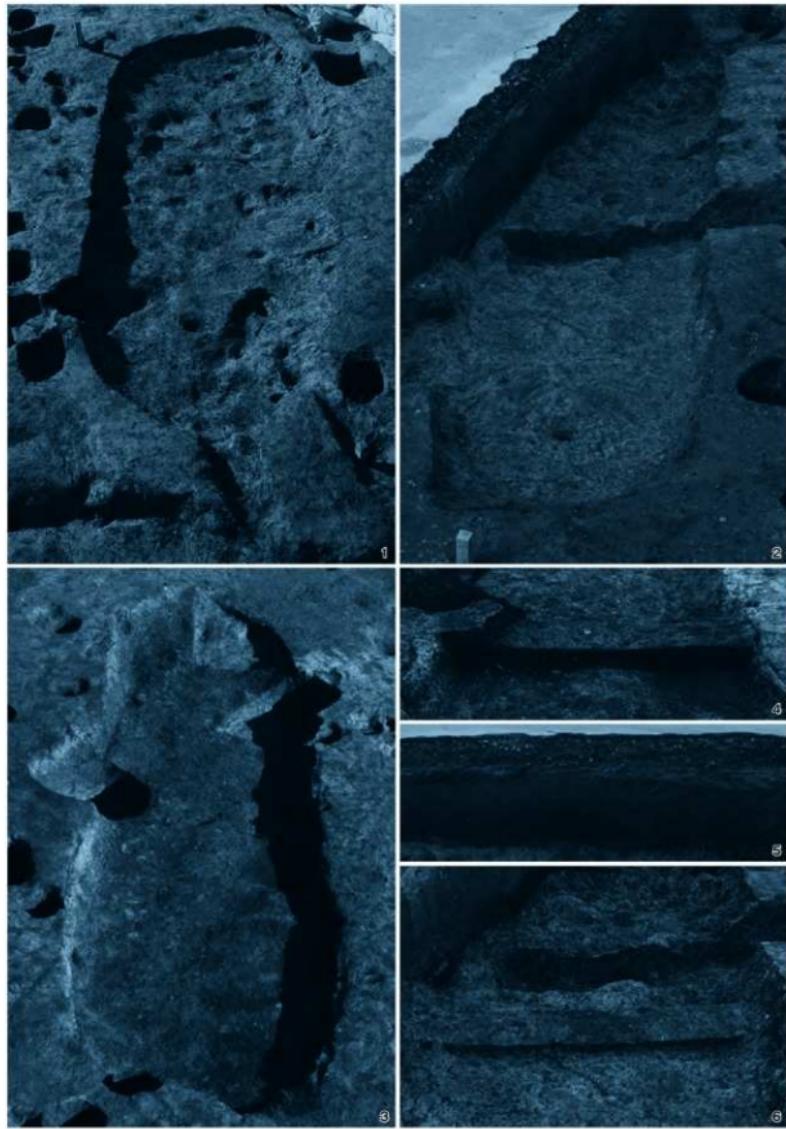
1 検出状況（北から） 2 全景（北から）



7 29号周溝墓（1）

1 26号・29号周溝墓（北東から）

2 29号周溝墓検出状況（北東から）



8 29号周溝墓 (2)

- 1 西溝（北から）
3 東溝（南から）
5 雨溝土層（北から）
- 2 南溝（東から）
4 東溝土層（南から）
6 雨溝粘土層（東から）



9

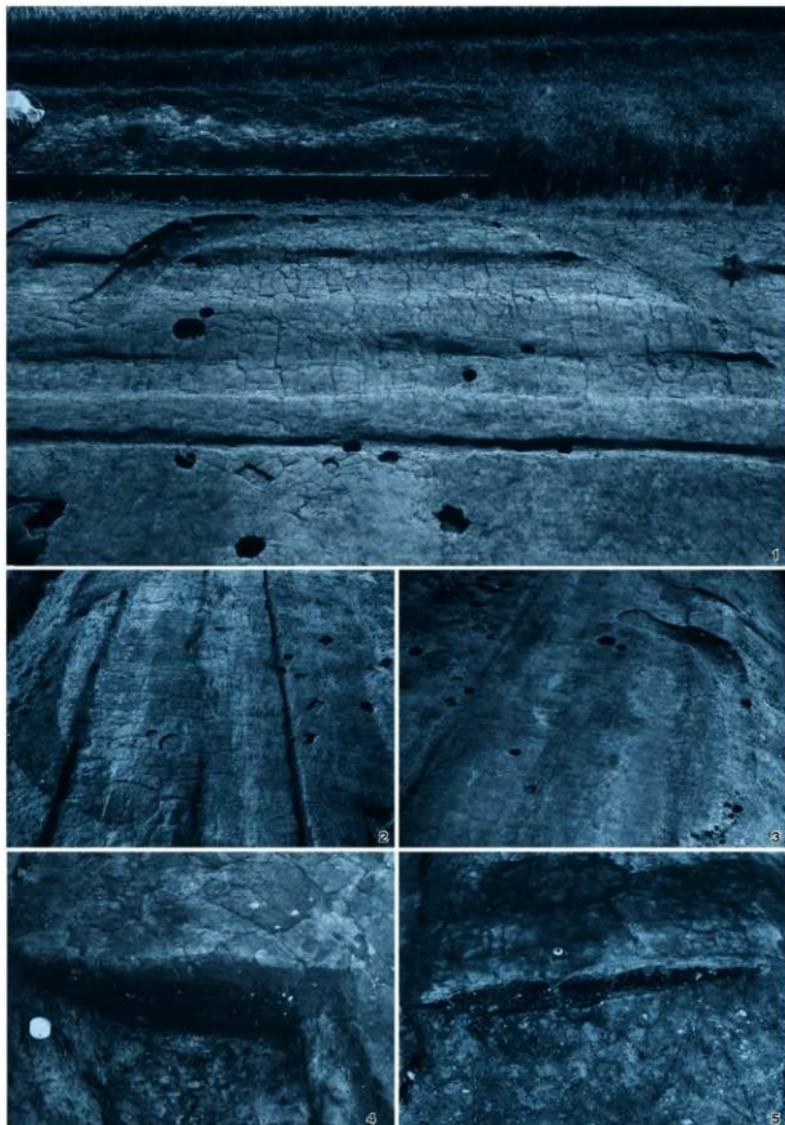


2

9 調査区①遺構検出状況

1 調査区①南部遺構検出状況 (南から)

2 調査区①南部遺構検出状況 (北東から)

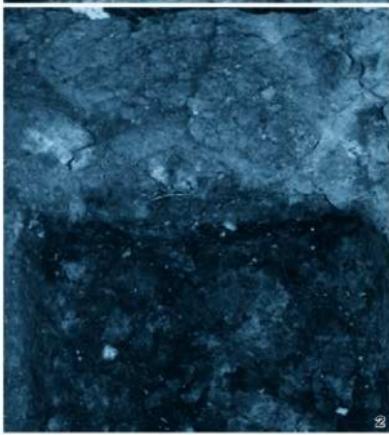


10 19号周溝墓

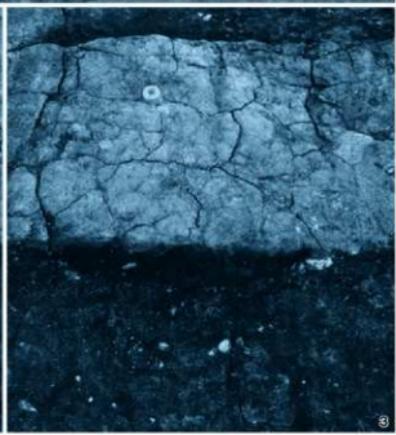
- 1 全景（東から）
2 検出状況（南東から）
3 全景（北西から）
4 検出状況（南東から）
5 全景（東から）



1



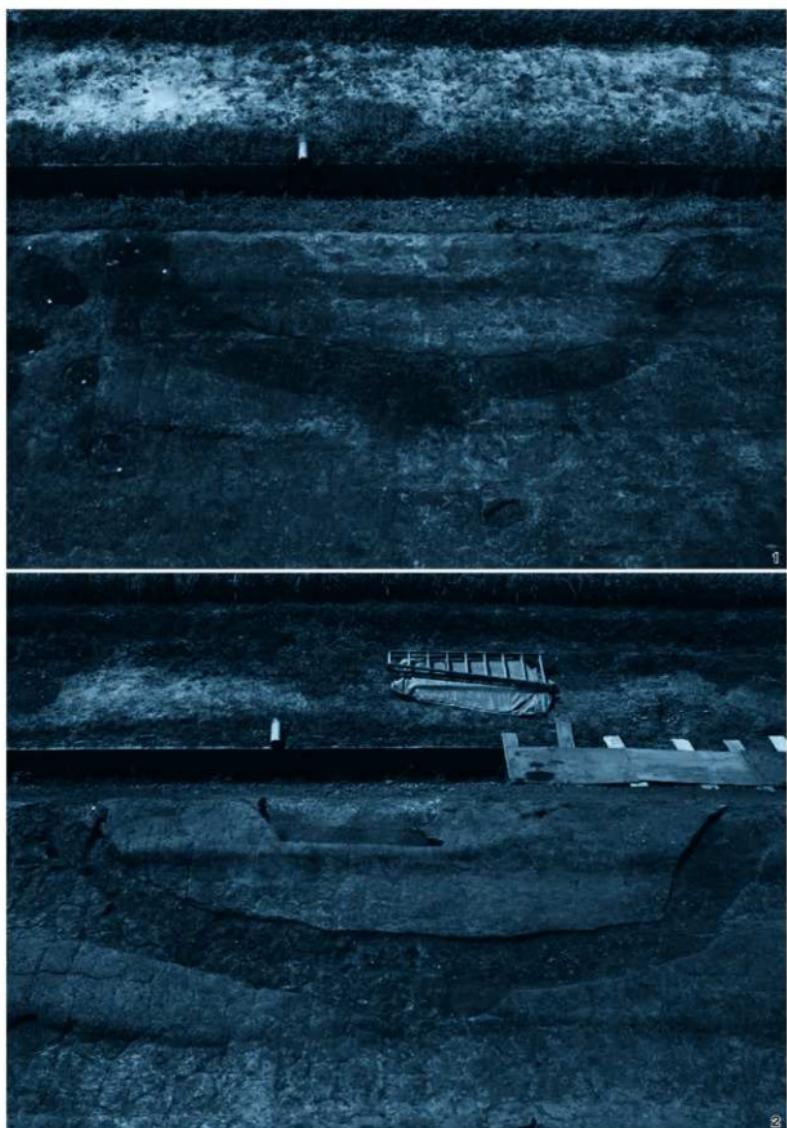
2



3

11 25号周溝墓

1 全景（東から）
2 南部溝土層（東から）
3 東部溝上層（北東から）

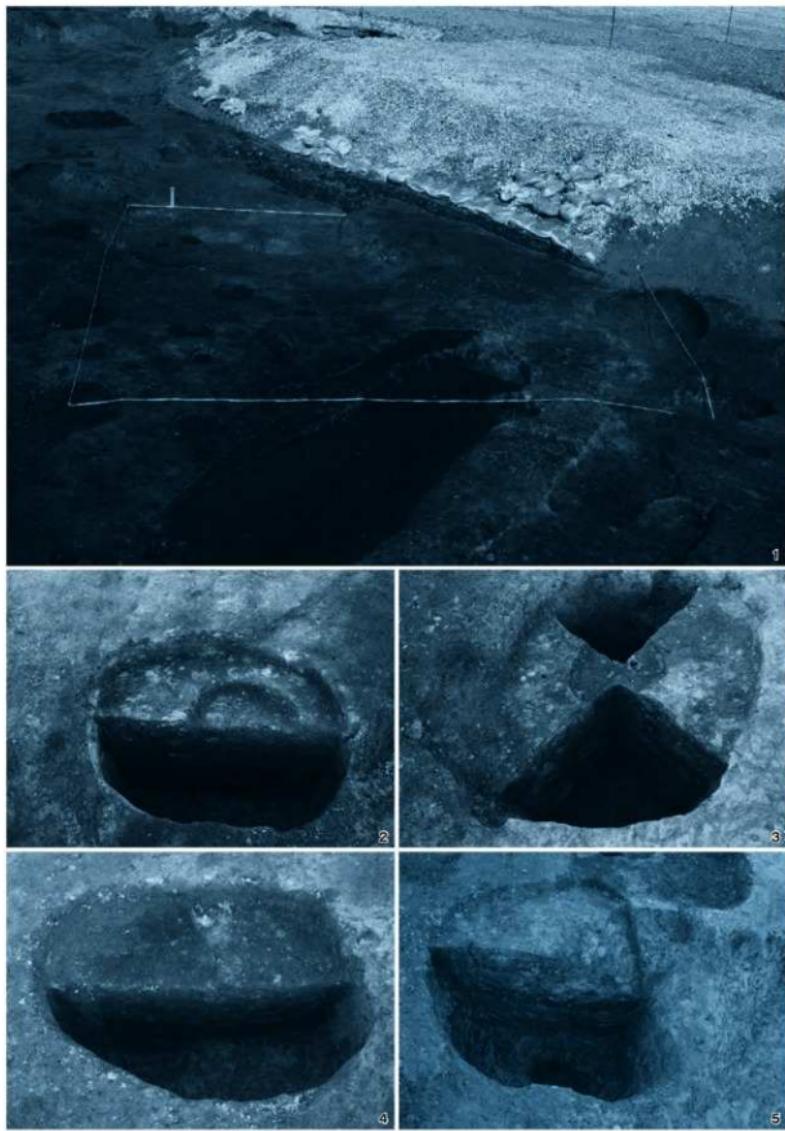


12 27号周溝墓

1 掘出状況（北東から） 2 全景（北東から）



13 調査区①完掘状況（南東から）



14 7号掘立柱建物跡

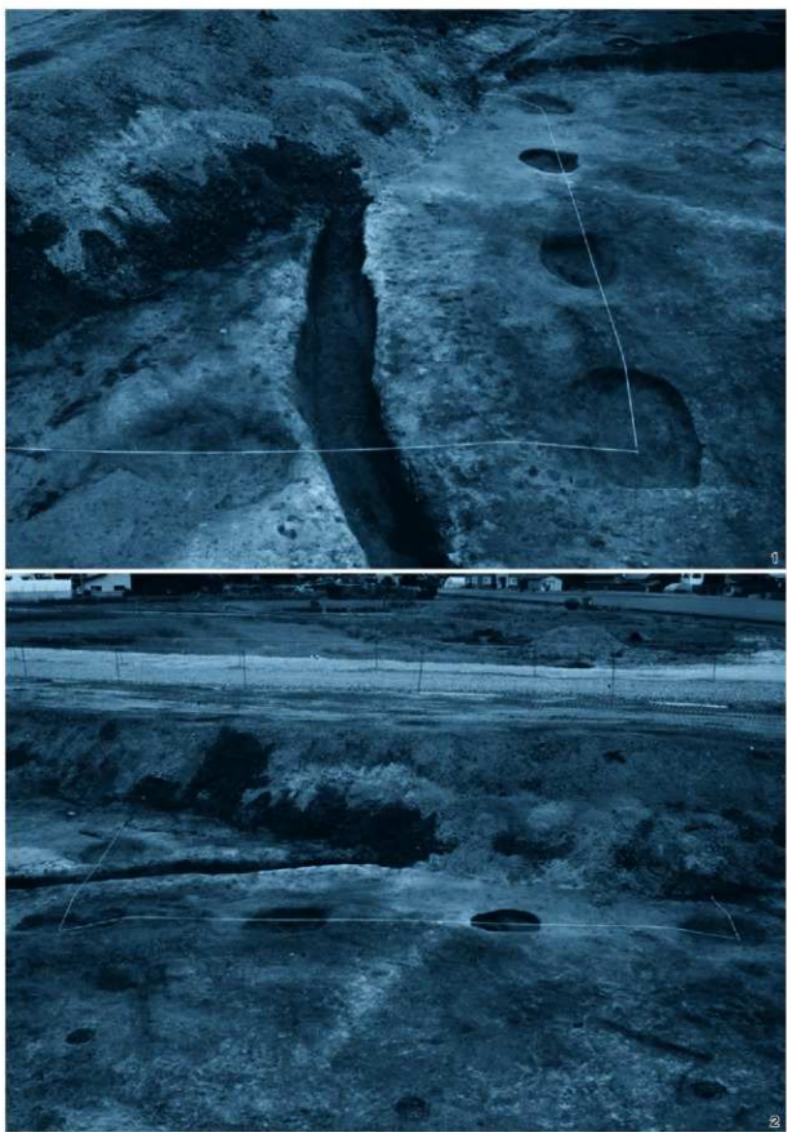
1 検査状況（南から）
2 P10土層（南東から）
3 P9土層（南東から）
4 P8土層（西から）
5 P7土層（東から）



15 18号掘立柱建物跡検出状況（西から）

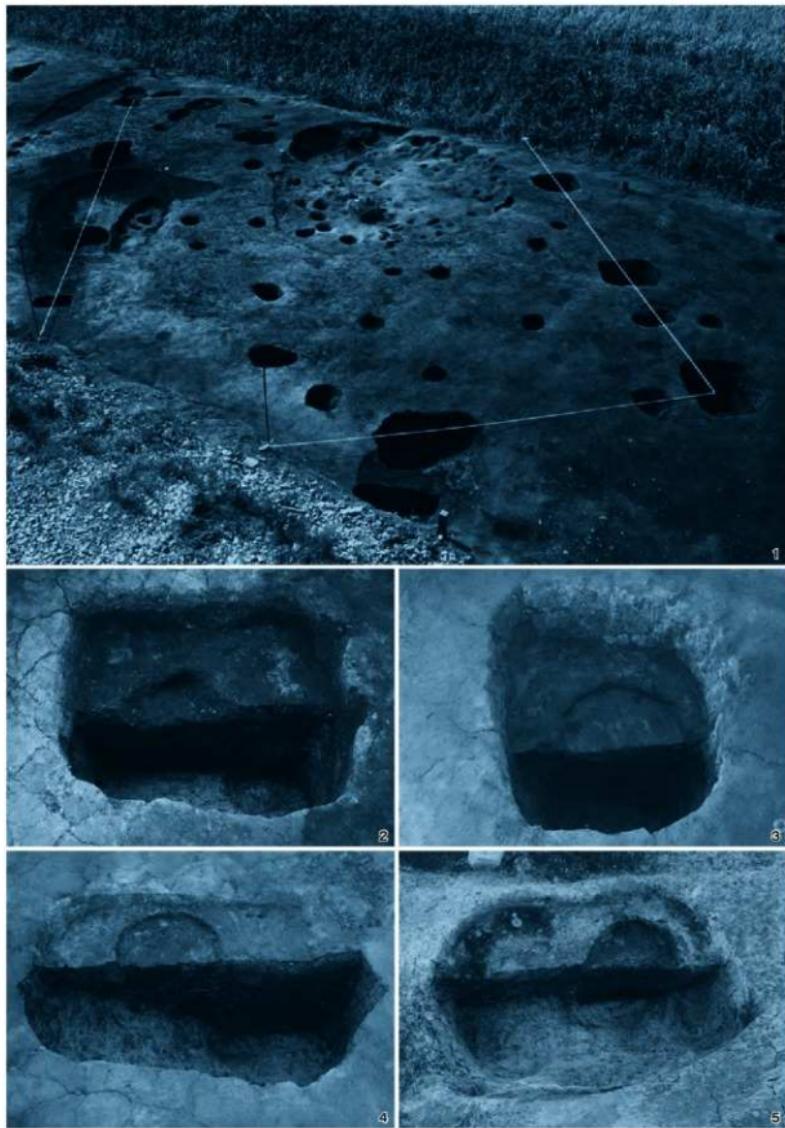


16 7・66号掘立柱建物跡（北西から）



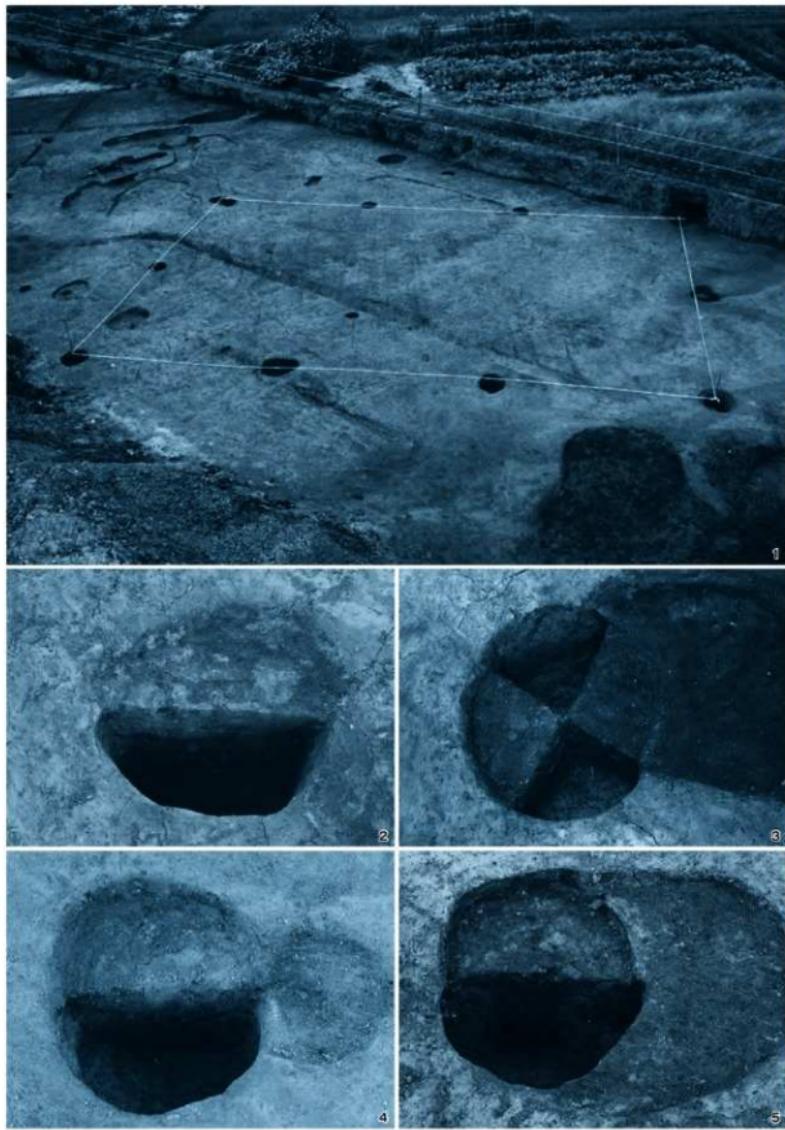
17 58号掘立柱建物跡

1 全景(西から) 2 全景(東から)



18 64号掘立柱建物跡

- 1 全観（北から）
2 P 1 土層（東から）
3 P 4 土層（東から）
4 P 3 土層（東から）
5 P 6 土層（南から）



19 65号掘立柱建物跡

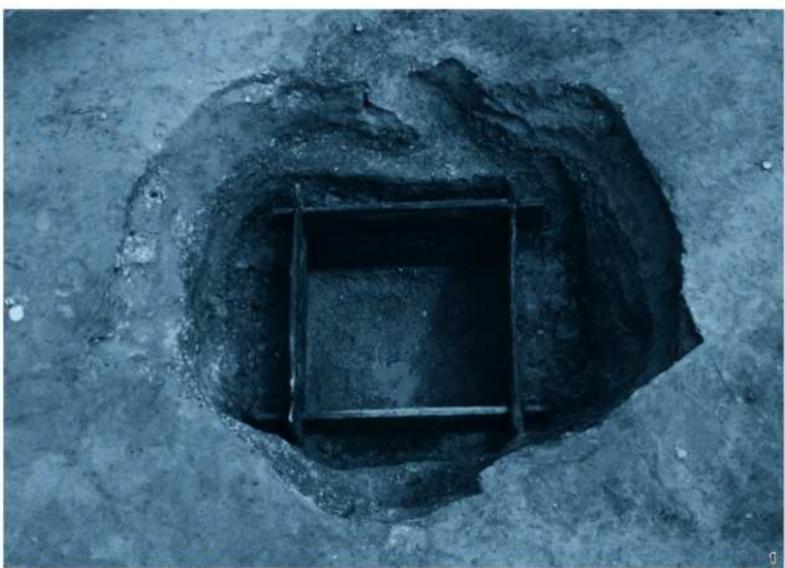
- 1 全景 (南から)
3 P 4 土層 (南東から)
5 P 8 土層 (東から)
2 P 1 土層 (南から)
4 P 5 土層 (東から)



20 66号掘立柱建物跡全景（東から）



21 9号竪穴状遺構全景（東から）



1



2

22 土坑（1）163号土坑

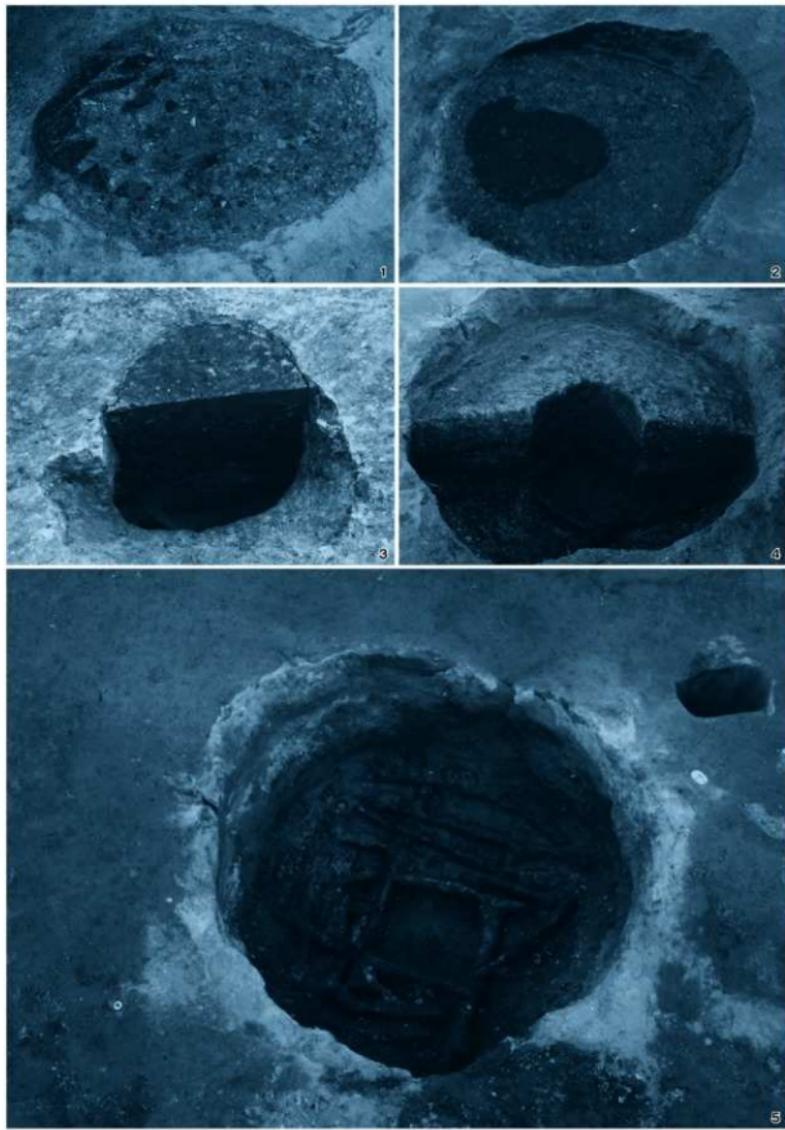
1 全景（南西から）

2 井戸枠（東から）



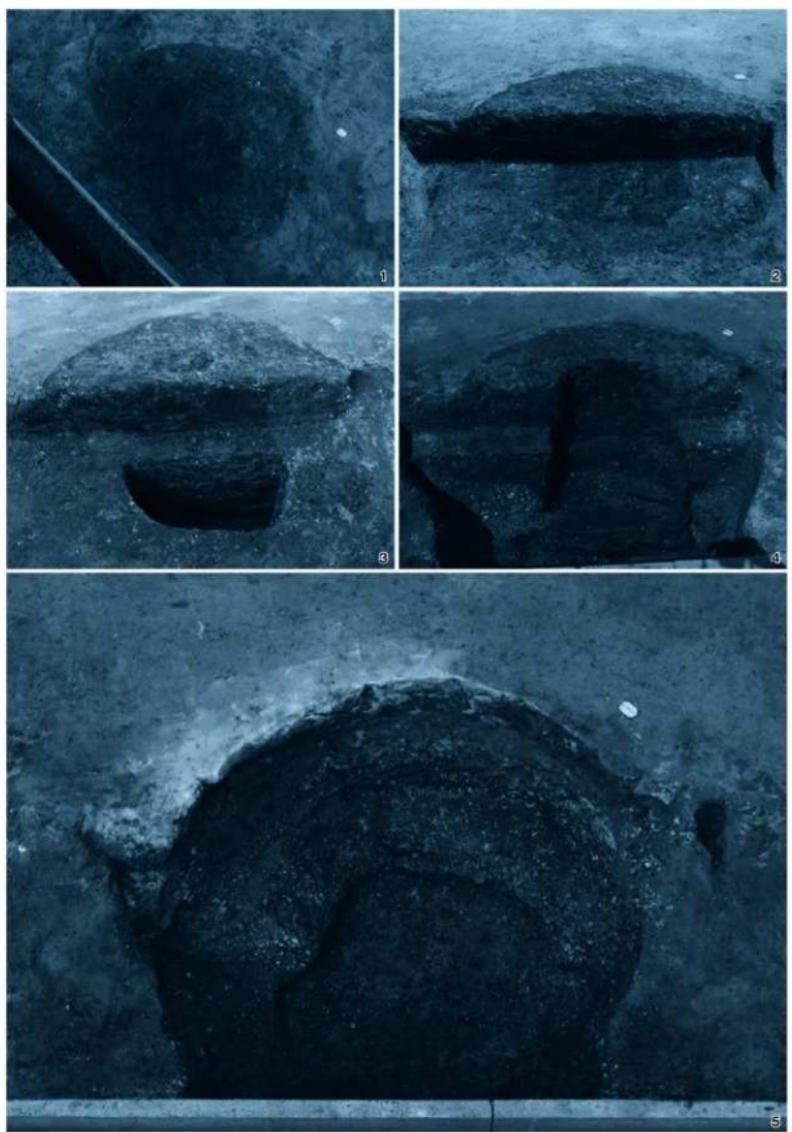
23 土坑(2) 163号土坑

1 遺物出土状況(北東から) 2 遺物出土状況(北東から)



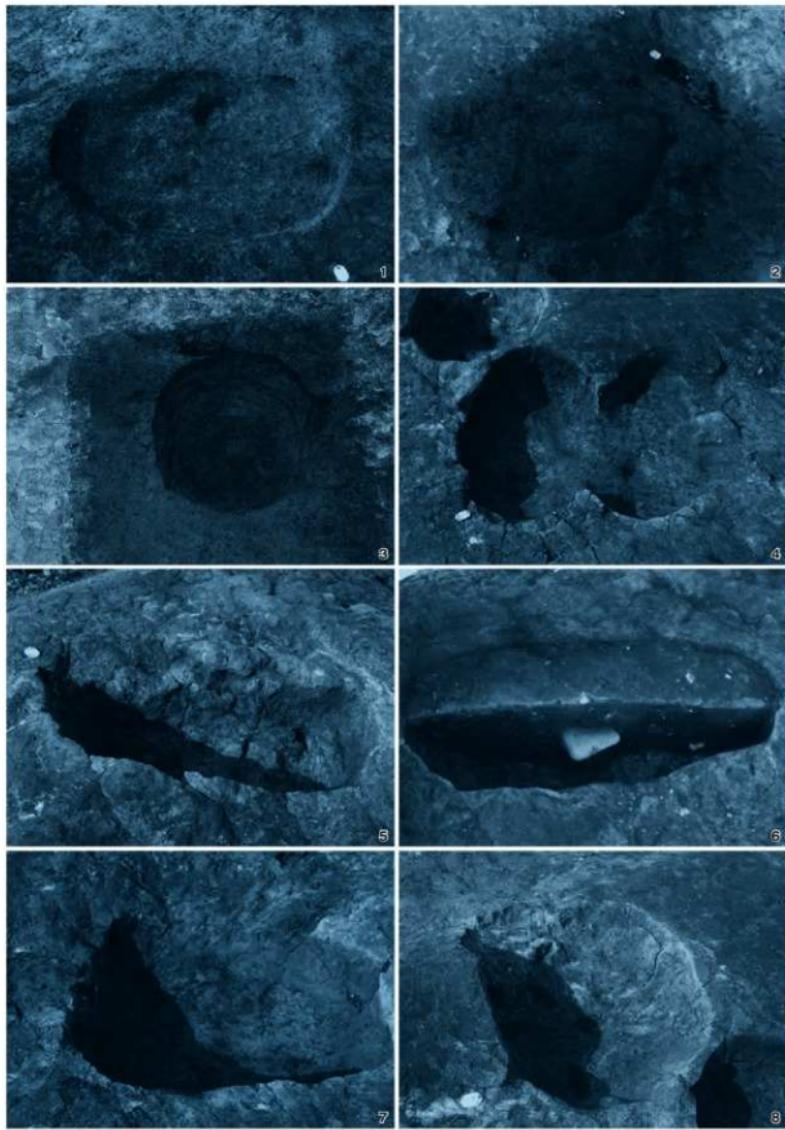
24 土坑（3）164号土坑

1 挖出状況（南から）
2 土堀 1（西から）
3 土堀 2（南西から）
4 土堀 3（南西）から
5 下部木組み（南から）



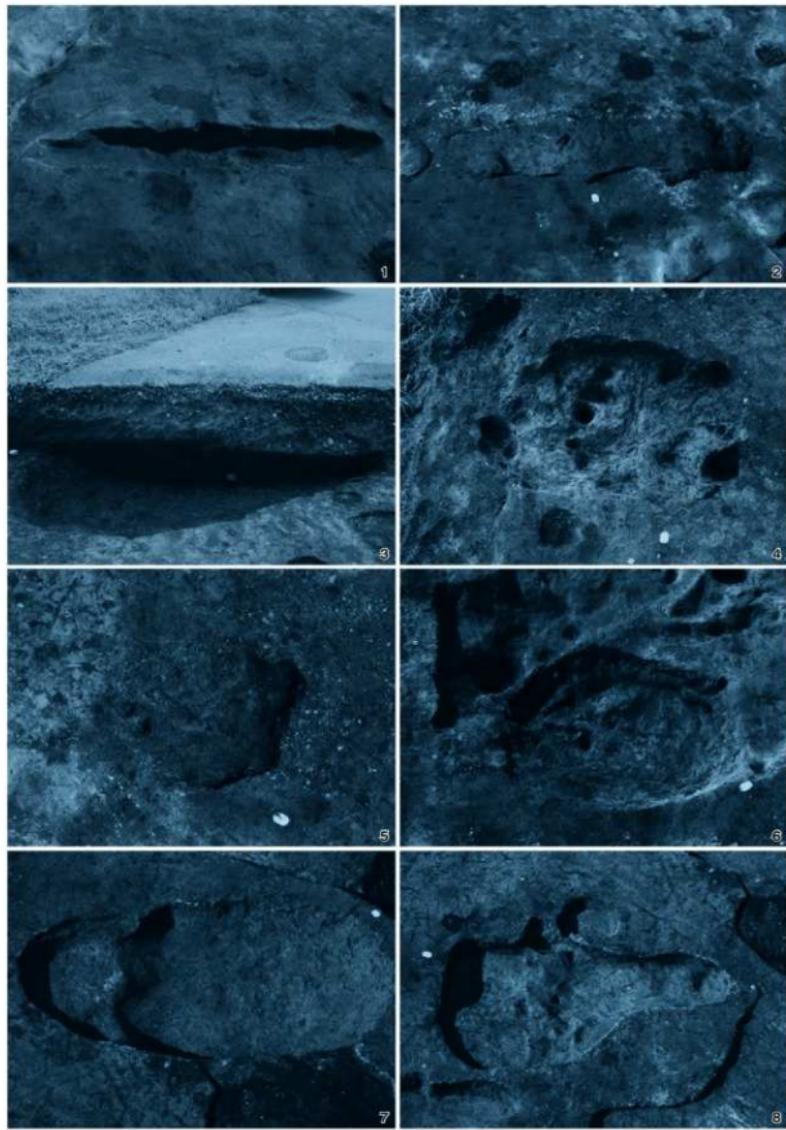
25 土坑(4) 165号土坑

- 1 残状況(南から)
2 土層1(南から)
3 土層2(南から)
4 土層3(南から)
5 完整状況(南西から)



26 土坑 (5)

- 1 166号土坑（南から）
2 167号土坑（西から）
3 168号土坑（南から）
4 171A・B号土坑（東から）
5 174号土坑（東から）
6 174号土坑土器（東から）
7 175号土坑（南から）
8 178号土坑（南東から）



27 土坑 (6)

- 1 182 号土坑 (北西から)
2 182 号土坑 (南東から)
3 184 号土坑 (北から)
4 187 号土坑 (東から)
5 189 号土坑 (南から)
6 190 号土坑 (東から)
7 193 号土坑 (東から)
8 194 号土坑 (東から)



28 溝跡

① 17号溝跡（北西から） ② 18号溝跡（南から）



29 5号周溝墓出土土器（1）(図8-1)



30 5号周溝墓出土土器（2）(図8-1細部・図9-8)



31 5号周溝墓出土土器（3）(図8-17)

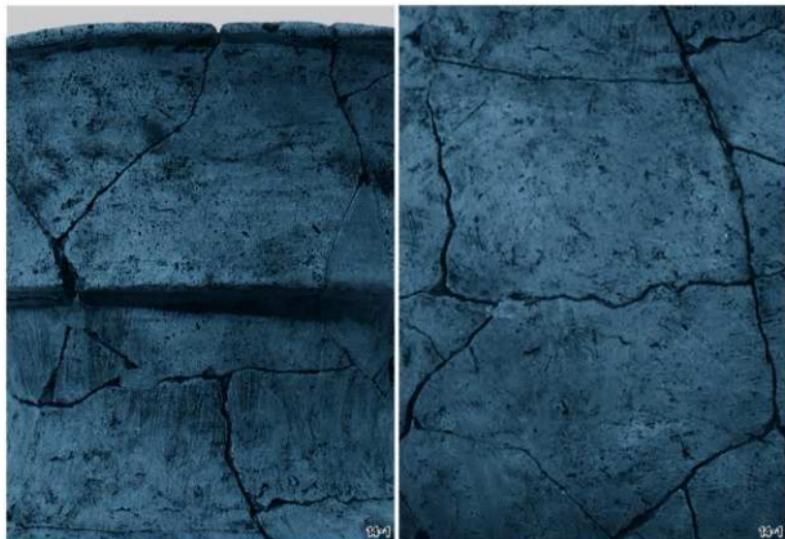


32 5号周溝墓出土土器（4）(図7・8・9)



14-1

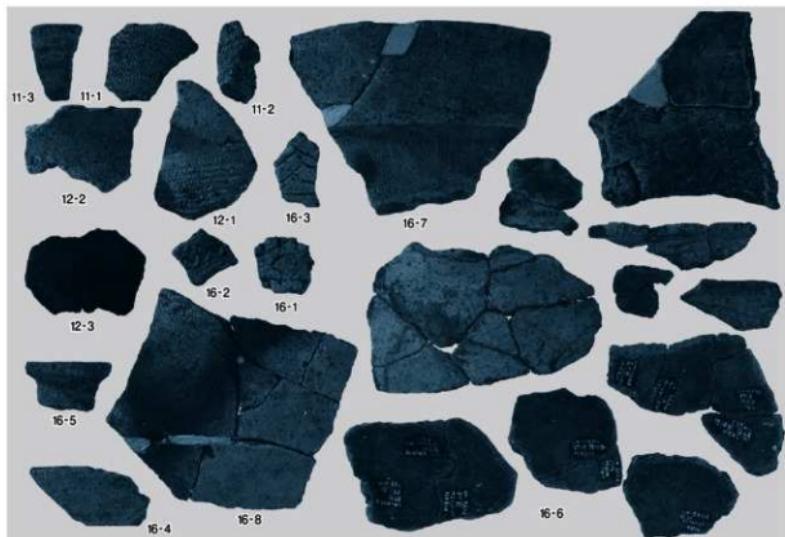
33 26号周溝墓出土土器（图14-1）



34 26号周溝墓出土土器細部（図14-1）



35 26号周溝墓、64号掘立柱建物跡出土土器（図15-3・図29-6）



36 19・25・27号周溝墓出土土器 (図11・12・16)



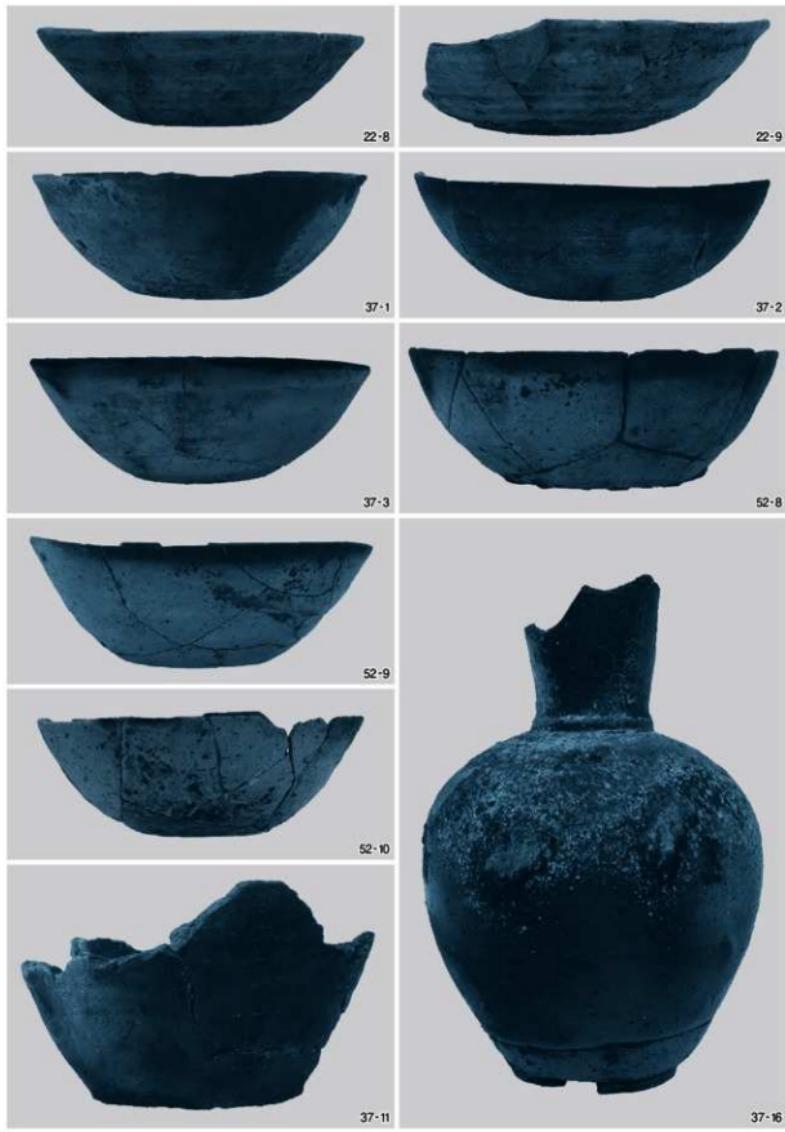
37 26・28号周溝墓出土土器 (図15・17)



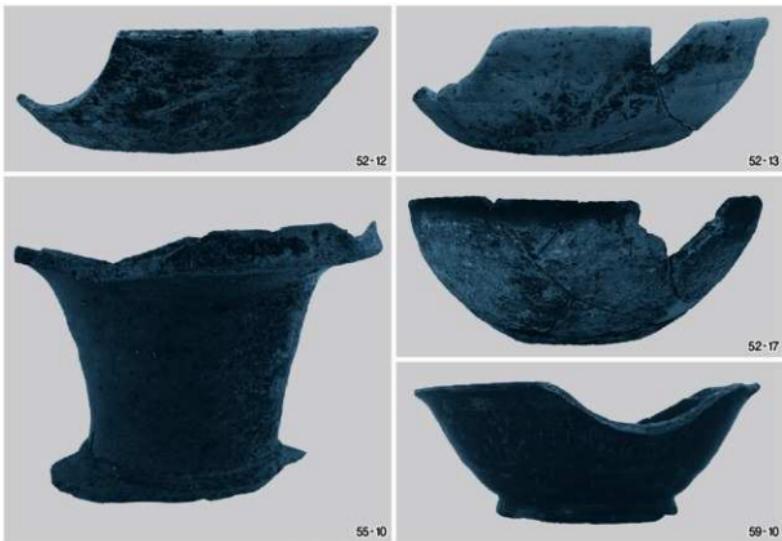
38 29号周溝墓出土土器 (図19・20)



39 164・165号土坑出土土器 (図31・34)



40 9号竪穴状遺構、163・171号土坑出土土器（図22・37・52）



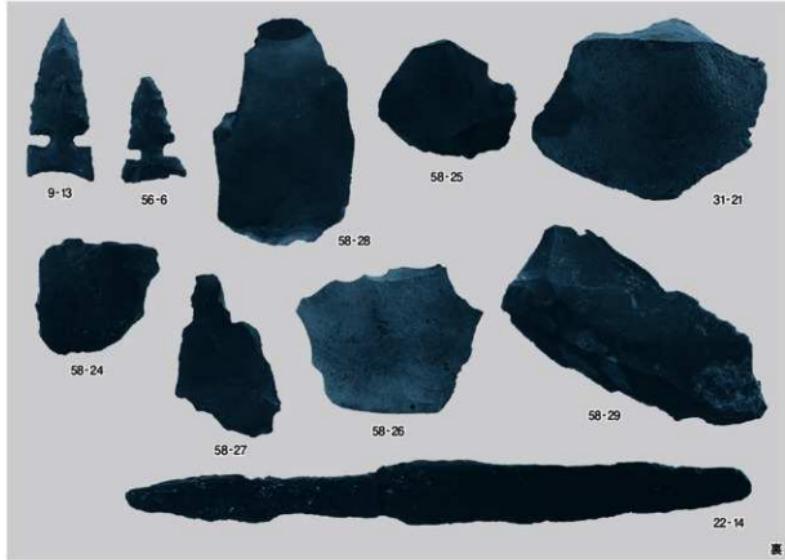
41 171・177号土坑、37号溝跡、遺構外出土土器 (図52・55・59)



42 164号土坑出土木質遺物 (図32)



表

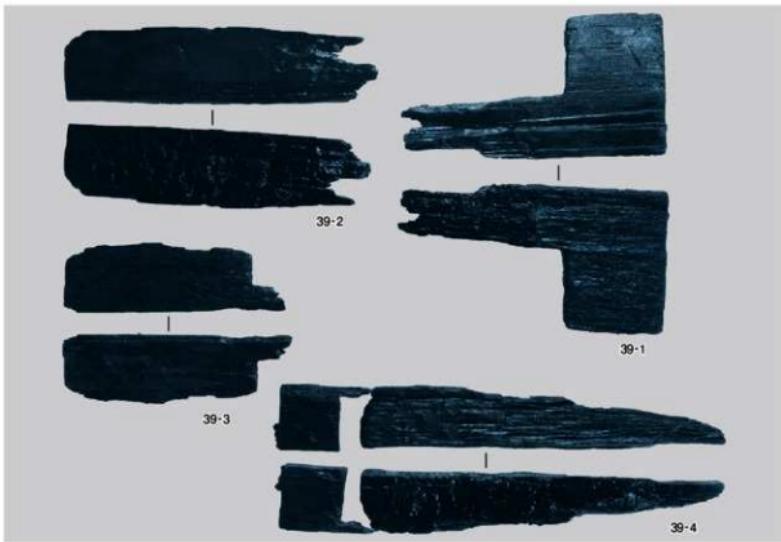


裏

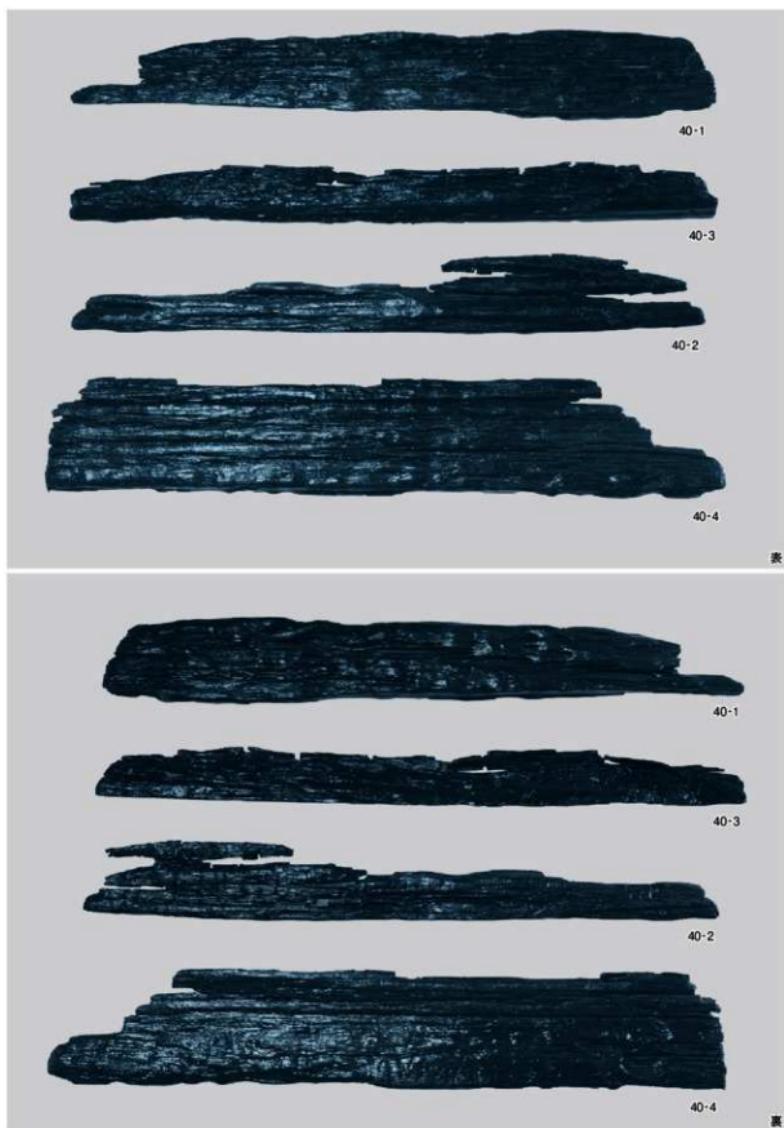
43 石器・鉄製品 (図9・22・31・56・58)



44 163号土坑出土木製品（図38）



45 163号土坑出土戸枠（1）（図39）



46 163号土坑出土井戸枠（2）(図40)



41-1



41-2



42-1



42-2

47 163号土坑出土井戸枠（3）(図41・42)



43-2

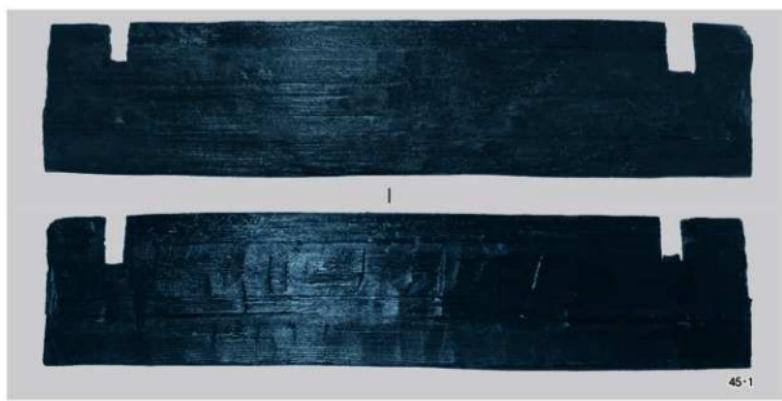


43-1

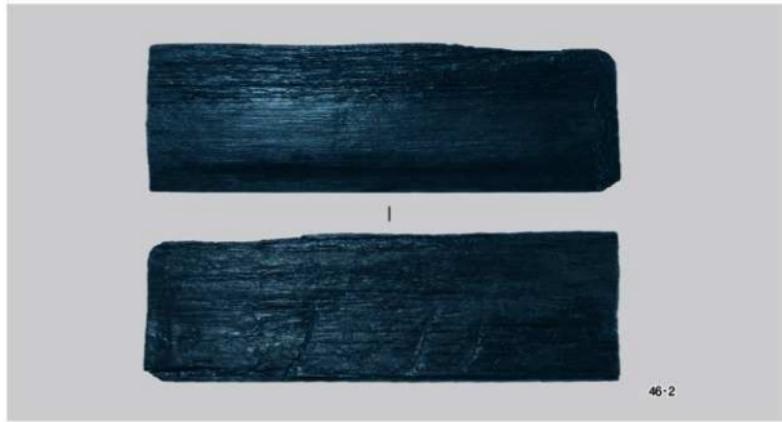


44-1

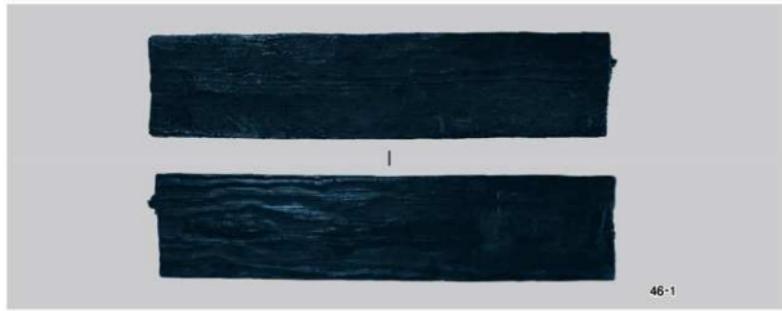
48 163号土坑出土井戸枠（4）(図43・44)



45-1



46-2



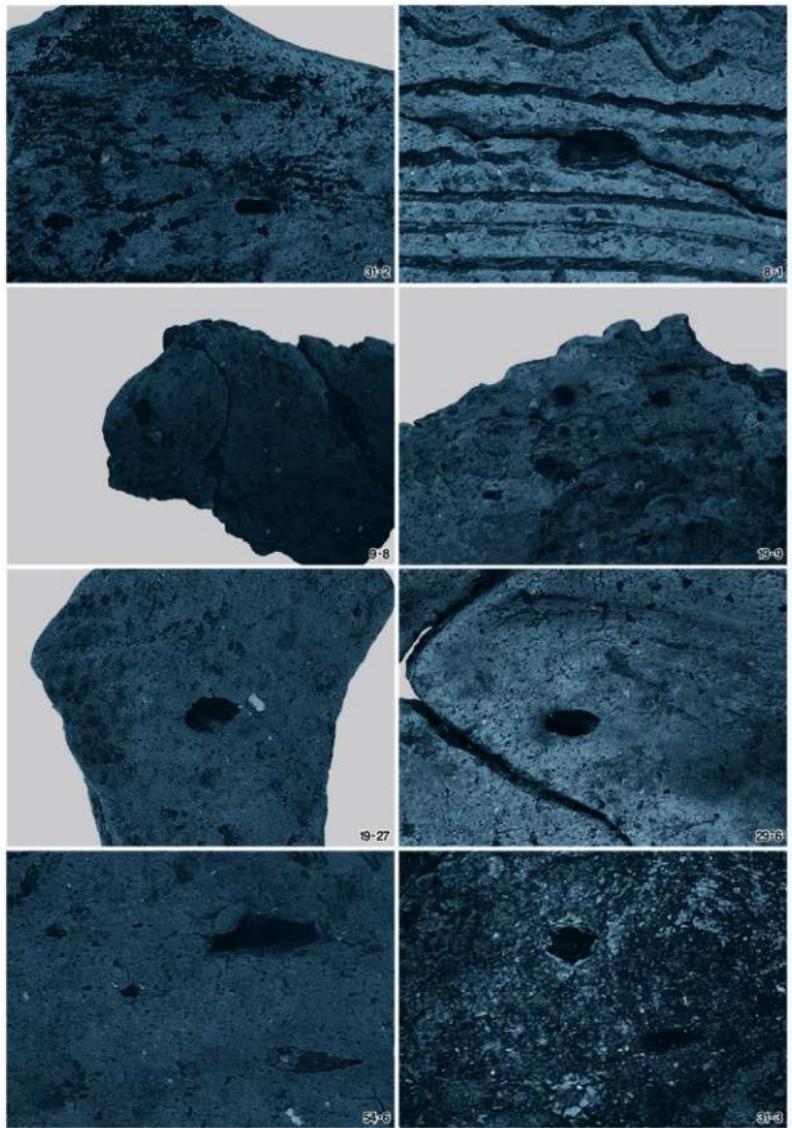
46-1

49 163号土坑出土戸枠（5）(図45・46)



50 切り欠き・工具痕 (図45-1)

- 1 切り欠き (側から)
- 2 小口 (側から)
- 3 工具痕1 (斜めから)
- 4 工具痕2 (上から)
- 5 切り欠き (斜めから)
- 6 切り欠き (側から)
- 7 切り欠き (上から)



51 植物种子压痕

付 章

付章1 桜町遺跡から出土した木質遺物の樹種

株式会社 加速器分析研究所

はじめに

福島県桜町遺跡は、会津盆地中央部の沖積地上に立地する。今回の分析調査では、弥生時代および平安時代の土坑から出土した木材について、樹種を明らかにするために樹種同定を実施する。

1 試 料

同定試料は、弥生時代および平安時代の土坑から出土した木材25点（試料番号1-25）である。

2 分析方法

剃刀を用いて木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

3 結 果

表1 樹種同定結果

試料番号	遺 墓	層位	遺 物 名	時 代	樹 種
1	163号土坑	16	曲物底板	平安時代	スギ
2	163号土坑	17	円 木10	平安時代	エゴノキ属
3	165号土坑	井戸枠残片		弥生時代	トチノキ
4	163号土坑	17	木12	平安時代	スギ
5	163号土坑	井戸内	杭 木5	平安時代	クリ近似種
6	165号土坑	木1		弥生時代	トチノキ
7	163号土坑	井戸枠 西2		平安時代	スギ
8	163号土坑	井戸枠 南1		平安時代	スギ
9	163号土坑	井戸枠 北1		平安時代	スギ
10	165号土坑	ホリカタ	埋木	弥生時代	トチノキ
11	165号土坑	ホリカタ	埋木	弥生時代	トチノキ
12	165号土坑	ホリカタ	埋木	弥生時代	トチノキ
13	164号土坑	埋木1		弥生時代	ケヤキ
14	164号土坑	埋木2		弥生時代	ケヤキ
15	164号土坑	埋木3		弥生時代	ケヤキ
16	164号土坑	埋木5		弥生時代	ケヤキ
17	164号土坑	埋木10		弥生時代	ケヤキ
18	164号土坑	埋木14		弥生時代	ケヤキ
19	164号土坑	埋木15		弥生時代	ケヤキ
20	164号土坑	埋木19		弥生時代	ケヤキ
21	164号土坑	埋木20		弥生時代	ケヤキ
22	164号土坑	埋木21		弥生時代	ケヤキ
23	164号土坑	埋木22		弥生時代	ケヤキ
24	164号土坑	埋木23		弥生時代	ケヤキ
25	164号土坑	埋木24		弥生時代	ケヤキ

る。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・クリ近似種 (cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

木片が小片で、観察範囲が狭いことから、よく似た組織を持つコナラ属コナラ節の可能性も残るため、クリ近似種とした。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列。小管道内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高で階層状に配列する。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

4 考 察

弥生時代および平安時代の土坑から出土した木材には、合計5分類群が認められた。各分類群の材質をみると、針葉樹のスギは、本理が通直で割裂性が高い。広葉樹のクリ近似種は、クリであれば重硬で強度・耐朽性が高い材質を有し、コナラ節の場合にはクリよりも耐朽性が劣るが、強度は高い。ケヤキとエゴノキ属は、重硬で強度が高い材質を有し、ケヤキでは耐朽性も比較的高い。トチノキは、軽軟で強度・保存性は低い。

表2 時期別・器種別種類構成

分類群\器種	弥生時代				平安時代				合計	
	164号土坑		165号土坑		163号土坑					
	自然木	施設	自然木	その他	武器	容器	施設	土木		
針葉樹 スギ						1	3	1	5	
広葉樹 クリ近似種							1		1	
ケヤキ	13								13	
トチノキ		1	3	1		1			5	
エゴノキ属					1				1	
合計	13	1	3	1	1	1	3	1	25	

時期別・器種別の種類構成を表2に示す。弥生時代の資料は、164号土坑から出土した自然木（埋木）、165号土坑から出土した施設材（井戸枠残片）、自然木（埋木）、その他（木）がある。164号土坑の埋木は、調査した13点全てがケヤキに同定された。土坑内からまとまって出土しており、元は同一個体に由来する可能性もある。一方、165号土坑の井戸枠残片、埋木、木は、全てトチノキであった。ケヤキは山地から平地まで分布し、渓谷沿いや沖積地など、水分条件の良い土地に生育する。トチノキも谷沿い等の土壤・水分条件の良い土地によく生育する。今回の同定結果から、本遺跡周辺の沖積地にはケヤキやトチノキが生育していたことが推定される。

平安時代の資料は全て163号土坑から出土しており、武器（弓）、容器（曲物底板）、施設材（井戸枠）、土木材（杭）、その他（木）がある。弓はエゴノキ属であり、強度の高い木材が利用されたことが推定される。福島県内の調査例をみると、会津地域では古代の弓に関する調査例が知られていない。福島県内の中通りや浜通り地域の報告例では、荒田目条里制遺跡（いわき市）でカヤ、御山千軒遺跡（福島市）でカヤとクリ、大猿田遺跡（いわき市）でイヌガヤが報告されている（鳴倉、1983；松田、1998；パリノ・サーヴェイ株式会社、2001）。また、エゴノキ属の検出例は知られていないが、今回の同定結果から、当時の弓に利用されていたことが把握される。

曲物底板、井戸枠、木はスギである。とくに井戸枠は、3点全てがスギに同定されており、スギの選択的利用が推定される。スギが井戸枠に利用される例は、屋敷遺跡（会津若松市）でも報告されており（松田、1991）、会津地域でスギが大型の部材に利用される傾向がある。また、曲物の底板や側板では、御山千軒遺跡でスギが多く利用される結果が報告されている（鳴倉、1983）。土木材はクリ近似種であり、強度の高い木材の利用が推定される。

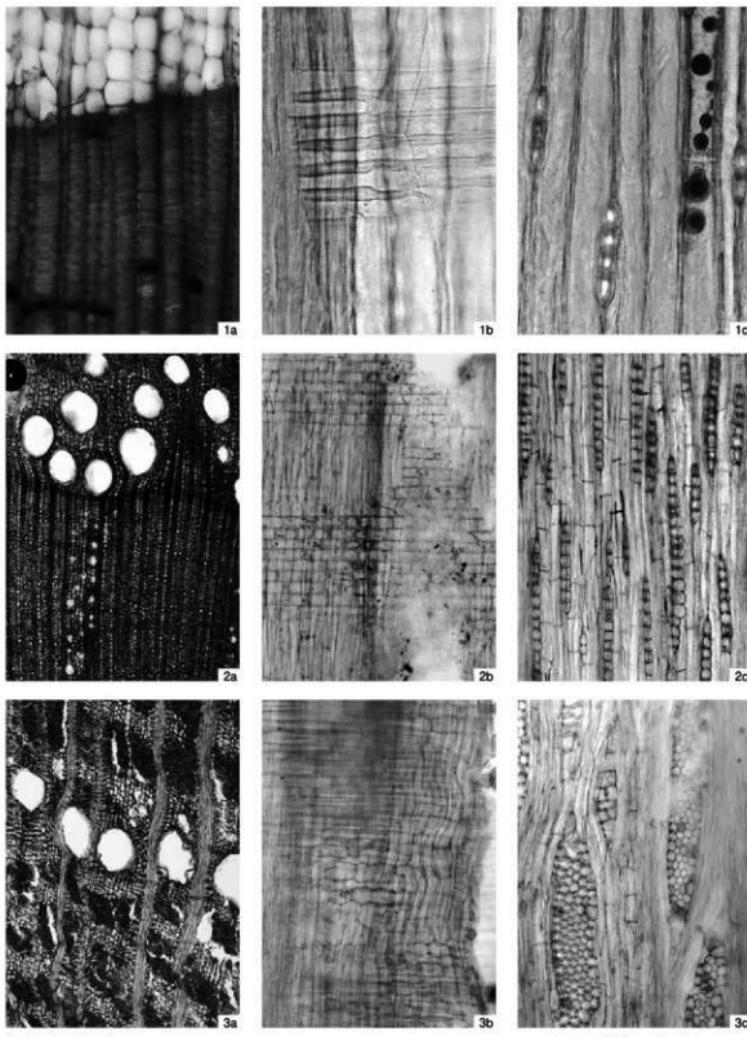
エゴノキ属やクリは二次林の構成種であり、エゴノキ属は林縁部に多くみられる。これらは、現在の植生等を考慮すれば、当時の本遺跡周辺にも生育し、木材の入手は可能であったと考えられる。スギは、会津地域を中心に天然分布がみられることから、会津地域でスギが大型部材に利用されたのは、スギの天然分布を反映した結果と考えられる。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顯微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所,
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81–181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66–176.
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83–201.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30–166.

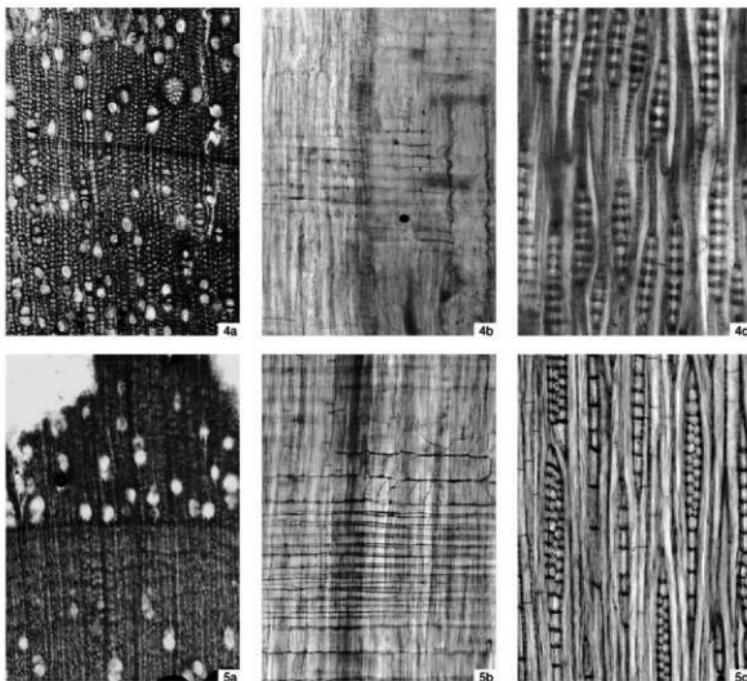
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47–216.
- 松田 隆嗣, 1991, 屋敷遺跡出土木製遺物の用材について, 「東北横断自動車道遺跡調査報告12 屋敷遺跡」, 福島県文化財調査報告書第262集, 福島県教育委員会, 389–396.
- 松田 隆嗣, 1998, 大猿田遺跡出土木遺物の用材について, 「常磐自動車道遺跡調査報告11 大猿田遺跡(2次調査)」, 福島県文化財報告書第341集, 福島県教育委員会, 184–189.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2001, 荒田目条里遺跡から出土木製品の樹種, 「荒田目条里遺跡—古代河川跡の調査ー」, いわき市埋蔵文化財調査報告第75冊, いわき市教育委員会ほか, 281–334.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- 鷗倉巳三郎, 1983, 御山千軒遺跡から出土した木質遺物, 「御山千軒遺跡 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告 VI」, 福島県文化財調査報告第109集, 福島県教育委員会, 9–31.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

※)本分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



1. スギ (試料番号 7)
2. クリ近似種 (試料番号 5)
3. ケヤキ (試料番号 15)
a : 木口, b : 縦目, c : 横目

図版 1 木材(1)



4. ドチノキ (試料番号 12)

5. エゴノキ属 (試料番号 2)
a : 木口, b : 端面, c : 板目

200 μ m : a
100 μ m : b, c

図版2 木材 (2)

付章2 桜町遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定について

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

桜町遺跡（4次）は、福島県河沼郡湯川村桜町字千刈地内（北緯 $37^{\circ}33'07''$ 、東経 $139^{\circ}54'03''$ ）に所在する。測定対象試料は、165号土坑掘形最下層出土クリ皮（26：IAAA-112313）、同土坑覆土出土土器付着炭化物（29：IAAA-112316）、164号土坑掘形埋土出土クルミ殻（27：IAAA-112314）、同土坑覆土出土土器付着炭化物（28：IAAA-112315）の合計4点である（表1）。土器付着炭化物は、28が体部外面、29が口縁部と体部外面より採取された。いずれも炭化物の付着が薄く、29は同一個体と見られる複数の破片の付着物を合わせて1試料とした。

2 測定の意義

会津地域における弥生時代後期後半を代表する本遺跡の資料について年代を測定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として通る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される)。

6 測定結果

165号土坑出土試料の ^{14}C 年代は、掘形最下層出土クリ皮26が $1870 \pm 30\text{yrBP}$ 、覆土出土土器付き炭化物29が $1870 \pm 30\text{yrBP}$ である。埋没の順序としては26が29に先行するが、2点の値は誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲でよく一致し、ほぼ同年代を示す。历年較正年代 (1σ) は、26が $83 \sim 210\text{cal AD}$ 、29が $80 \sim 209\text{cal AD}$ の間に各々3つの範囲で示され、いずれも弥生時代後期頃に相当する。

164号土坑出土試料の¹⁴C年代は、掘形埋土出土クルミ殻27が1790±30yrBP、覆土出土土器付着炭化物28が1960±30yrBPである。埋没過程からは27が28よりも古いことが想定されるが、年代値は28が27より若干古い。曆年較正年代(1σ)は、27が142~318cal ADの間に4つの範囲、28が19~73cal ADの範囲で示され、27は弥生時代後期から古墳時代前期頃、28は弥生時代後期頃に相当する。

なお、今回測定された試料が含まれる1~3世紀頃の曆年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCal09に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾崎2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を曆年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は、クリ皮26とクルミ殻27がどちらも50%を超える適正な値である。土器付着炭化物のうち、29は41%でおおむね適正な値と見られるが、28は19%と低い値を示した。土器付着炭化物を試料とする場合、炭化物とともに土器胎土が混入する場合があり、通常の炭化物よりも炭素含有率が低い試料の結果の解釈には注意する必要がある。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		
					$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112313	26	165号土坑 挖形最下層	クリ皮	AAA	-22.63±0.56	1870±30	79.24±0.26
IAAA-112314	27	164号土坑 挖形埋土	クルミ殻	AAA	-19.64±0.50	1,790±30	80.01±0.25
IAAA-112315	28	164号土坑 覆土	土器付着炭化物	AaA	-20.06±0.46	1,960±30	78.36±0.25
IAAA-112316	29	165号土坑 覆土	土器付着炭化物	AaA	-18.44±0.51	1,870±30	79.19±0.25

[#4817]

文 献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355–363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), 337–360
 Reimer P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51 (4), 1111–1150

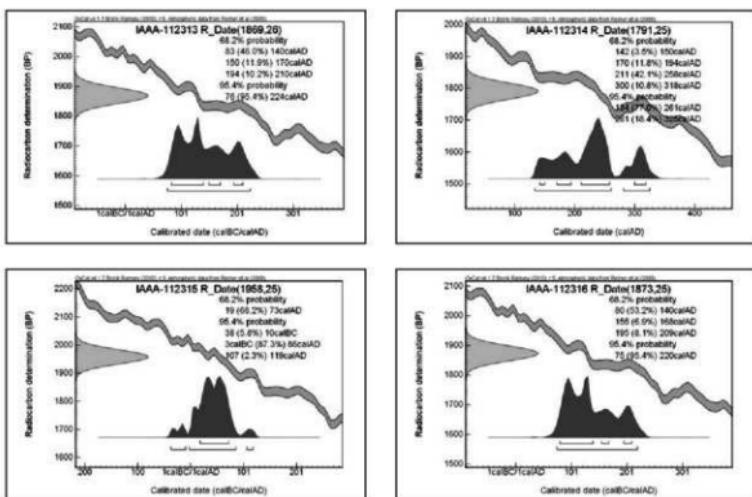
尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代、弥生時代の考古学1
 弥生文化の輪郭、同成社、225–235

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木—弥生から古墳へ—、第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集、(株) 加速器分析研究所、85–90

表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年校正用 (yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA - 112313	1830 ± 20	79.62 ± 0.24	1869 ± 26	83calAD - 140calAD (46.0%) 150calAD - 170calAD (11.9%) 194calAD - 210calAD (10.2%)	76calAD - 224calAD (95.4%)
IAAA - 112314	1700 ± 20	80.89 ± 0.24	1791 ± 25	142calAD - 150calAD (3.5%) 170calAD - 194calAD (11.8%) 211calAD - 258calAD (42.1%) 300calAD - 318calAD (10.8%)	134calAD - 261calAD (77.0%) 281calAD - 325calAD (18.4%)
IAAA - 112315	1880 ± 20	79.16 ± 0.24	1958 ± 25	19calAD - 73calAD (68.2%)	38calBC - 10calBC (5.8%) 3calBC - 86calAD (87.3%) 107calAD - 119calAD (2.3%)
IAAA - 112316	1770 ± 20	80.26 ± 0.24	1873 ± 25	80calAD - 140calAD (53.2%) 155calAD - 168calAD (6.9%) 195calAD - 209calAD (8.1%)	75calAD - 220calAD (95.4%)

[参考値]



[参考] 曆年校正年代グラフ

報告書抄録

ふりがな	あいづじゅうかんきたどうろいせきはくつちょうさほうこく12						
書名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告12						
シリーズ名	福島県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第485集						
編著者名	福島雅儀 福田秀生						
編集機関	財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733						
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111						
発行年月日	2012年12月21日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
桜町(4次)	福島県河沼郡 湯川村大学 桜町手刈	市町村 422	00030	37°33'07" 139°54'03"	2011年6月14日 2011年12月15日	5900m ²	会津縦貫北道路 の建設に伴う事前 調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
桜町(4次)	墳墓 集落跡	弥生時代 平安時代 近現代	周溝墓 8基 周溝状遺構 1基 掘立柱建物跡 6棟 堅穴状遺構 1基 土坑 30基 溝跡 12条 小穴 多数	弥生土器 石器 土師器 須恵器 陶磁器 木製品	桜町遺跡は会津盆地のほぼ 中央部に位置する。 今回の4次調査では、弥生 時代の周溝墓群、平安時代の 集落跡を調査した。		
要約	桜町遺跡4次調査は、1~3次調査区に接する側道部分を発掘調査した。弥生時代後期後半から終末期の周溝墓群と土坑を確認した。平安時代では掘立柱建物跡と井戸跡を確認し、桜町遺跡における平安時代集落のはば全容を把握することができた。井戸跡からは、土器類や瓦・曲物などの木製品が出土し、井戸祭祀の良好な資料が得られた。						

東経緯度数値は世界測地系（平成14年4月1日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第485集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告12

桜町遺跡(4次)

平成24年12月21日発行

編集部 財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部
 発行 福島県教育委員会
 財団法人福島県文化振興財団
 国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所
 印刷 八幡印刷株式会社

(〒960-8115) 福島県福島市山下町1-25
 (〒960-8688) 福島県福島市杉妻町2-16
 (〒960-8116) 福島県福島市春日町5-54
 (〒963-0111) 郡山市安積町荒井字太郎内28-1
 (〒970-8026) いわき市平字田町82-13

